

仙台東災害復旧関連区画整理事業 関係遺跡発掘調査報告 I

－平成26・27年度発掘調査報告書－

屋敷東遺跡第1次、下飯田東遺跡第1次

2017年2月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。この仙台の風景は、私たち市民の誇りであり、将来へ守るべき大切な財産でもあります。

本報告書は、東日本大震災により甚大な被害を受けた仙台東地区における農業の再建を目的として国（農林水産省東北農政局）がすすめる「東部圃場整備事業」に伴い、仙台市教育委員会が平成26・27年度に行った発掘調査の成果をまとめた報告書です。屋敷東遺跡第1次調査、下飯田東遺跡第1次調査の成果および藤田新田遺跡、下飯田遺跡、築道遺跡を対象に実施した試掘・確認調査の成果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な使命であります。それは地域が育んだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底をなしていると考えられるからです。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で資料として活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しまして、ご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成29年2月

仙台市教育委員会
教育長 大越裕光

例　　言

1. 本書は、農林水産省東北農政局による「仙台東災害復旧関連区画整理事業」に伴い、本市教育委員会が平成26・27年度に行った発掘調査の成果をまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は、屋敷東遺跡第1次調査、下飯田東遺跡第1次調査の成果および藤田新田遺跡、下飯田遺跡、築道遺跡を対象に実施した試掘・確認調査の成果を収録している。
本書の内容は、すでに公開されている各種の発表会資料に優先する。
3. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は鈴木隆が行った。
第1～6章－鈴木隆
遺物の基礎整理－実測図作成－佐藤洋、向田整理室作業員　　遺物観察表作成－佐藤洋
遺物図・遺構図デジタルトレース－向田整理室作業員　　遺構記表作成－鈴木隆
遺物写真撮影・図版作成－小林航、向田整理室作業員、鈴木隆　　遺構写真図版作成－鈴木隆
4. 発掘調査および資料の整理に関して、松本秀明教授（東北学院大学地域構想学科・地形学）よりご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表す。
5. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 文中および図中の方位は概ね北を示している。
2. 図中の標高を測定した基準点のデータは平成23年3月11日の東日本大震災以前に測定したものそのまま使用している。
3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し№である。
SD：溝跡　　SI：竪穴住居跡　　SK：土坑　　SX：性格不明遺構　　P：ビット
4. 遺物の略称は以下のとおりである。
A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（非クロロ調整）　　D：土師器（クロロ調整）・赤焼土器
E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦　　H：その他の瓦　　I：陶器　　J：磁器　　K：石器・石製品
L：木製品　　N：金属製品　　P：土製品
5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
6. 遺物実測図中の網点は黒色処理を示している。
7. 遺物観察表の（ ）がついた数値は図上復元した推定値である。
8. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は西暦915年と推定されている。
庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県に分布する灰白色火山灰」について『多賀城跡・昭和54年度発掘調査概報』
宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会2000『沼向遺跡 第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史2003「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山（長白頭）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査要項.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査要項.....	1
I 六郷2ブロックにおける調査.....	1
II 六郷1ブロックにおける調査.....	2
III 六郷3-13-2ブロックにおける調査	2
(1) 平成26年度(3-1ブロック)	2
(2) 平成27年度(3-13-2ブロック)	4
第2章 地理的環境と歴史的環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査の方法と経過.....	7
第1節 調査の方法.....	7
第2節 調査の経過.....	7
I 各ブロックにおける発掘調査.....	7
(1) 六郷2ブロック.....	7
(2) 六郷1ブロック.....	7
(3) 六郷3-1ブロック(H26年度調査分)	9
(4) 六郷3-1ブロック(H27年度調査分)3-2ブロック	9
II 深さ確認調査.....	9
第4章 屋敷東遺跡第1次調査.....	9
第1節 基本層序.....	9
第2節 発見遺構と出土遺物.....	10
I 本調査区(1トレンチ)	10
(1) 溝跡.....	10
(2) 土坑.....	14
(3) ピット.....	15
II 2トレンチ	15
(1) 溝跡.....	15
(2) 土坑.....	16
(3) ピット.....	16
III 3トレンチ	17
(1) 溝跡.....	17
IV 4トレンチ	17
(1) 古墳.....	17
(2) 遺構外出土遺物.....	22
V 5トレンチ	22
(1) 古墳.....	22

(2) 溝跡	25
VII まとめ	24
第5章 下飯田東遺跡第1次調査	25
第1節 基本層序	25
第2節 発見遺構と出土遺物	26
I 本調査区(6・7トレンチ)	27
(1) 溝跡	27
(2) 土坑	36
(3) ピット	38
(4) 遺構外出土遺物	38
II 10トレンチ	38
(1) 堅穴住居跡	38
(2) 溝跡	41
(3) ピット	42
(4) 性格不明遺構	42
(5) 河川跡	42
(6) 遺構外出土遺物	43
III 11トレンチ	43
(1) 河川跡	43
IV まとめ	43
第6章 総括	44
第1節 第1浜堤列の検出範囲について	44
第2節 遺構の変遷について	48
I 古墳時代前期(4世紀)	48
II 古墳時代中期(5世紀)	48
III 古墳時代後期～奈良時代(6～8世紀)	49
IV 平安時代(9～10世紀)	49

挿図目次

第1図 六郷地区ブロック区分図	2	第11図 同 4トレンチ平面・断面図	19・20
第2図 周辺地形分類図	5	第12図 同 1号墳周溝出土遺物(1)	21
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡	6	第13図 同 1号墳周溝出土遺物(2)	22
第4図 調査区全体配置図	8	第14図 同 5トレンチ平面・断面図	23
第5図 屋敷東遺跡第1次調査区配置図	10	第15図 同 SD9溝跡他出土遺物	24
第6図 同 本発掘調査区平面・断面図	11・12	第16図 下飯田東遺跡第1次調査基本層柱状模式図	25
第7図 同 本発掘調査区遺構断面図	13	第17図 同 調査区配置図	27
第8図 同 2トレンチ平面・断面図	16	第18図 同 本発掘調査区平面・断面図	28
第9図 同 3トレンチ平面・断面図	18	同 本発掘調査区平面・断面図(土層注記表)	29・30
第10図 同 SD2溝跡出土遺物	18	第19図 同 本発掘調査区SD2溝跡一括出土遺物(1)	31

第 20 図 同 本発掘調査区 SD2 溝跡一括出土遺物 (2) …… 32	第 25 図 同 10 トレンチ SD19 溝跡他出土遺物 …… 42
第 21 図 同 本発掘調査区 SD6 溝跡他出土遺物 …… 34	第 26 図 同 11 トレンチ平面・断面図 …… 43
第 22 図 同 本発掘調査区造構外出土遺物 …… 37	第 27 図 浜堤構成砂確認箇所の位置と標高 …… 45
第 23 図 同 10 トレンチ平面・断面図 …… 39	第 28 図 下飯田東遺跡および周辺における 浜堤構成砂の範囲… 46
第 24 図 同 10 トレンチ豊穴住居跡出土遺物 …… 40	

挿表目次

第 1 表 仙台東災害復旧関連区画整理事業 関連遺跡一覧表	1
第 2 表 ブロック別発掘調査一覧表.....	3

写真図版目次

写真図版 1 六郷 1 ブロックの調査	52	写真図版 17 同 出土遺物 (2)	68
写真図版 2 六郷 3-1 ブロックの調査 (H26 年度調査).....	53	写真図版 18 下飯田東遺跡第 1 次調査 (1)	69
写真図版 3 六郷 3-13-2 ブロックの調査 (H27 年度調査).....	54	写真図版 19 同 (2)	70
写真図版 4 六郷 2 ブロックの調査 (1)	55	写真図版 20 同 (3)	71
写真図版 5 同 (2)	56	写真図版 21 同 (4)	72
写真図版 6 六郷 2 ブロックにおける深さ確認調査 (1)	57	写真図版 22 同 (5)	73
写真図版 7 同 (2)	58	写真図版 23 同 (6)	74
写真図版 8 屋敷東遺跡第 1 次調査 (1)	59	写真図版 24 同 (7)	75
写真図版 9 同 (2)	60	写真図版 25 同 (8)	76
写真図版 10 同 (3)	61	写真図版 26 同 (9)	77
写真図版 11 同 (4)	62	写真図版 27 同 (10)	78
写真図版 12 同 (5)	63	写真図版 28 同 (11)	79
写真図版 13 同 (6)	64	写真図版 29 同 (12)	80
写真図版 14 同 (7)	65	写真図版 30 同 出土遺物 (1)	81
写真図版 15 同 (8)	66	写真図版 31 同 出土遺物 (2)	82
写真図版 16 同 出土遺物 (1)	67	写真図版 32 同 出土遺物 (3)	83
		写真図版 33 同 出土遺物 (4)	84

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

平成26年5月1日付で農林水産省東北農政局仙台東土地改良建設事業所長より、「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成26年5月14日付H26教文第501号により回答）が提出された。それにより、仙台東災害復旧閑連区画整理事業と遺跡との関わりが確認され、宮城県教育委員会文化財保護課による指導に基づいて、事業対象地27ブロックのうち、7ブロック、15遺跡が文化財保護法第94条による協議対象とされた（第1表）。

平成26年度（一部は27年度に実施）においては、東北農政局との調整により、六郷2・1・3-1・3-2ブロック（第1図）における屋敷東遺跡、藤田新田遺跡隣接地、下飯田遺跡、同隣接地、築道遺跡を対象として、試掘・確認調査および一部本発掘調査を実施した（第2表）。調査対象となった工事内容は、水路工事および表土漉き取り工事である。

調査は、六郷2ブロックの屋敷東遺跡より開始した。屋敷東遺跡では、水路工事箇所を対象に本発掘調査（1T：Tはトレンチの略。以下同じ）、表土漉き取り箇所を対象に確認調査（2～5T）をそれぞれ実施した。下飯田東遺跡は、今回の調査成果に基づき、下飯田薬師堂古墳の北側隣接地において新規登録された遺跡である。当初、この範囲における調査予定は無く、藤田新田遺跡の東側隣接地で1箇所の試掘調査を行う予定であったが、屋敷東遺跡で2基の古墳を確認したことから、その南に位置する下飯田薬師堂古墳との中间部分においても古墳の有無について調査することとなった。そのため、藤田新田遺跡の東側隣接地から下飯田薬師堂古墳の北側まで、水路工事箇所を対象に9箇所のトレンチを設定した。そして、6・7Tより遺構、遺物が確認されたため本発掘調査に移行し、遺跡は平成26年9月に「下飯田東遺跡」として新規登録された（宮城県遺跡登録番号01574）。また、本発掘調査区周辺の遺構確認を目的として2箇所に確認調査区（10・11T）を設定した。

六郷1・3-1・3-2ブロックにおける下飯田遺跡、築道遺跡の調査は、六郷2ブロックにおける調査終了後、平成26年11月から開始した。この内、六郷1ブロックと3-1ブロックの一部については、翌年1月までに調査を終了したが、六郷3-1ブロックの一部と3-2ブロックにおける調査については、東北農政局との調整の結果、次年度の平成27年11～12月にかけて実施することとなった。

番号	道路名	ブロック名	対象範囲	文書番号	対応	備考
1	屋敷東遺跡	六郷2	範囲内	H26年5月28日付文第555号	確認調査・本発掘調査	
2	藤田新田遺跡	六郷1	隣接地	H26年5月28日付文第556号	試掘・確認調査	
3	下飯田薬師堂古墳	六郷2	範囲外	—	試掘調査	確認調査・本発掘調査
4	下飯田遺跡	六郷2	隣接地	H26年5月28日付文第555号	試掘調査	
5	築道遺跡	六郷1 六郷2 六郷3-1 六郷3-2	範囲内 範囲内 範囲外 隣接地	H26年5月28日付文第556号 H26年5月28日付文第555号 H26年11月14日付文第2126号 H26年11月14日付文第2127号	確認調査 確認調査 確認調査 試掘・確認調査	確認調査 確認調査 確認調査 試掘調査
6	下糞井遺跡	六郷3-1	範囲外	H26年11月14日付文第2126号	確認調査	
7	二木船跡	七郷6	範囲内	H26年8月6日付文第1237号	工事立会	
8	高田B遺跡	七郷3-1	範囲外	—	調査不要	
9	高田A遺跡	七郷3-1	範囲外	—	調査不要	
10	今森遺跡	七郷3-2	範囲外	—	調査不要	
11	田山神屋敷跡	六郷5	隣接地	H28年6月3日付文第672号	試掘調査	
12	高田B遺跡	六郷5	範囲外	H28年6月3日付文第672号	本発掘調査	
13	高田A遺跡	六郷5	範囲外	—	調査不要	
14	今泉遺跡	六郷5	隣接地	H28年6月3日付文第672号	試掘調査	
15	田山神屋敷跡	高郷2	隣接地	H29年2月8日付文第275号	工事立会	

第1表 仙台東災害復旧閑連区画整理事業 間連遺跡一覧

第2節 調査要項

I. 六郷2ブロックにおける調査

遺跡名 屋敷東遺跡（宮城県遺跡登録番号01323）

下飯田東遺跡（宮城県遺跡登録番号01574）

藤田新田遺跡（宮城県遺跡登録番号01028）隣接地

下飯田薬師堂古墳（宮城県遺跡登録番号01207）隣接地

下飯田遺跡（宮城県遺跡登録番号01434）隣接地

調査地点	仙台市若林区下飯田地内および三本塚地内
調査期間	平成26年6月23日～9月19日
調査対象面積	87.3ha
調査面積	屋敷東遺跡：288.3m ² （本発掘調査区、2～5T） 下飯田東遺跡：212.7m ² （本発掘調査区、10・11T） 藤田新田遺跡隣接地・下飯田薬師堂古墳隣接地：62.6m ² （1～5・8・9T） 下飯田遺跡隣接地：9.3m ² （1T）
調査原因	圃場整備事業
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主任 鈴木隆、主事 小林航、同 小泉博明、同 黒田智章、文化財教諭 千葉悟、同 早坂純一、同 小山紘明

II. 六郷1ブロックにおける調査

遺跡名	藤田新田遺跡（宮城県遺跡登録番号01028） 下飯田遺跡（宮城県遺跡登録番号01434）
調査地点	仙台市若林区沖野地内、荒井地内、上飯田地内、下飯田地内
調査期間	平成26年11月14日～12月4日
調査対象面積	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削幅1.3～1.5m、掘削深0.8～1.0m、長さ14km ③排水路工：掘削幅3.1～4.3m、掘削深1.0～2.3m、長さ12.3km ④道路工：長さ11.1km ⑤揚水木工：1ヶ所
調査面積	藤田新田遺跡：96.4m ² (1～4・7・8T) 下飯田遺跡：18.6m ² (13T)

調査原因	圃場整備事業
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主事 小泉博明、 文化財教諭 小山紘明

III. 六郷3-1・3-2ブロックにおける調査

(1) 平成26年度(3-1ブロック)	
遺跡名	下飯田遺跡 (宮城県遺跡登録番号01434)
調査地点	仙台市若林区下飯田地内
調査期間	平成26年12月15日(月) ～平成27年1月8日(木)
	(塙ビ管径100～300mm、掘削幅0.5～0.8m、掘削深0.6～0.9m)



第1図 東部圃場整備事業六郷地区ブロック区分図

工事プロック名	調査NO.	対象道路名	工事内容	トレンチ	調査日	測量区間m	測量区間m	浜地盤成層	備考
六郷2	H26-18	下飯田通跡	水路	本免掘削区(1)	H26.6.23～7.14	2.4×48.0	115.2	○	浜地盤、土壌、ビット1ト
			水路	2	H26.6.24～7.2	3.1×10.4	33.2	○	レンド
			水路	3	H26.7.1～7.2	3.1×10.7	33.2	○	浜地盤、土壌、ビット
			水路	4	H26.7.2～8.11	2.0×38.0	74.0	○	清流
			水路	5	H26.7.3～8.11	3.1×10.7	33.7	○	一部鉢輪、古墳
	H26-45	下飯田通跡	表土堆取	10	H26.8.18～9.17	1.5×62.2	93.5	○	浜地盤、土壌、ビット
			水路	11	H26.8.25～9.18	3.2×10.4	33.3	×	豊穴性砂質、土壌、ビット1。
			水路	1	H26.7.24～8.4	1.6×5.0	8.0	×	河川跡
			水路	2	H26.7.24～8.4	1.7×5.1	8.7	○	河川跡
			水路	3	H26.7.24～8.4	1.8×4.9	8.8	×	河川跡
六郷1	H26-53	下飯田通跡	水路	4	H26.7.23～8.4	1.8×5.0	9.0	×	浜地盤、航路後、本
			水路	5	H26.7.23～8.4	1.6×7.2	11.5	×	浜地盤、航路後、本
			水路	6	H26.7.18～8.18	-	-	-	浜地盤、航路後、本
			水路	7	H26.7.22～8.18	-	-	-	浜地盤、航路後、本
			水路	8	H26.7.22～8.12	1.7×5.2	8.8	○	浜地盤、航路後として登録
	H27-39	下飯田通跡	水路	9	H26.7.23～8.12	1.6×4.9	9.3	×	浜地盤、航路後として登録
			水路	1	H26.8.5～8.7	1.9×4.9	9.3	×	浜地盤、航路後として登録
			表土堆取	1～27	H26.10.9	0.3×0.3	2.4	3.4.8.12.25.27で確認	調査面積は27ヶ所分の合計
			水路	1	H26.11.14～11.28	2.0×8.7	17.4	○	浜地盤、航路後
			水路	2	H26.11.14～11.28	2.2×11.1	24.4	○	浜地盤、航路後
六郷3-4	H27-39	下飯田通跡	水路	3	H26.11.17～12.21	1.5×10.1	15.2	○	浜地盤、航路後
			水路	4	H26.11.17～11.21	1.3×10.5	13.7	○	浜地盤、航路後
			水路	7	H26.11.21～12.2	1.8×7.0	12.6	○	浜地盤、航路後
			水路	8	H26.11.21～12.2	1.8×7.3	13.1	○	浜地盤、航路後
			水路	13	H26.12.2～12.3	1.9×9.8	18.6	×	浜地盤、航路後
	H27-39	下飯田通跡	水路	1	H26.12.15～12.24	2.2×7.9	17.4	×	浜地盤、航路後
			水路	2	H26.12.15～12.24	1.9×9.5	20.0	○	浜地盤、航路後
			水路	3	H26.12.15～12.24	2.1×4.3	9.0	○	浜地盤、航路後
			水路	4	H27.1.17～1.18	2.5×5.1	12.8	×	浜地盤、航路後
			水路	1	H27.1.17～11.27	2.4×10.1	24.2	○	浜地盤、航路後
六郷3-4・3-2	H27-39	下飯田通跡	水路	2	H27.1.17～11.27	2.0×10.3	20.6	○	浜地盤、航路後
			水路	3	H27.1.18～11.27	2.0×8.7	17.4	○	浜地盤、航路後
			水路	4	H27.1.21～12.2	2.1×8.0	16.8	○	浜地盤、航路後
			水路	1	H27.1.27～12.10	1.3×6.7	8.7	○	浜地盤、航路後
			水路	2	H27.12.7～12.10	1.3×6.3	8.2	×	浜地盤、航路後
			水路	3	H27.12.7～12.10	1.3×6.0	7.8	×	浜地盤、航路後

第2表 プロック別発掘調査一覧

調査面積	59.2m ² (1 ~ 4T)
調査原因	圃場整備事業
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 小泉博明、文化財教諭 小山祐明
(2) 平成27年度 (六郷3・1・3-2ブロック)	
遺跡名	下飯田遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01434) 築道遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01311)
調査地点	仙台市若林区下飯田内地
調査期間	下飯田遺跡：平成27年11月17日～12月2日、 築道遺跡：平成27年12月7日～12月10日
調査対象面積	下飯田遺跡：152.0m ² (用水路工 : L190 × W0.8 m), 築道遺跡：124.8m ² (配水路工 : L 48 × W2.6 m)
調査面積	下飯田遺跡 : 79.0m ² (1 ~ 4T) 築道遺跡 : 24.7m ² (1 ~ 3T)
調査原因	圃場整備事業
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	下飯田遺跡：主査 平間亮輔、文化財教諭 吉田真太郎、同 佐藤慶一 築道遺跡：主査 平間亮輔、文化財教諭 吉田真太郎

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

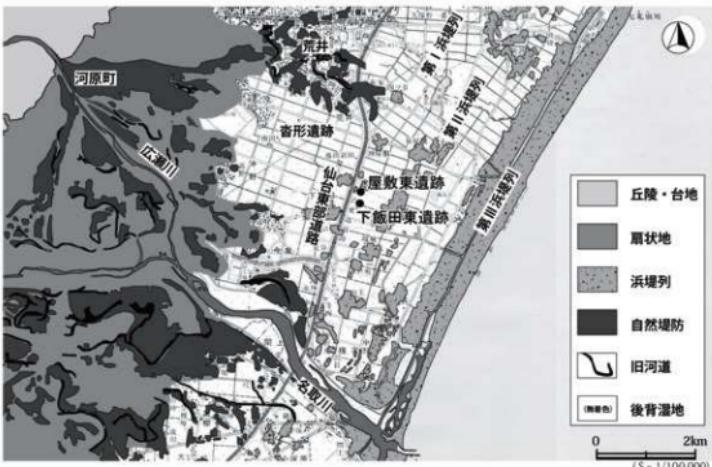
屋敷東遺跡、下飯田東遺跡は、仙台市若林区下飯田にあり、JR 仙台駅の南東約 7.7km の地点に位置する。2 遺跡が位置する仙台平野中部は、その西半部が主に広瀬川により形成された扇状地、東半部が海に面する沖積低地となっている。沖積低地では、海岸線の後退に伴い形成された 3 列の浜堤列が確認されている（松本 1984）。その形成年代は、第Ⅰ浜堤列が約 5,000 ~ 4,500 年前、第Ⅱ浜堤列が約 2,600 ~ 1,700 年前、第Ⅲ浜堤列が約 800 ~ 700 年前から現在にかけてとされている。一方、扇状地上には、河原町付近から放射状に延びる自然堤防群が発達する。若林区南小泉付近から大きく南北 2 条に分かれ、それぞれ末端は第Ⅰ浜堤列に達する（第2図）。

今回報告する 2 遺跡および周辺の藤田新田遺跡、下飯田遺跡、下飯田薬師堂古墳は、共に第Ⅰ浜堤列上に立地する。現海岸線までの距離は、2.6 ~ 2.8km である。現地表面の標高は、藤田新田遺跡が 1.4 ~ 2.0 m と比較的高く、次いで屋敷東遺跡が 1.1 ~ 1.6 m、下飯田遺跡が 1.0 m 前後、下飯田東遺跡が 0.5 ~ 0.9 m と順次低くなる。

いずれの遺跡も、土地区画整理による地形的平坦化が進んでおり、現在、本来的な地形の認証は困難である。しかし、遺跡形成時の景観は、浜堤列と後背湿地からなる地形に数条の河川が入り組んだ、比較的変化に富む特徴を有していたものと推定される。

第2節 歴史的環境

屋敷東遺跡、下飯田東遺跡周辺における歴史的環境について概観する。南小泉付近で南北に分岐し、第Ⅰ浜堤列へと至る自然堤防上には、多くの遺跡が立地する（第3図）。高田B遺跡、今泉遺跡では、縄文時代後期から晩期に属する遺構、遺物が確認されている。第Ⅰ浜堤列上においても、下飯田遺跡から同時期とみられる土器が少量出



第2図 周辺地形分類図（松本・吉田 2010 を一部変更）

土しているが、明確な遺構は確認されていない。仙台平野沿岸部におけるこの時期の集落形成は、自然堤防上を中心に戻したとのと推定される。

弥生時代には、自然堤防上および後背湿地により多くの遺跡が戻する。自然堤防上に立地する中在家南遺跡や押口遺跡の河川跡からは、中期中葉の土器や石器、多量の木製品が出土しており、中在家南遺跡では墓域も確認されている。また、自然堤防に接した後背湿地に立地する香形遺跡、荒井南遺跡では、広範囲に亘る水田跡が確認されている。一方、浜堤上に立地する藤田新田遺跡、下飯田遺跡からは、ほぼ同時期とみられる土器が河川跡より出土しているが、現状では、明確な遺構がなく集落の存在は認められない。

香形遺跡と荒井南遺跡における弥生時代中期の水田跡は、約2,000年前の津波により廃絶したことが、近年の発掘調査により明らかにされている（仙台市教育委員会2010、同2012、同2014）。この津波以降、仙台平野東部の自然堤防や浜堤上では、弥生時代を通じ集落の形成がみられず、狩猟や漁撈活動等に伴う一時的な活動の場となつた可能性が指摘されている（斎野2012）。

第1浜堤列上に集落が形成されるのは、古墳時代前期（4世紀）である。藤田新田遺跡では、竪穴住居跡、方形周溝墓が確認されている。この遺跡は、中期（5世紀）の竪穴住居跡も多数確認されていることから、古墳時代前・中期を通してこの地域における中心的な集落であったと考えられる。今回、屋敷東遺跡で確認した2基の古墳は、この集落に伴う墓域を形成するものと考えられる。

古墳時代後期から奈良時代（7～8世紀）にかけては、藤田新田遺跡で7世紀代、下飯田遺跡で7世紀後半を主体とする複数の竪穴住居跡が確認されている。遺構数や密度からみた集落規模の比較では、下飯田遺跡がより中心的であったと考えられる。今回調査した下飯田東遺跡では、7世紀末から8世紀前葉とみられる竪穴住居跡を確認した。この時期、集落の中心は、藤田新田遺跡から、より南側に位置する下飯田遺跡やその周辺へ移動したものと考えられる。この時期、仙台平野においては、官衙の成立や律令体制の波及に伴う人や物の移動が活発化しており、下飯田遺跡他における集落の成立も、このような社会変化の中で理解する必要がある。なお、下飯田遺跡や下飯田東遺跡では、人・物の移動や交流を示唆する遺構、遺物が確認されている。

平安時代においては、藤田新田遺跡から10世紀前半を中心とする掘立柱建物跡や水田跡が確認されている、また、その東側を流れる河川跡からは、これらの遺構と同時期の土師器（墨書き土器を含む）、須恵器等が多量出土している。なお、屋敷東遺跡、下飯田東遺跡においても10世紀代の土師器は出土しているが、集落の存在は未確



No.	道路名	種別	立地	時代
1	屋敷東道路	敷布地	浜堤	古墳・平安
2	下飯田東道路	集落跡	浜堤	古墳・奈良
3	下飯田桑加古占塚	円墳	浜堤	古墳
4	藤田新田道路	集落跡、方形周溝墓、水田跡	浜堤	弥生
5	藤田新田道路	集落跡、田畠跡	浜堤	古墳～近世
6	禁治四道路	敷布地	浜堤	奈良・平安
7	岡崎四道路	敷布地	浜堤	中世・近世
8	木前路道路	城郭跡	浜堤	安土桃山
9	市小呂道跡	集落跡、田畠跡	自然堤防・後背湿地	弥生～近世
10	原日坂土墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
11	若林城跡	円墳、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳・平安・中世～江戸
12	沖野城跡	城館跡	自然堤防・後背湿地	中世・近世
13	鶴ケ谷郊塚里跡	塚原跡	自然堤防	奈良・平安
14	中在家南道路	上器棺墓、土壤墓、方形周溝墓、河川跡、水田跡	自然堤防	弥生～古世
15	中在家道跡	包合地	自然堤防	平安
16	長吉城跡	城館跡	自然堤防	中世
17	高岡敷道路	敷布地	自然堤防	古墳・平安
18	押山道路	河川跡、水田跡、包合地	自然堤防	奈良・平安
19	荒井畠中道路	敷布地	自然堤防	古墳～平安
20	荒井道跡	城館跡	自然堤防	中世
21	荒井南道路	水田跡	後背湿地	弥生
22	下瓦井道路	敷布地	自然堤防	平安
23	荒井庄瀬道路	河川跡	自然堤防	弥生・古墳
24	登野道路	水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～中世
25	上屋敷道路	敷布地	自然堤防	古墳・奈良～平安
26	高岡八道跡	包合地	自然堤防	弥生・古墳・平安
27	高岡庄跡	集落跡、田畠跡、水田跡、河川跡	自然堤防	繩文・古墳・平安～近世
28	今泉道路	集落跡、城館跡、包合地	自然堤防	繩文～近世

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

認である。

中・近世においては、下飯田遺跡から13～14世紀の屋敷跡が確認されている。また、近世の遺物は、藤田新田遺跡、下飯田遺跡の双方で出土している。この地域一帯は、旧宮城郡と旧名取郡の境界地にあたり、近世初期に仙台藩の政策として新田開発が行われている。

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

各ブロックにおける工事箇所に対し、試掘・確認調査および本発掘調査を実施した。各調査区と工事内容の関係については第2表のとおりである。

調査では、表土を重機により除去した後、人力による遺構精査を行った。各調査区の平面図は、原則的に平板測量により作成した ($S=1/40$)。本発掘調査区および遺構等が確認された調査区については、調査区壁面の断面図を作成し ($S=1/20$)、その他の調査区については、柱状断面図を作成した ($S=1/20$)。野外調査における写真撮影は、デジタルカメラを使用した。

発生した堆土は、調査区の脇に仮置きしたが、現水田区画内に置く場合には、下に養生シートを敷き、埋め戻し後に堆土が残存しないよう配慮した。

第2節 調査の経過

I. 各ブロックにおける発掘調査

以下、ブロック毎に調査の経過について述べる。各調査の期間、調査面積等については第2表、調査区の全体配置については第4図のとおりである。

(1) 六郷2ブロック

屋敷東遺跡では、水路工事箇所に本発掘調査区 (1T)、表土漉き取り箇所に4箇所の確認調査区 (2~5T) を設定した。調査は、平成26年6月23日に着手した。この内2~5Tの調査は、遺構確認のみを目的とした。各調査区とも重機により表土等を掘削し、Ⅲ層(浜堤堆積土)上面で遺構精査を行った。

1Tでは溝跡・土坑等を検出したため、本発掘調査を実施した。2~3Tでは溝跡他の遺構を確認した。4Tでは古墳の周溝および一部積土を確認した(1号墳)。古墳の全体規模を把握するため、調査区北側に 7.5×1.5 m、南側に 19.5×1.5 mの拡張区を設定した。5Tでは古墳周溝(2号墳)、溝跡を確認した。

藤田新田遺跡隣接地では、当初1箇所の試掘調査を予定していたが、屋敷東遺跡で古墳が検出されたため、下飯田薬師堂古墳の北側隣接地を調査し、古墳等の有無を確認することとなった。試掘調査区は、水路掘削予定地の現農道部分における東西270mの範囲に9箇所を設定した。調査区は西から順に1~9Tとした。

このうち6~7Tから、溝跡、土坑、土器等を確認したため、両トレンチを拡張して一つの調査区とし、本発掘調査を実施した。また、周辺の遺構確認を目的とし、本発掘調査区の南側に10T、同じく北側に11Tを設定した。10Tでは堅穴住居4軒の他、溝跡、土坑、ピット、河川跡を確認した。11Tでは東西方向に延びる河川跡を確認した。

これらの調査結果を受け、当該地を「下飯田東遺跡」として登録した。遺跡範囲の設定は、遺構が確認された箇所を中心にして、浜堤を基盤とする微高地状の高まり部分について行った。

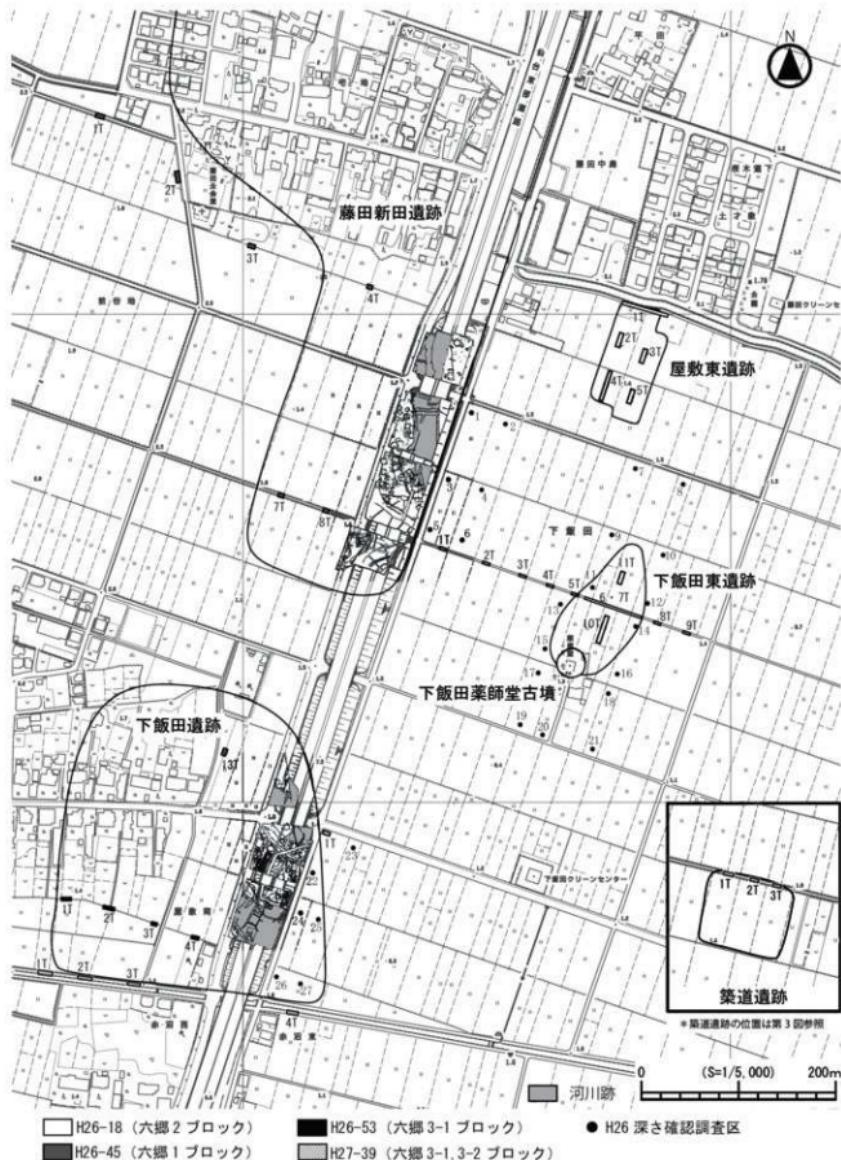
下飯田遺跡隣接地では、調査区を1箇所設定した。遺構や遺物は確認されなかった。本ブロックにおける調査は、平成26年9月19日に終了した。

(2) 六郷1ブロック

ブロック内には、藤田新田遺跡の西部とその隣接地、下飯田遺跡の北部が含まれる。調査は、調査前の排水路の設計変更により、当初に設定した13箇所のうち6箇所が不要となった。なお、調査区名については、当初の計画で付した番号をそのまま使用したため、5、6、9~12は欠番である。

藤田新田遺跡内に3箇所(4~7~8T)、同隣接地に3箇所(1~3T)、下飯田遺跡内に1箇所(13T)の調査区を設定した。調査は、平成26年11月14日に着手した。藤田新田遺跡とその隣接地では、遺構・遺物は確認されなかった。2~4~8Tでは、浜堤構成砂を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。現耕作により削平された可能性も考えられる。また、1~7Tは、掘削深度 $1.4 \sim 1.6$ mにおいても浜堤構成砂が確認できないことから、堆積層の状況とあわせて、低湿地もしくは河川跡に位置するものと考えられる。

下飯田遺跡では、遺跡北半部に1箇所の調査区(13T)を設定した。浜堤構成砂を確認し、上面で遺構検出作業



第4図 調査区全体配置図

を行った。溝跡1条を確認したが、遺物は出土しなかった。本ブロックにおける調査は、平成26年12月4日に終了した。

(3) 六郷3-1ブロック (H26年度調査分)

平成26年度の六郷3-1ブロックにおける調査として、下飯田遺跡に関わる水路工事に伴う確認調査を実施した。4箇所の調査区を設定し、西側から順に1～4Tとした。調査は、1～3Tが平成26年12月15日、4Tが平成27年1月に着手した。

1～3Tの調査では、浜堤構成砂を確認し人力による遺構精査を行ったが、いずれの調査区でも遺構は検出されなかった。なお、より下層における水田耕作土の存在については、1・2Tで畦畔の検出を目的として精査したが、確認されなかった。4Tにおいても遺構・遺物は確認されなかった。本ブロックにおける調査は、一部を除き平成27年1月8日に終了した。

(4) 六郷3-1 (H27年度調査分)・3-2ブロック

下飯田遺跡隣接地における調査区は、水路工事予定地に4箇所設定した。東部道路の西側(3-1ブロック)に3箇所(1～3T)、東側(3-2ブロック)に1箇所(4T)である。調査は平成27年11月17日に着手した。

重機による表土除去を行い、遺構精査を行った。遺構・遺物はなく、調査は、平成27年12月10日に終了した。全てのトレンチで、埋め戻し後に再生碎石の敷きならしを行った。

築道遺跡における調査区は、用水路建設予定地に3箇所設定した。調査は、12月7日に着手した。重機による表土除去を行い、遺構精査を行った。遺構・遺物はなく、調査は平成27年12月10日に終了した。全てのトレンチで、埋め戻し後に再生碎石の敷きならしを行った。

II. 深さ確認調査

六郷2ブロックにおける表土洗き取り範囲を対象に、遺構面までの深度を確認するため、27箇所で深さ確認調査を行った。調査は全て人力で行い、北壁で断面略図の作成を行った。調査は、平成26年10月9日に着手し、同日終了した。

第4章 屋敷東遺跡第1次調査

第1節 基本層序

大別3層の基本層を確認した。遺構は全て基盤層であるⅢ層(浜堤堆積土)上面で確認した。4Tを除く全てのトレンチにおいて、I層直下がⅢ層となる。各層の土色、土質等については、各トレンチの断面図を参照されたい。以下、各層の特徴について記述する。

I層：原則的に現表土層からⅢ層の直上に堆積する暗褐色・黒褐色砂質土を一括した。Ia～Ihの8層に細分した。

細分層間の上下関係は、トレンチにより分布が異なるため、部分的に認められる。Ia層は現表土(耕作土)層である。全てのトレンチに分布する。Ib層は、1Tにおいて後世の削平によりできた段差の斜面部分でのみ確認した。削平後の崩落土と考えられる。Ic～e層は、埋没途上の古墳周溝内に堆積した土層である。4T(Ic・Id層)、5T(Ic～e層)に分布する。If・Ig層は、3Tにのみ分布する。Ⅲ層土をブロック状に多量に含んでおり、削平された古墳積土の二次堆積土である可能性も考えられる。Ih層は、2～5Tで比較的広範囲に分布する。Ⅲ層の直上層である。

II層：4Tにおける1号墳周溝の外側(北側)にのみ分布する。上面は、古墳周溝の掘り込み面である。直下のⅢ層からII層への変化は漸移的であり、Ⅲ層の上部が表土化したものと考えられる。古墳構築時の表土である可能性が高い。

Ⅲ層：1～5の全トレンチに分布する。浜堤構成砂。遺跡の基盤層である。

第2節 発見遺構と出土遺物

本発掘調査区および2~5Tで、古墳2基、溝跡9条、土坑11基、ピット10基を確認した（第5図）。確認面は、全てⅢ層上面である。遺物は、埴輪、非クロ上師器、ロクロ上師器、須恵器、動物遺存体が出土した。以下、トレンチ別に記述する。なお、2~5Tの遺構については、確認のみであり、原則として遺構の掘り込みは行っていない。

I. 本発掘調査区（1トレンチ）

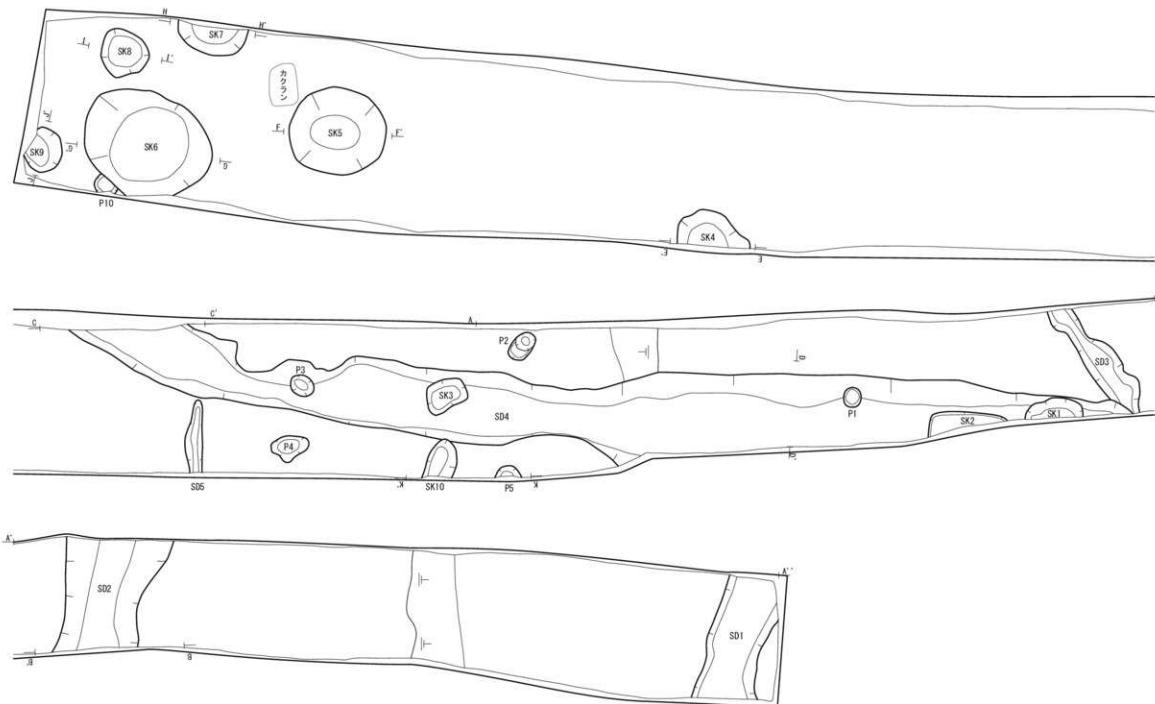
(1) 溝跡

5条確認した。これらの延長方向は、南北方向（SD1~3・5溝跡）と東西方向（SD4溝跡）の2種に大別される。
SD1溝跡

調査区東端に位置する。重複関係はない。南北方向の溝跡で、調査区外に延びる。方向はN34°・Eである。規模は、長さ2.05m以上、上端幅0.9m、下端幅0.6m、深さ0.1mである。断面形は皿形である。堆積土は単層で

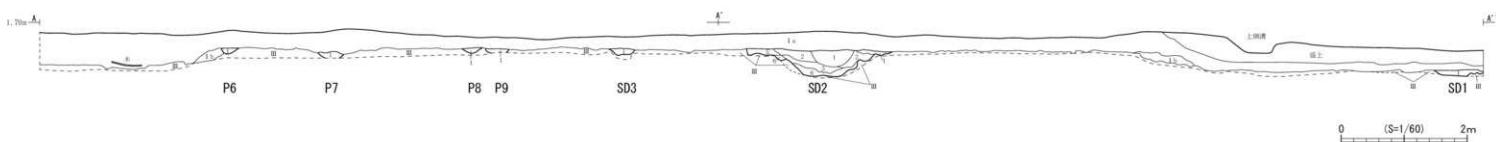


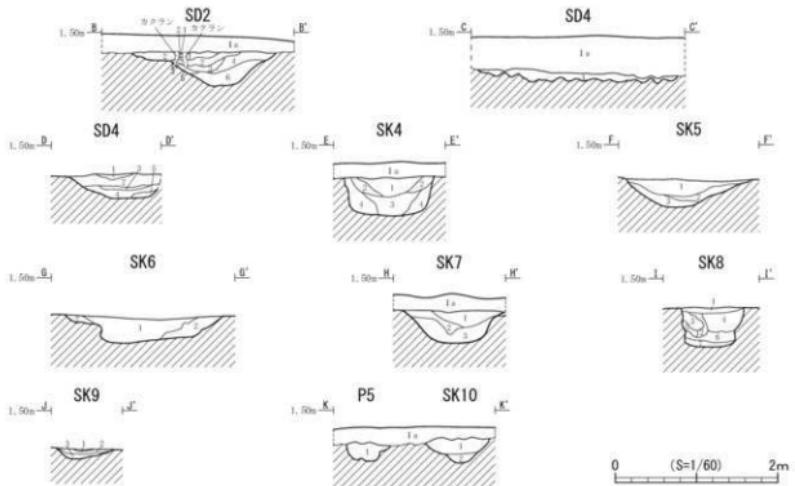
第5図 屋敷東遺跡第1次調査区配置図



第6図 屋敷東遺跡第1次調査本発掘調査区平面・断面図

第6図 屋敷東遺跡第1次調査1 トレンチ平面・断面図





剖位	色 調	土 質	備 考
基本土層			
I a	10YR3/2暗褐色	シルト質砂	現表土
I b	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	黒褐色をプロック状に多量含む 崩落土
III	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	浜堤構成砂
SD1	1 10YR3/2黒褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に含む
SD2	1 10YR3/1 黒褐色	シルト質砂	
2	10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	灰白色火山灰を粒状に少量含む
3	10YR2/2にぶい黄褐色	シルト質砂	灰白色火山灰層
4	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	黒褐色土を塊状に含む
5	10YR2/2 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を質砂シルトを互層状に含む
6	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質砂	黒褐色土を塊状に含む
SD3	1 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に少量含む
SD4	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を互層状に一部含む
2	10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を粒状に少量含む
3	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をルート質砂を粒状に多量含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂を粒状に少量含む
5	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂を粒状に少量含む
SK4	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を粒状に少量含む 鉄分含む
2	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を互層状に一部含む
3	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に多量含む
4	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を互層状に多量含む
SK5	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を塊状に多量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂をレンズ状に含む
3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂を互層状に含む 一部レンズ状に含む
SK6	1 10YR3/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂を互層状に含む
2	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をレンズ状に少量含む
SK7	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をレンズ状に含む
2	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を粉状に含む
3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色土をルート質砂を一部レンズ状、一部互層状に含む
SK8	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をレンズ状に少量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	噴砂か
3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を互層状に含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を塊状にやや多く含む
5	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を互層状に少量含む
6	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を塊状に多量含む
7	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を互層状に少量含む
SK9	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	炭化物を含む
2	10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に少量含む
3	10YR2/1 黑褐色	砂質シルト	炭化物を多量含む
SK10	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に多量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質砂	褐灰色土を塊状に少量含む
P5	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を块状に多量含む
P6	1 10YR3/3暗褐色	シルト質砂	黒褐色土を少量含む
P7	1 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土をプロック状に少量含む
P8	1 10YR2/2 黑褐色	シルト質砂	黒褐色土を少量含む
P9	1 10YR5/4にぶい黄褐色	砂	

第7図 屋敷東遺跡第1次調査 本発掘調査区遺構断面図

ある。遺物は出土していない。

S D 2 溝跡

調査区東側に位置する。重複関係はない。南北方向の溝跡で、調査区外に延びる。方向は、ITでN-25°-Eである。規模は、長さ1.85m以上、上端幅1.5m、下端幅0.5m、深さ0.4mである。なお、3Tにおいても、同一の方向、規模、堆積土の特徴をもつ溝跡を確認し、SD2溝跡の延長であると判断した。この範囲まで含めると、全長は50m以上となる。断面形は逆台形である。堆積土は6層に分かれる。3層は灰白色火山灰層である。また、最下層の6層には互層状の堆積が認められた。

遺物は、2層からロクロ土師器の小片及び环1点（第10図1）が出土した。环の全体の器形は不明である。内面は、ミガキののち黒色処理がなされている。底部には、最初の切り離し後、薄い底部（厚さ1~2mm）を補強するため粘土を足し、再度切り離しを行った痕跡がみられる。底部の切り離し技法は、いずれも回転糸切りで、切り離し後の再調整は認められない。年代は、底径が5.8cmと比較的小さく灰白色火山灰層の直上層から出土していることから、10世紀代に属するとみられる。

S D 3 溝跡

調査区東側に位置する。SD4溝跡より古い。南北方向の溝跡で、調査区外に延びる。方向はN-22°-Wである。規模は、長さ2.15m以上、上端幅0.45m、下端幅0.2m、深さ0.1mである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

S D 4 溝跡

調査区中央に位置する。遺構の西半は、大きく削平され残存状態が悪い。SD3溝跡より新しく、SK1・2・3・10土坑、P1・3より古い。東西方向の溝跡で調査区外に延びる。方向は、全体的にはN-73°-Wであるが、西端でやや北側に屈曲する。屈曲部分の方向は、N-45°-Wである。規模は、長さ16.85m以上、上端幅1.1m、下端幅0.75m、深さ0.3mである。断面形は逆台形である。底面には掘削痕が確認される。堆積土は5層に分かれる。

遺物は、1層から非ロクロ土師器が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 5 溝跡

調査区中央に位置する。重複関係はない。南北方向の溝跡で、調査区外の南側に延びる。方向は、ITでN-16°-Eである。規模は、長さ1.15m以上、上端幅0.25m、下端幅0.1m、深さ0.06mである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(2) 土坑

10基の土坑を確認した。この内SK5~9土坑の5基は、調査区西端に集中しており、1つの土坑群を形成している。

S K 1 土坑

調査区東側に位置する。SD4溝跡より新しい。南半部は調査区外である。部分的な検出であるが、平面形は橢円形または円形とみられる。規模は、長軸0.92m、短軸0.31m以上、深さ0.21mである。断面形はU字形である。堆積土は単層で、I a層土を主体とする。

遺物は、非ロクロ土師器の小片の他、釘部断面形が円形の鉄釘が出土した。鉄釘は、近代以降の遺物である。掲載遺物はない。本遺構は、近代以降に埋没したものと考えられる。

S K 2 土坑

調査区東側に位置する。SD4溝跡より新しい。南半部は調査区外である。部分的な検出であるが、平面形は隅丸の方形または長方形とみられる。規模は、長軸1.2m、短軸0.4m以上、深さ0.1mである。断面形はU字形である。堆積土は単層で、I a層土を主体とする。遺物は出土していない。

S K 3 土坑

調査区中央に位置する。SD4溝跡より新しい。平面形は不整な橢円形である。規模は、長軸0.66m、短軸0.45m、深さ0.08mである。断面形は皿形である。堆積土は単層で、I a層土を主体とする。

遺物は、堆積土中から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 4 土坑

調査区西側に位置する。重複関係はない。南半部は調査区外である。平面形は不明である。規模は、長軸1.27m、短軸0.56m以上、深さ0.45mである。断面形は逆台形である。堆積土は4層に分かれる。最下層は、互層状の堆

積が認められることから、自然堆積土である。遺物は出土していない。

S K 5 土坑

調査区西側に位置する。重複関係はない。平面形はほぼ円形である。規模は、長軸 1.54 m、短軸 1.36 m、深さ 0.52 m である。断面形は、大きく開いた U 字形である。堆積土は 3 層に分かれる。下部（2・3 層）は、Ⅲ層土を主体とし一部に黒褐色砂をレンズ状に含んでおり、自然堆積土の可能性がある。遺物は出土していない。

S K 6 土坑

調査区西側に位置する。P 10 より新しい。南側の一部は調査区外である。平面形はやや不整な楕円形である。規模は、長軸 2.7 m、短軸 1.6 m、深さ 0.49 m である。断面形は、一部壁面に段を有するが、全体的には皿形である。底面は概ね平坦である。堆積土は 2 層に分かれ、全体に互層状またはレンズ状の堆積が認められる。よって、本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は、2 層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 7 土坑

調査区西側に位置する。重複関係はない。北半部は調査区外である。平面形は楕円形もしくは円形とみられる。規模は、長軸 1.15 m、短軸 0.45 m 以上、深さ 0.41 m である。断面形は、やや開いた U 字形である。堆積土は 3 層に分かれ、全体に互層状またはレンズ状の堆積が認められる。本遺構は、自然堆積により埋没したものと考えられる。

S K 8 土坑

調査区西側に位置する。重複関係はない。平面形は不整円形である。規模は、長軸 0.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.48 m である。断面形は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、上半部で開いた U 字形となる。堆積土は 7 層に分かれるが、2～6 層には著しい土層の乱れが認められる。地震等の強い揺れにより搅拌された可能性が考えられる。また、2 層以下には互層状の堆積が認められることから、搅拌時には、自然堆積により概ね埋没していたものと考えられる。なお、今回の調査中、搅拌の痕跡がみられたのは本遺構のみである。

遺物は、5 層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 9 土坑

調査区西側に位置する。重複関係はない。西側の一部は調査区外である。平面形は不整円形である。規模は、長軸 0.72 m、短軸 0.53 m、深さ 0.14 m である。断面形は、大きく開いた U 字形である。堆積土は 3 層に分かれ。最下層には炭化物が多量に含まれる。遺物は出土していない。

S K 10 土坑

調査区中央に位置する。重複関係は、SD4 溝跡より新しい。南側の一部は調査区外である。平面形は楕円形である。規模は、長軸 0.6 m 以上、短軸 0.47 m、深さ 0.3 m である。断面形は、やや開いた U 字形である。堆積土は 2 層に分かれる。1 層は、黒褐色土にⅢ層土をブロック状に多量含むことから、人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

（3）ピット

10 基を確認したが、P6～9 の 4 基については、調査区北壁で断面のみ確認した。以下、平面で確認した 6 基について記述する。5 基が調査区中央、1 基が同西端に位置する。重複関係は、P1・2 が SD4 溝跡より新しく、P10 が SK6 土坑より古い。平面形は円形または楕円形である。規模は、径が 0.3～0.6 m、深さが 0.1～0.2 m である。断面形は U 字形である。堆積土は、いずれも单層である。遺物は、いずれのピットからも出土していない。

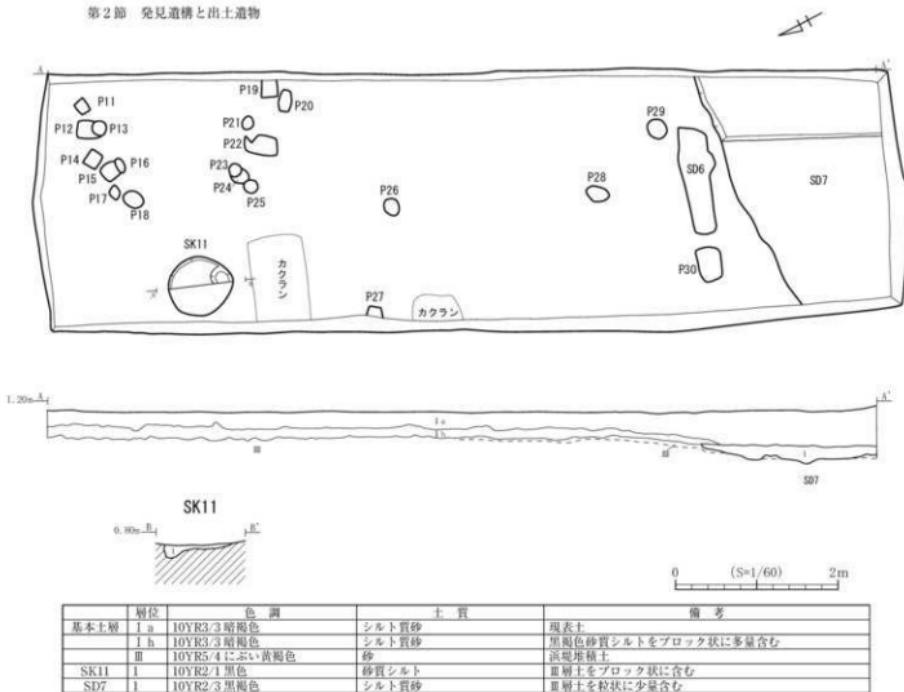
II. 2 トレンチ

（1）溝跡

2 条の溝跡を確認した。共に東西方向の溝跡である。

S D 6 溝跡

調査区南側に位置する。延長が短く断面形等も不明であるが、便宜的に溝跡とした。また、西側に近接する P30 は、その位置や形態から SD6 溝跡と一連のものである可能性もあるが、別遺構とした。重複関係はない。方向は、N-70°-W である。規模は、長さ 1.35 m、上端幅 0.45 m である。遺物は出土していない。



第8図 屋敷東遺跡第1次調査2トレンチ平面・断面図

SD7溝跡

調査区南端に位置する。重複関係はない。東・西・南側は調査区外である。一部堆積土の掘削を行った。方向は、N-86°-Wである。規模は、長さ3.1m以上、上端幅2.0m以上、深さ0.22mである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(2) 土坑

SK11土坑

調査区北側に位置する。重複関係はない。堆積土の東半のみ掘削した。平面形は円形である。規模は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mである。断面形は皿形である。底面の南側に径0.2mのピット状の落ち込みがみられる。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(3) ピット

20基を確認した。確認のみで堆積土の掘削はしていない。ピットの分布は、調査区北側に2箇所の集中的なまとまりがみられる(P11~18およびP19~25)。平面形は、円形・梢円形が11基(P13・16・18・20・21・23~26・28・29)、方形が6基(P11・12・14・15・19・27)、その他が3基(P17・22・30)である。平面規模は、径および長軸長が0.15~0.2mに集中する。いずれのピットからも遺物は出土していない。

III. 3 トレンチ

(1) 溝跡

S D 2 溝跡

ITで確認したSD2溝跡の延長部分を確認した。本トレンチで確認した部分の特徴について記述する。重複関係はない。方向は、N-24°-Eである。ITで確認したSD2溝跡との方向のずれは、1°である。規模は、長さ10.6m以上、上端幅2.0m以上、深さ0.22mである。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分かれるが、堆積土は1Tで確認したものと対応する。3層には灰白色火山灰が多量に含まれる。6層には互層状の堆積がみられる。

遺物は、2層からロクロ土師器坏2点と馬の歯とみられる動物遺存体1点（写真図版16-3）が出土した。ロクロ土師器坏は1点（第10図2）を掲載した。底部を欠くが、器形は、体部が内縁気味に外傾し、そのまま口縁部にいたるものである。近接する藤田新田遺跡では、同様の特徴をもつ資料が、灰白色火山灰を含む河川堆積土（SD302C 河川跡3B層）中からまとめて出土しており、年代は、他遺跡との形態比較から10世紀前半とされている。第10図2の年代については、藤田新田遺跡の土器群に近いものと推定されるが、出土量が少なく他器種との組成も不明であることから、おおむね10世紀代と考えられる。

IV. 4 トレンチ

(1) 古墳

1号墳

墳丘堆積土の一部と北側・南側周溝の各一部を確認した。重複関係はない。古墳の全体形状は不明であるが、円墳の可能性が高いと考えられる。墳丘堆積土は一部断ち割りを行い、周溝堆積土の掘削は北側の一部でのみ行った。全体の規模は、周溝外縁径22.3m、内縁径12.4mである。墳丘堆積土は、白色粘土を斑状に含むシルト質砂層で、確認部分の層厚は約0.2mである。墳丘堆積土と直下の基本層Ⅲ層との間に旧表土は確認されなかったが、北側周溝の外側に分布する基本層Ⅱ層は、古墳構築時の表土である可能性がある。

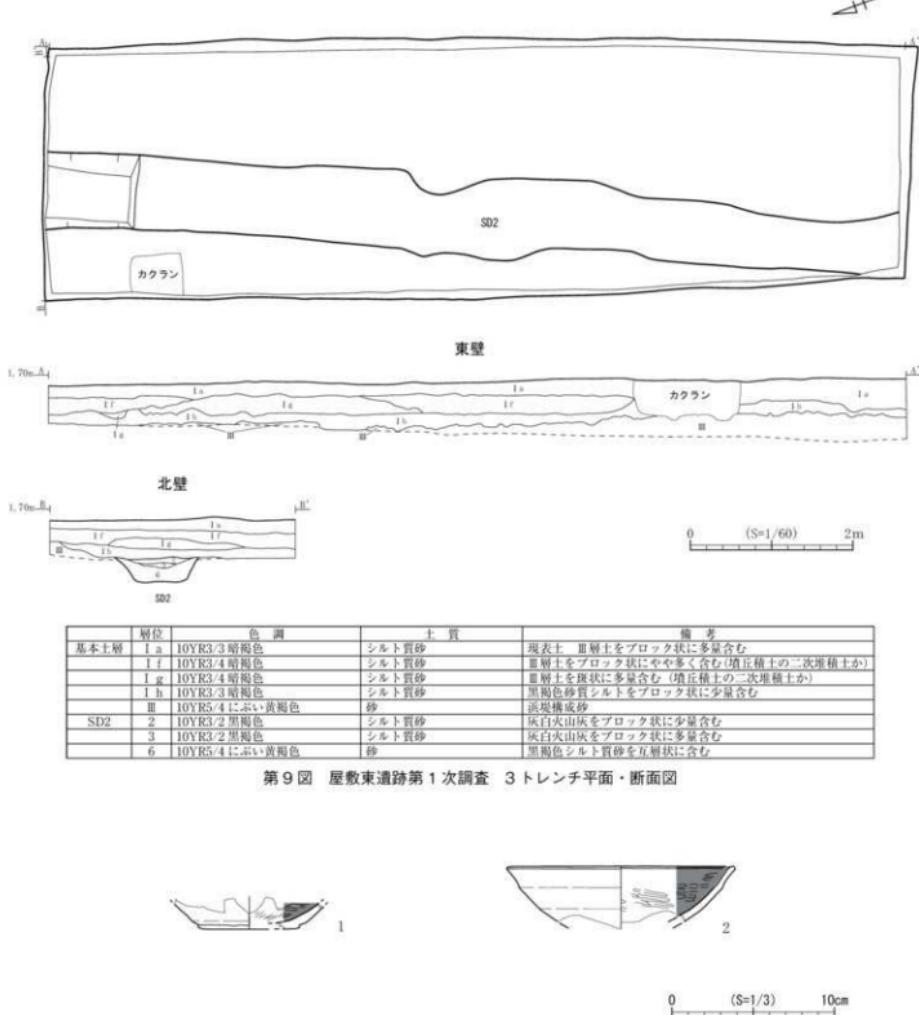
周溝の規模は、上端幅5.08m、下端幅2.04m、深さ0.42mである。断面形は皿形であるが、北側周溝の内縁側で、底面より約15cm上がった箇所にテラス状の、幅約60cmの平坦面を確認した。部分的な確認であるため、これが古墳全体の特徴となるかは不明である。周溝の堆積土は9層に分かれる。周溝は、1層中には灰白色火山灰が含まれることから、降灰時には概ね埋没していたものと考えられる。

遺物は、周溝から非ロクロ土師器、円筒埴輪、ロクロ土師器等が出土しており、5点を掲載した（第12図1～4、第13図1）。第12図1は非ロクロ土師器で鉢としたが、口縁部が欠損しており全体の器形は不明である。底部はやや平坦な丸底である。周溝内の出土層位が異なるため、第12図2-3の円筒埴輪との共伴関係は不明である。

第12図2～4は円筒埴輪である。全体の器形は、3点共やや外に開く形と推定されるが、口縁部形態には違いがみられる。また、口唇端部にはいずれも浅い凹線が認められる。この内、2-3は、周溝底面から出土しており1号墳に伴う遺物と考えられる。4については、堆積土中から出土しているため、共伴関係は不明である。

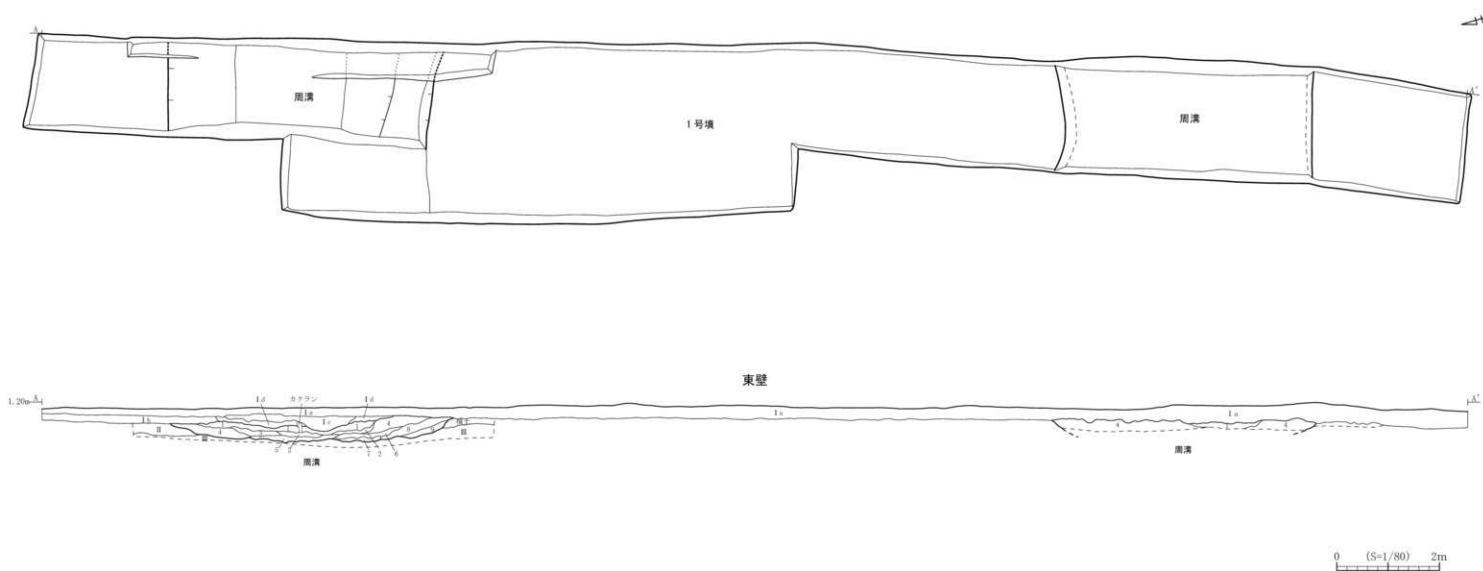
以下、円筒埴輪の個別の特徴について記述する。第12図2は口縁部から体部の大形片、凸帯1条とその直下に透かし孔の一部が確認される。口縁部はわずかに外反し、その端面には浅い凹線がみられる。外面調整は1次調整のタテハケのみで、2次調整は認められない。口縁部ではタテハケの後、ヨコナデが施されている。内面調整は、体部が斜方向のハケ後に縱方向のナデ、最後に口縁部のヨコナデが施されている。凸帯内面のナデは認められない。凸帯は、外面のタテハケ後に貼付される。凸帯の断面形は、上・側・下面共に強いナデが認められ、全体に端正である。その上面はナデにより浅い凹面となり、側面との境界部が鋭角的に突出する。透かし孔は、円形と推定される。また、透かし孔の上には、孔の切り込みを当初に意図したとみられる弧状の線刻が認められる。3は、口縁部がわずかに外反し、同図2に比べ厚手で口縁部外側におけるヨコナデの幅が狭い。4は、口縁部が短く外反する口縁部破片である。他に比べ器厚が薄い。以上の特徴から、これらの資料は、藤沢が提唱する富沼窯跡系列に属する埴輪であると考えられる（結城・藤沢1987）。年代的には、藤沢がより後出の特徴とした、凸帯の下方への垂れ下がりや口径に対する最上段の幅（口縁部から第1凸帯までの幅）の長大化といったものが認められないことから、5世紀後半を中心とするものと考えられる。よって1号墳の築造年代も同様と考えられる。

第13図1は、周溝堆積土1層から出土したロクロ土師器高台付坏である。大形の資料で、口径の推定復元値は

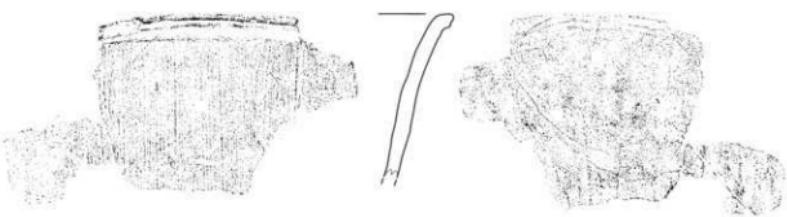
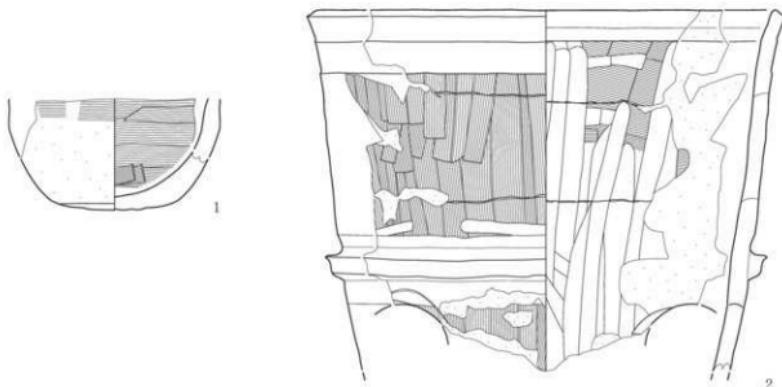


掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)		調整・文様		備考
									口幅・締	幅高・長	底径・厚	外面	
1	D-1		IT	SD2	2	クロコ土器	环	底1/4	-	(1.6)	(5.8)	ロクロナデ	ミガキ 黒色處理
2	D-2		3T	SD2	2	クロコ土器	环	口~底2/3	(13.7)	(3.8)	-	ロクロナデ	底部凹凸切り 底、縁削り条あり ヘラミガキ 黒色處理
	X-1		3T	SD2	2	自然遺物	歯						内面サビ付着 ウマカ

第10図 屋敷東遺跡第1次調査 1・3トレンチ SD2溝跡出土遺物



第11図 屋敷東遺跡第1次調査 4トレンチ平面・断面図



0 (S=1/3) 10cm

掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
									口径・幅	器高・長	底径・厚	外面	内面	
1	C-1	164	4T	I号墳周溝	下層	非ロクロ土師器	鉢	1/5	-	(6.8)	(7.0)	ヨコナデ	ヘラナデ	やや平頭な丸底 胎土砂粒多 外面擦減 剥落あり
2	S-1	166	4T	I号墳周溝	5	埴輪	円筒	上部1/5	(28.2)	(22.2)	-	(1):ヨコナデ、 体:タガハケ→ 凸型ヨコナデ	(1):ヨコナデ、 体:ナナメハケ→ タテナデ	スカシ孔上部の外面 に切り込みあり
3	S-2	165	4T	I号墳周溝	5	埴輪	円筒	口1/6	-	(14.0)	-	(1):ヨコナデ、 体:タガハケ→ ヨコナデ?	ヨコハケ	
4	S-3	167	4T	I号墳周溝	上層	埴輪	円筒	口1/5	-	(10.0)	-	(1):ヨコナデ、 体:タガハケ	(1):ヨコナデ、 体:ナナメハケ→ タテナデ→ヨコナデ	口縁部裏面に凹面 あり 器厚薄い 内面 剥落一帯あり

第12図 屋敷東遺跡第1次調査 1号墳周溝出土遺物(1)

掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調査・文様		備考
									口縁・幅	基高・長	底径・厚	外面	内面	
1	D-4	17-1	4T	1号墳周溝	I	ロクロ	高台土御器	口~底 1/4	(18.4)	(7.1)	—	ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	平安時代
2	S-4	17-2	4T		Ia	埴輪	円筒	体部片	—	(4.7)	—	テナメハケ→ 凸沿ヨコナデ	タテナデ	スカシ孔あり
3	S-5	17-3	4T		Ia	埴輪	不明	体部片	—	(7.0)	—	ナナメハケ→ ヨコナデ	タテナデ	スカシ孔あり
4	S-6	17-4	4T		Ia	埴輪	円筒	口縁部片	—	(4.4)	—	口:ナナメハケ →ヨコナデ	口:ナナメナデ→ ヨコナデ	

第13図 屋敷東遺跡第1次調査 1号墳周溝出土遺物(2)

18.4cmである。高台は欠損し残存していない。底部も7割が欠損しており、切離し技法は不明であるが、一部に高台接合後のナデが認められる。体部は内彎気味に外傾し、口縁部が外反する。ロクロ調整による器面の凹凸は、顕著ではない。年代は、これらの形態的特徴と灰白色火山灰を含む堆積土からの出土であることから、SD2溝跡出土器と同様10世紀代と考えられる。

(2) 遺構外出土遺物

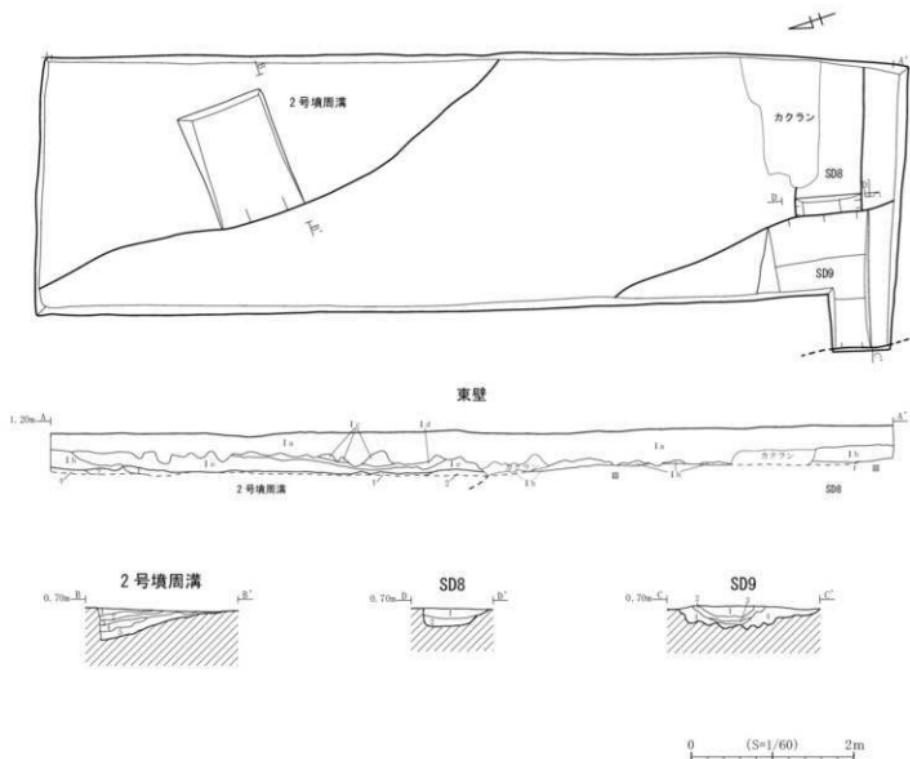
基本層I a層から出土した円筒埴輪3点を掲載した(第13図2~4)。2は凸沿および透かし孔の一部をもつ体部片である。凸沿は上面、側面、下面のナデによる境界の稜が顕著で、断面形はM字形を呈する。3は透かし孔の一部をもつ体部片である。4は、第12図4と同様、口縁部端部付近で短く外反する資料である。口唇端部には他と同様、凹線がみられる。

V. 5トレチ

(1) 古墳

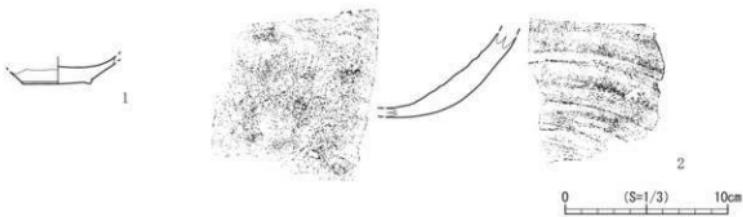
2号墳

調査区北東で周溝西側の一部を確認した。重複関係はない。古墳の全体形状は不明であるが、仮に円墳とすれば、その規模は、周溝外縁の済曲度から、1号墳に近いものと推測される(第5図)。掘削は、周溝の一部について行った。周溝の規模は、上端幅2.5m以上、深さ0.4m以上である。堆積土は5層に分かれ。1層中には、1号墳と同様に灰白色火山灰が含まれることから、周溝は1号墳と近い時期に埋没した可能性が考えられる。遺物は出土して



	層位	色調	土質	備考
基本土層	I a	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	現表土
	I c	10YR3/2黒褐色	シルト質砂	
	I d	10YR2-2黒褐色	砂質シルト	
	I e	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	
	I h	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	黒褐色砂質シルトをブロック状に少量
2号填周溝	1	10YR2-2黒褐色	砂質シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む
	2	10YR2-2黒褐色	砂質シルト	
	3	10YR3/2黒褐色	シルト質砂	
	4	10YR2-2黒褐色	シルト質砂	
	5	10YR2-2黒褐色	シルト質砂	シルトをブロック状に含む
SD8	1	10YR2-2黒褐色	シルト質砂	黒褐色砂質シルトを塊状に含む
	2	10YR4/2灰黃褐色	シルト質砂	暗褐色砂質シルトを塊状に含む
SD9	1	10YR3-2黒褐色	砂質シルト	
	2	10YR2-2黒褐色	粘土	灰白色火山灰を多量含む
	3	10YR2-1黒色	砂質シルト	
	4	10YR2-2黒褐色	シルト質砂	

第14図 屋敷束遺跡第1次調査 5トレンチ平面・断面図



第15図 屋敷東遺跡第1次調査 5トレンチ SD9溝跡他土遺物

いない。

(2) 溝跡

S D 8 溝跡

調査区南側に位置する。SD9溝跡より古い。東西方向の溝跡で、東側は調査区外に延びる。方向はN-70°-Wである。規模は、長さ1.84m以上、上端幅0.82m、下端幅0.45m、深さ0.22mである。断面形は逆台形である。堆積土は2層に分かれ。遺物は出土していない。

S D 9 溝跡

調査区南側に位置する。SD8溝跡より新しい。南北方向の溝跡で、南北は調査区外に延びる。方向はN-4°-Eである。規模は、長さ3.2m以上、上端幅1.68m、下端幅0.5m、深さ0.28mである。断面形は、大きく開いたU字形である。底面には掘削痕がみられる。堆積土は4層に分かれ、2層中には灰白色火山灰が多量含まれる。

遺物は、1層から出土したロクロ土師器1点を掲載した（第15図1）。全体形状は不明であるが、残存する体部の傾きから小形の皿と推定した。底部の切離し技法は回転系切りで、切離し後の調整は無い。年代は、出土層位と形態的特徴から、10世紀代と考えられる。

VII.まとめ

今回の調査では、古墳2基、溝跡9条、土坑11基、ピット10基を確認した。遺物は、埴輪、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器等が出土した。

特に重要な成果として、古墳の発見を挙げることができる。表面採集による円筒埴輪の存在は知られていたが（結城・藤沢1987）、今回の調査によって実際に2基の古墳を確認し、円筒埴輪との共伴関係を明らかにした点は、この地域における古墳群のあり方を検討する上で、重要である。

今回確認した古墳の全体形状は、部分的な調査であるため不明であるが、少なくとも1号墳については円墳の可能性が高い。1号墳の規模は、周溝外縁で22.3mである。比較のため、これまで45基の古墳が確認された大野田古墳群を例にとると、古墳の規模は、径約32mの春日社古墳を最大とし、径20m前後の中形円墳が最も多く、径10m以下の小形円墳も少数確認されている。これらの年代は、5世紀後葉から6世紀前半とみられている。屋敷東遺跡1号墳の年代は、共伴する埴輪の形態的特徴から、5世紀後半を中心とするものと考えられる。

また、今回の調査成果により、当該地の古墳時代における集落変遷や土地利用の変化を、より詳細に検討することが可能となった。本遺跡の西側に近接する藤田新田遺跡では、古墳時代前期から中期（4～5世紀代）を主体とする住居跡が多数確認されており、今後、これらの集落と、本遺跡における墓域との関係性を検討していく必要がある。



第16図 下飯田東遺跡第1次調査基本層柱状模式図

第5章 下飯田東遺跡第1次調査

第1節 基本層序

大別6層及び細別19層の基本層を確認した(第16図)。基本層については、本遺跡および周辺における基本地形、堆積状況を把握するため、調査対象地全体(本発掘調査区および1~11Tの各試掘調査区)の土層をまとめて扱うこととする。まず、本発掘調査区における基本層の全体的な分布傾向について述べたのち、各層の特徴について記述する。

基盤層であるVI層(浜堤堆積土)は、本発掘調査区中央部および10Tに分布する。下飯田薬師堂古墳から10T、本発掘調査区中央部に至るラインで本遺跡が立地する微高地状の高まりを形成している。なお、本発掘調査区におけるVI層分布の東端は、現段階における第1浜堤列の東境界線である可能性が高い。

VI層より上位層の分布には、広範囲に及ぶものと限定的なものがある。II a~IV a・V b層は、概ね3~8T(本発掘調査区を含む)で確認され、東西約150mの範囲に広く分布する。ただし、本発掘調査区内では、この3つの層の分布は、I層直下がVI層となる中央部を除き、東西両端に限定される。本発掘調査区内におけるこの分布傾向は、他の基本層も同様である。本発掘調査区の中央部においては、本来分布していた基本層が削平されている可能性が高い。

一方、III層の分布は、II a・IV a・V b層と比べ限定的である。調査対象地全体の東西両端に位置する、1・2Tおよび9Tにのみ分布し、広域な分布をみせる基本層とは分布上ほぼ重複しない。このため、基本層中におけるIII層とIV層との前後関係は不明である。

I層： 盛土(層厚20~40cm)直下の現代耕作土である。層厚は15~30cmである。全ての調査区に分布する。

II層： I層直下で、灰白色火山灰の出土層位(IV a層上面)より上位に堆積するとみられる土層を一括し、更にII a~II fの6層に細分した。II層全体の層厚は10~30cmである。分布は、細分層により異なる。II a層は2・9Tを除く全ての調査区に分布する。II b~II e層は1・2Tに限定して分布する。II f層は、10Tにのみ分布しII a~II e層および灰白色火山灰との上下関係は不明であるが、便宜的にII層の細分層とした。

II a層は下面の凹凸が顕著で下層の巻上げがみられることから、耕作土の可能性が考えられる。II a層上面は遺構確認面である。II b～II e層は、分布する1・2Tの位置が、藤田新田遺跡で確認された北西から南東方向へ延びる河川跡（SD 302 河川跡：宮城県教育委員会1994）の延長方向にあることから（第4図参照）、河川内堆積土あるいは湿地堆積土である可能性が考えられる。なお、II e層には灰白色火山灰の可能性がある灰白色の粘質土が含まれる。10Tにのみ分布するII f層は、下面の凹凸が顕著で全体に酸化鉄を多量含んでおり、耕作土の可能性がある。

III層： II層より下位に堆積するとみられる自然堆積土を一括し、更に6層に細分した。III層全体の層厚は20～60cm以上である。分布は、調査対象地における東西両端部に限定される。III a層は1T、III b層は2T、III c～III f層は9Tに分布する。III c～III f層については、II層との上下関係は不明であるが、灰白色火山灰が含まれないことから、II層より下位層と仮定しIII層とした。またIV層とは、全般的な層相の違いにより区別した。

1・2Tで確認したIII a・III b層は、その位置関係から、II b～II e層と同様に河川内の堆積土である可能性が高い。また、9Tで確認したIII c～III f層は、粘土・シルトと砂の互層であり、河川堆積土あるいは堤間湿地の堆積土である可能性が考えられる。

IV層： 灰白色火山灰の出土層位より下位に堆積する自然堆積土を一括し、更に2層に細分した。IV層全体の層厚は10～35cm以上である。分布は、細分層により異なる。IV a層は1・2・9Tを除く調査区全てに分布し、IV b層は本発掘調査区の東西両側に限定して分布する。

本発掘調査区と8TのIV a層上面には、灰白色火山灰が堆積する。IV a層上面とIV b層上面は、共に遺構確認面である。

V層： IV層直下でVI層直上に堆積する、比較的均質な粘土層である。河川堆積土と推定される。3層に細分した。V層全体の層厚は10～30cm以上である。分布は、細分層により異なる。V a層は、本発掘調査区東西両端および8Tにのみ分布する。V b層は、本発掘調査区を含む3～8Tに広く分布するが、本発掘調査区内では、東西両側に限定して分布する。V c層は、本発掘調査区東端部のSD14壁面でのみ確認した。V c層の直下はVI層である。

V a層は、V b層からIV b層にかけての漸移層である。V a・V b層上面は、共に遺構確認面である。

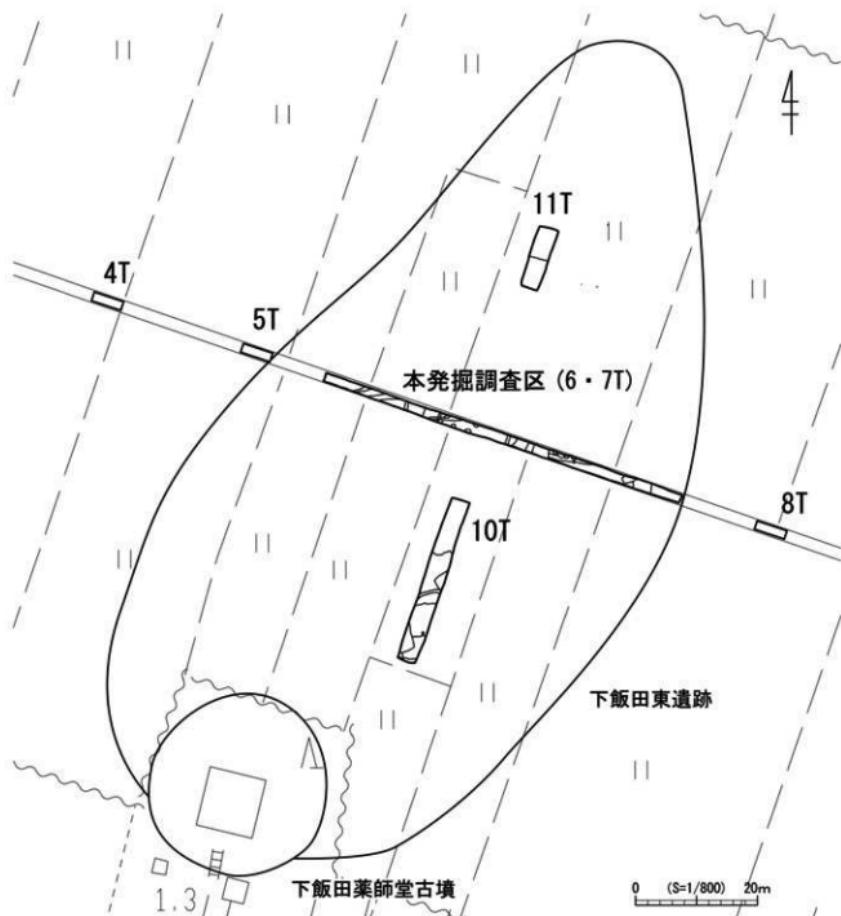
VI層： 本遺跡の基盤層となる浜堤構成砂である。今回の調査で確認できた層厚は30cm以上であるが、平成3・4（1991・1992）年に実施された下飯田遺跡の調査では、6m以上の厚さを確認している（仙台市教育委員会1995）。本発掘調査区中央部および10・11Tに分布する。屋敷東遺跡の基本層III層に対応する。本発掘調査区中央部では、本来、微高地状に高まっていた部分が削平されたとみられ、I層直下がVI層となる。VI層上面は遺構確認面である。

第2節 発見遺構と出土遺物

本発掘調査区および10・11T（確認調査）において、竪穴住居跡4軒、溝跡19条、土坑9基、ピット22基、性格不明遺構2基、河川跡2条を検出した。遺物は、非クロロ土師器、クロロ土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦が出土した。

遺構の確認面は、本発掘調査区がII a層上面、IV a層上面、IV b層上面、V b層上面、VI層上面の5面、10T、11TがVI層上面、V a層上面の各1面である。このうち、層位的な時期差を反映する掘り込み面（遺構が掘り込まれた旧地表面）となるのは、II a層上面、IV a層上面、IV b層上面の3面のみである。本発掘調査で最も多くの遺構を確認したVI層上面は、直上がI層であり、後世の削平を大きく受けている。そのため、VI層上面の確認した遺構には、より上位層の上面を掘り込み面とする遺構が混在している可能性がある。また、V b層上面は、断面で遺構（ピット）を確認したのみであり、11Tで河川跡を確認したV a層上面は、直上がI層であることから、掘り込み面とは特定できない。同様に、IV a層上面、IV b層上面についても、直上がI層である場合には、掘り込み面としての特定はできない。

以下の記述は、本発掘調査区、10T、11Tの順に行う。個々の遺構の記述については、その種類毎に行い、確認



第17図 下飯田東遺跡第1次調査区配置図

面および掘り込み面については、個別に記述する。なお、各遺構の位置については、実際の分布上のまとまりに基づき、本発掘調査区全体を、西から、西側、中央西側、中央東側、東側の4つに分割して記述する。

I. 本発掘調査区（6・7トレンチ）

溝跡17条、土坑9基、ピット6基を確認した。

(1) 溝跡

本発掘調査区において主体となる遺構である。分布は、4ヶ所に分かれる。延長方向は、南北方向（SD2～5・8～14・18溝跡）と東西方向（SD1・6・7・15・16溝跡）の2種に大別される。

SD1溝跡

調査区中央西側に位置する。SD2・3溝跡より新しい。確認面は、I層直下のVI層上面である。掘り込み面は、

層位	色調	土質	備考
基本層	I 10YR4/1 黒褐色	砂質シルト	
	II a 10YR2/2 黒褐色	シルト質砂	灰白色火山灰をブロック状に含む。下面に凹凸あり。耕作土か 鉄分を含む。
	IV a 10YR3/3 暗黒褐色	シルト質砂	上面で灰白色火山灰確認。
	IV b 10YR4/2 暗黒褐色	砂質シルト	鉄分を含む。
	V a 10YR5/1 黒褐色	粘土	V b 層からIV b 層への漸移層。
	V b 10YR7/3 に45°・黄褐色	粘土	
	V c 10YR3/1 黒褐色	粘土	
	M 10YR5/4 に45°・黄褐色	砂	浜延構成砂。
	SK1 1 10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	Ⅵa層土をブロック状に多量含む
	I 10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	Ⅵb層土をブロック状に多量含む
SK2	2 10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を粒状に多量、炭化物を含む
SK3	1 7.5YR2/1 黑色	粘土質シルト	黒褐色シルト質砂・Ⅲ層土をブロック状に含む
SK4	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土をブロック状に少量含む
SK5	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状にやや多く含む
SK6	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土をブロック状に多量含む
SK7	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に少量含む
	2 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状にやや多く含む
	3 10YR4/1 黒褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に多く含む
SK8	1 10YR4/2 暗黒褐色	砂	Ⅵb層土を粒状に多量含む
SD1	1 10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	Ⅵb層土をブロック状に多量、Ⅴb層土を粒状に少量含む
	1 10YR4/2 暗黒褐色	シルト質砂	鉄分を含む
SD2	2 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土をブロック状に含む
	3 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を粒状に含む
	4 10YR4/1 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土をブロック状に含む
SD3	1 10YR4/1 黑褐色	砂質シルト	Ⅵb層土をブロック状に含む
SD4	1 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土をブロック状に多量含む 異面凹凸あり（撲削痕か）
SD5	1 10YR2/2 黑褐色	シルト質砂	Ⅱa層土由来 上部に灰白色火山灰を含む
SD6	1 10YR2/1 黑色	粘土質シルト	
	1 10YR2/2 黑褐色	シルト質砂	灰白色火山灰を粒状に多量含む Ⅱa層土の可能性あり
SD7	2 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	
	3 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を粒状に多量含む
	4 10YR5/4 に45°・黄褐色	砂	黒褐色シルト質砂を粒状に含む
SD8	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	細砂を粒状に含む
砂層	10YR6/4 に45°・黄褐色	細砂	SD8埋没後の僅みにのみ堆積 津液堆植物か
	1 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	
SD9	2 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を粒状に少量含む
	3 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	
	4 10YR4/2 暗黒褐色	シルト質砂	V b 、Ⅵb層土をブロック状に含む
SD11	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	
	2 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土をブロック状に含む
SD12	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に少量含む
	2 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土をブロック状に少量含む
	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	
SD13	2 7.5YR3/3 暗黒褐色	シルト	
	3 10YR4/2 暗黒褐色	シルト	部分的にⅡ層の堆積あり
	1 10YR2/1 黑色	シルト質粘土	
	2 10YR4/1 黑褐色	砂質シルト	
SD14	3 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	植物遺存体を含む
	4 10YR6/2 暗黒褐色	シルト	灰白色火山灰
	5 10YR6/1 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を一部崩壊状に含む
	6 10YR3/1 黑褐色	シルト質粘土	植物遺存体を含む
	7 10YR4/1 黑褐色	細砂	植物遺存体を含む
SD15	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土をブロック状に多量含む 下面凹凸あり（撲削痕か）
SD16	1 10YR5/4 に45°・黄褐色	砂	灰褐色細砂質シルトを互交成層に含む
SD17	1 10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を塊状に含む
P7	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に多量含む
P8	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	Ⅵb層土を粒状に含む
P9	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に少量含む
P10	1 10YR3/1 黑褐色	シルト質砂	V b 層土を粒状に少量含む

第18図 下飯田東遺跡第1次調査 本発掘調査区平面・断面図（土層注記表）

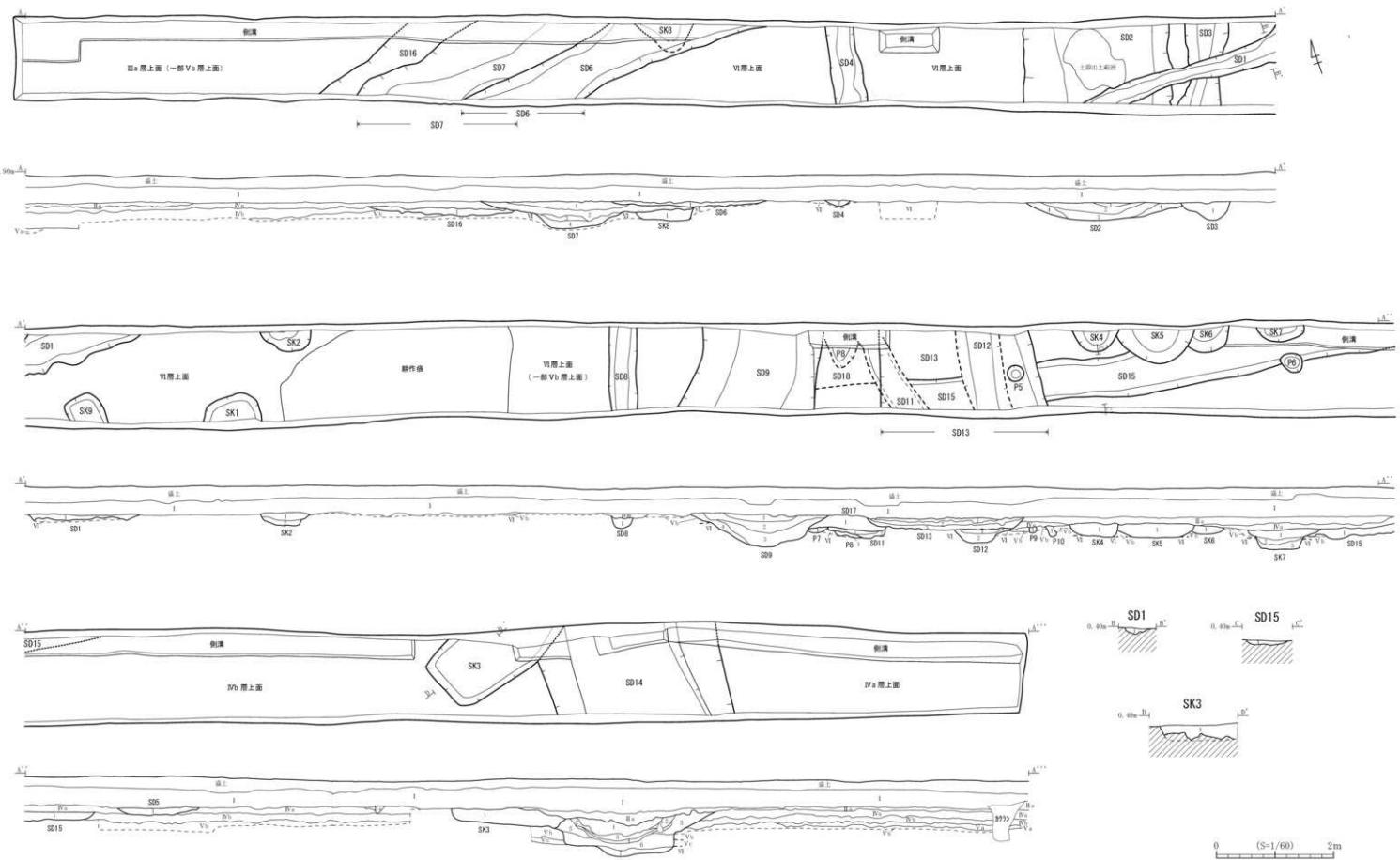
II a 層上面からVI層上面の間である。東西方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向は N-90°-E である。規模は、長さ 5.30 m 以上、上端幅 0.35 ~ 0.70 m、下端幅 0.40 ~ 0.15 m、深さ 0.11 m である。断面形は皿形である。底面には掘削痕が確認された。堆積土は単層である。

遺物は、非クロロ土師器の小片が少量と瓦片が 1 点出土した。掲載遺物はない。

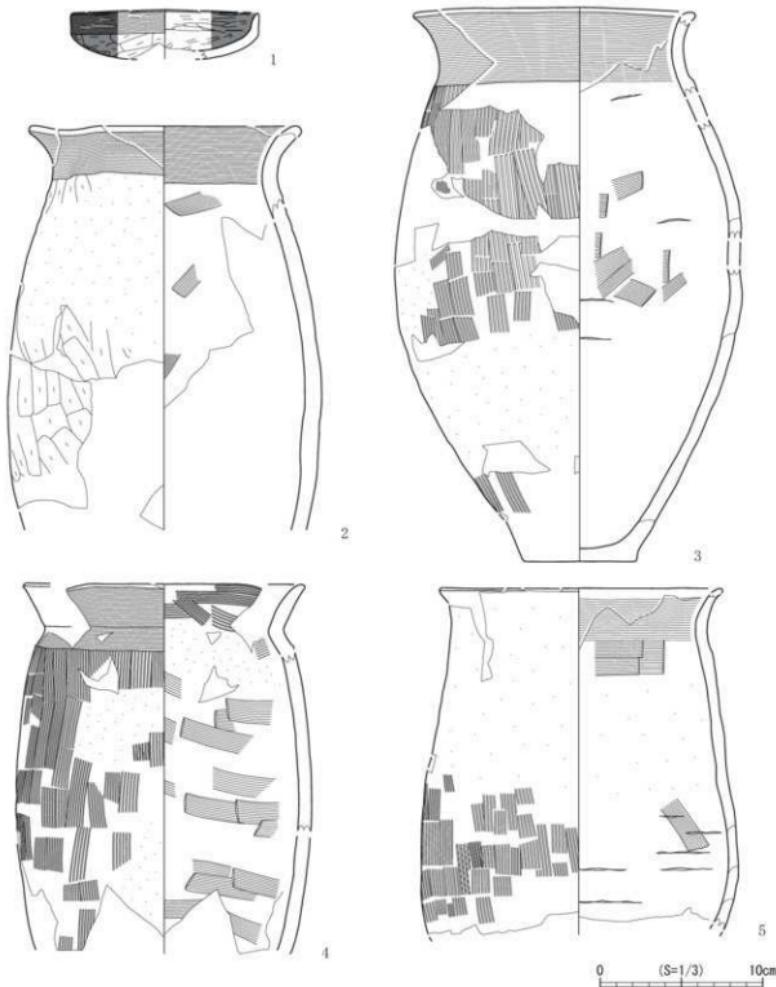
S D 2 溝跡

調査区中央西側に位置する。SD1・3 溝跡より古い。確認面は、I 層直下のVI層上面である。掘り込み面は、II a 層上面からVI層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向は N-15°-E である。規模は、長さ 1.20 m 以上、上端幅 2.40 ~ 2.50 m、下端幅 1.50 ~ 1.65 m、深さ 0.30 m である。断面形は皿形である。堆積土は 4 層に分かれる。

遺物は非クロロ土師器、須恵器、鉄製品が出土し、うち土師器 11 点、鉄製品 1 点を掲載した（第 19・20 図）。

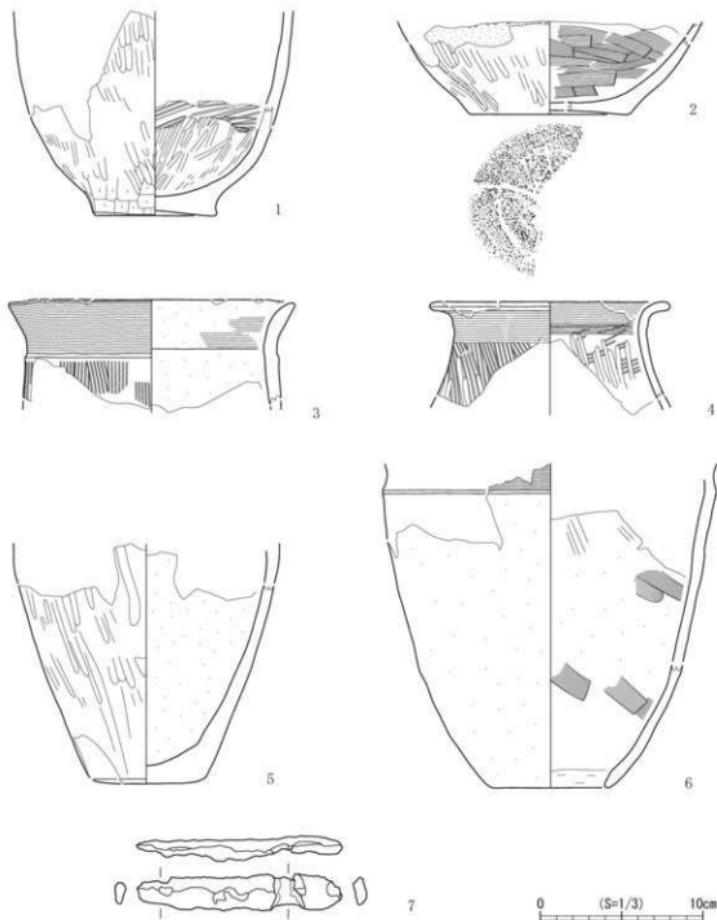


第18図 下飯田東遺跡第1次調査本発掘調査区平面・断面図



掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調査・文様		備考
									口径・幅	高さ・長	底径・厚	外面	内面	
1	C-I	30-1	本調査区	SD2	1	非口クロ 土器器	环	口～底1/2	11.6	(3.1)	-	口：ヨコナデ～ラ ミナギ、体～底、ハ タケズリ、黒色處理	口～体：ミガキ、 黒色處理	内外面黒色處理
2	C-3	30-2	本調査区	SD2	1	非口クロ 土器器	釜	上半2/3	16.6	(24.8)	-	口：ヨコナデ、体～ ラタケズリ(ナナ?)	口：ヨコナデ、体～ ハラナデ	長制釜
3	C-2	30-3	本調査区	SD2	1	非口クロ 土器器	釜	口～底2/3	(17.3)	33.9	6.9	口：ヨコナデ、体～ ハタメ	口：ヨコナデ、体～ ハタメ	長制釜
4	C-5	30-4	本調査区	SD2	1	非口クロ 土器器	釜	口～底1/3	(17.3)	(22.7)	-	口：ヨコナデ、体～ ハタメ	口：ハケヌメ、体～ ハタメ	長制釜 体底部下部欠損 前面磨滅
5	C-4	30-5	本調査区	SD2	1	非口クロ 土器器	釜	口～底2/3	(17.4)	(21.2)	-	ハケヌメ	口：ハラナデ～口 コナデ	長制釜 袋形底変形、前面 磨滅、輪組み痕あり

第19図 下飯田東遺跡第1次調査 本発掘調査区 SD2溝跡一括出土遺物 (1)



掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土部位	種別	器種	残存	法量(cm)		調整・様様		備考	
									口径・幅	器高・長	底径・厚	外側	内面	
1	C-6		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	甕	底部付近 破片	—	(12.5)	7.4	体～底：ミガ キ・ヘラケズ リ	体～底：ハケメ（削 落箇所）→ミガキ ヘラケズリ	長胴甕？ 内面剥落 箇所でミガキ前のハ ケメ調整紙を確認
2	C-7		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	甕	底 1/2	—	(5.7)	(9.8)	ミガキ	ヘラナデ	底部木葉痕
3	C-8		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	甕	口 1/2	(17.6)	(6.7)	—	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ	長胴甕？ 内面 摩滅
4	C-9		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	甕	口～体	(14.8)	(6.9)	—	口：ヨコナデ、体： ハケメ・ヘラミガ キ	口：ヨコナデ、体： ハケメ・ヘラミガ キ	小型長胴甕？
5	C-10		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	甕	体～底 1/2	—	(4.7)	(7.0)	ヘラミガキ		小型甕 内面摩 滅
6	C-11		6T	SD2	1	非口クロ 土師器	瓶	口～体 2/3	—	(19.8)	7.0	口：ヨコナデ、体： ハケメ・ヘラミガ キ	体：ヘラナデ。ミ ガキ。底付近：ヘ ラケズリ	全体に剥落・摩滅 あり（使用痕？）
7	N-1		6T	SD2	1	鉄製品	刀子？		(2.2)	(12.7)	(0.8)			国左衛が基盤か

第20図 下飯田東遺跡第1次調査 本発掘調査区 SD2溝跡一括出土遺物 (2)

これらの遺物は、堆積土1層の上部から一括で出土したものである。第19図1は壺である。丸底で、短い口縁部が直立する。口縁部と体部の境界に稜があり、内面にもそれと対応する屈曲がみられる。外面調整は、口縁部がヨコナデの後ミガキで体部から底部がヘラケズリである。内面調整はヘラミガキである。内外面とも黒色処理が施されている。形態的には、いわゆる関東系土器器ともいえるが、黒色処理や内面にヘラミガキが施される点に相違がある。

第19図2～5、第20図1～5は壺である。全体形状が推定できる資料（第19図2～5）は、いずれも器高25cm以上となる大形の壺である。体部最大径が中央にあるもの（第19図2～4）と、下半部にあると推定されるものの（第19図5）とがある。頸部の段は、第19図3、4、第20図3、6にみられるが、いずれも明瞭なものではない。調整は、口縁部は外面がヨコナデ、内面がヨコナデ、ハケメで、体部は外面がハケメ、ケズリ、ヘラミガキ、内面がヘラナデ、ハケメ、ヘラミガキである。

第20図6は、無底の大形瓶である。器高は20cm以上である。口縁部は欠損しているが、器形の特徴から口径が土器の最大径になると推定される。口縁部と頸部の境界には後が形成され、その後上には沈線がめぐる。調整は、全体に剥落、摩滅が顕著で詳細は不明だが、頸部外面がヨコナデ、体部内面がヘラナデである。内面の底部付近にはケズリがみられる。

第20図7は、刀子の可能性がある鉄製品である。

これらの遺物の年代は、土器器の形態的特徴から7世紀末～8世紀前葉と考えられる。これは、本遺構の埋没年代と考えられる。

S D 3溝跡

調査区中央西側に位置する。SD1溝跡より古く、SD2溝跡より新しい。確認面は、I層直下のVI層上面である。掘り込み面は、IIa層上面からVI層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-22°-Eである。規模は、長さ1.30m以上、上端幅0.60～0.75m、下端幅0.15～0.30m、深さ0.33mである。断面形は、やや開いたU字形である。堆積土は単層である。

遺物は、堆積土1層からロクロ土器器壺の破片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 4溝跡

調査区西側に位置する。重複関係はない。確認面は、I層直下のVI層上面である。掘り込み面は、IIa層上面からVI層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-10°-Eである。規模は、長さ0.85m以上、上端幅0.55m、下端幅0.15～0.35m、深さ0.15mである。断面形は、大きく開いたU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

S D 5溝跡

調査区東側に位置する。重複関係はない。断面（北・南壁面）でのみ確認した。断面では、IVa層上面から掘り込まれるが、直上がI層であるため、掘り込み面は、IIa層上面またはIVa層上面である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-15°-Eである。断面観察に基づく規模は、長さ1.50m以上、上端幅1.40m、下端幅0.75m、深さ0.12mである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

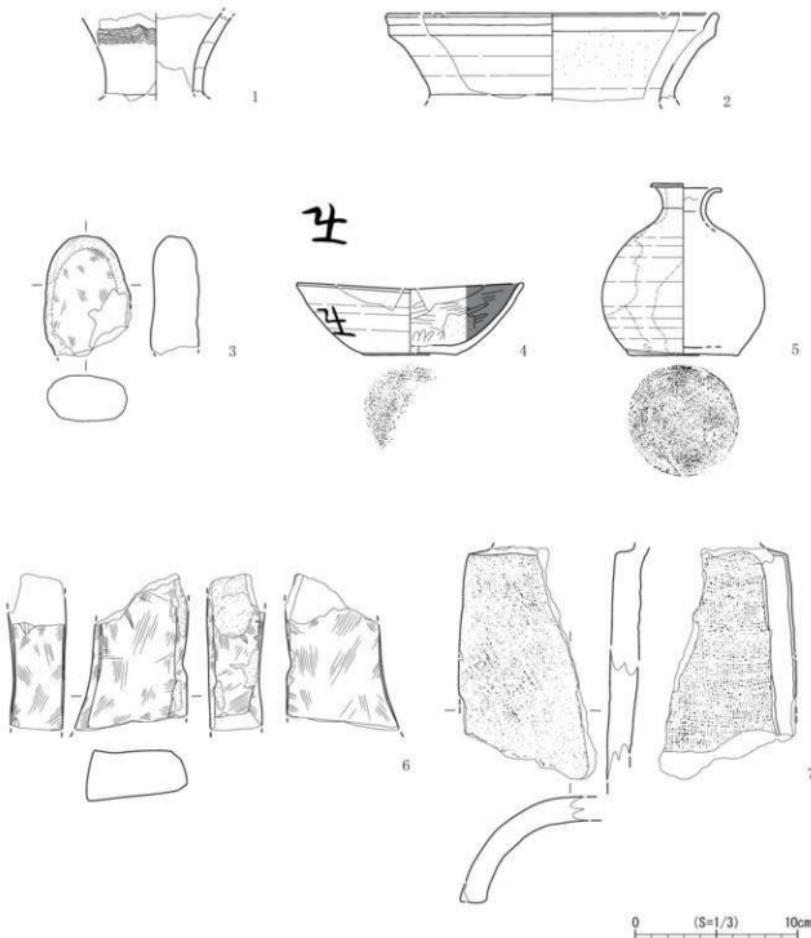
S D 6溝跡

調査区西側に位置する。SD7溝跡より新しい。確認面はI層直下のVI層上面である。掘り込み面は、IIa層上面からVI層上面の間である。東西方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-65°-Eである。規模は、長さ5.20m以上、上端幅0.85m、下端幅0.48m、深さ0.10mである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。

遺物は、底面から須恵器1点（第21図1）が出土した。器種は須恵器壺（瓶か）と考えられる。口縁部は欠損している。頸部に波状文がみられる。年代は、7世紀前半と考えられる。

S D 7溝跡

調査区西側に位置する。SD6溝跡より古く、SD16溝跡、SK8土坑より新しい。確認面は、I層直下のIVa層上面である。掘り込み面は、IIa層上面またはIVa層上面である。東西方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-68°-Eである。規模は、長さ5.50m以上、上端幅2.30m、下端幅0.90m、深さ0.45mである。断面形は、遺構の上半部は壁面が緩やかに立ち上がる皿形であるが、下半部は逆台形である。堆積土は4層に分かれる。この内堆積土1層は、土色、土質や灰白色火山灰を含む点から、基本層IIa層である可能性がある。



第21図 下飯田東遺跡第1次調査 本発掘調査区 SD6 溝跡他出土遺物

掲載番号	登録番号	写真図版	出土区	出土遺構	出土部位	種別	器種	残存	法量(cm)					
									日付・層	高さ	直径・厚	外側	内側	
1	E-1	321	本調査区	SD6	溝面	須恵器	口縁部片	-	(5.3)	-	口:波状文	つなぎ痕あり	内外自然縫(隣灰)	
2	E-2	322	本調査区	SD7	2	須恵器	吏	口 1/6	(20.0)	(5.4)	-	ロクロナデ	生焼け一部剥落・ 磨減、白灰合む	
3	K-1	323	本調査区	SD7	1	羅石器	磨石	-	(5.3)	(7.3)	(3.0)	-	磨削面・欠損 花崗岩系	
4	D-1	324	本調査区	SD14	2	ロクロ土器	壊	口~底 2/3	(13.8)	(4.4)	(5.8)	ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理	底:回転式切り 削青あり
5	I-4	325	本調査区	SD14	5	灰陶陶器	小瓶	口は不定形	4.2	10.5	6.7	ロクロ 仙漆剥離	ロクロ	束縛痕 ほぼ圆形口部一部 欠損・剥離・切欠痕 毛燒きの可能性あり 代
6	K-2	326	本調査区	SD14	5	石製品	砾石	-	(6.8)	(9.6)	(3.2)	磨面 4面	-	砾面 4面 上下欠損 自然面あり 砂岩
7	F-1	327	本調査区	SK1	1	瓦	丸瓦	破片	須縫	厚 1.7	純目印き痕→ ナデ消し	-	布目痕	高さ 5.5 尾部裏破片 (玉縁部分)

なお、堆積土1層が基本層IIa層とすれば、SD7溝跡の掘り込み面はIVa層上面に、SD6溝跡の掘り込み面はIIa層上面に特定される。この場合、調査区東側では、同方向の溝跡が、西からSD16・7・6溝跡の順位に掘り込み面を逆えて形成されたことになる。

遺物は、I・2層から非ロクロ土師器、須恵器、磨石が出土した。須恵器と磨石を1点ずつ掲載した（第21図2・3）。第21図2は須恵器甕で、体部以下が欠損している。年代は口縁部の特徴から8世紀以降と考えられる。

S D 8 溝跡

調査区中央東側に位置する。重複関係はない。確認面は、I層直下のVb層上面である。掘り込み面は、IIa層上面からVb層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-18°-Eである。規模は、長さ1.45m以上、上端幅0.45～0.48m、下端幅0.20～0.22m、深さ0.19mである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。なお、堆積土の直上で、溝跡を部分的に覆う砂層を確認した。その特徴から、二次的に堆積した浜堤堆積土あるいは津波堆積物（時期不明）の可能性がある。

遺物は、I層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 9 溝跡

調査区中央東側に位置する。P7、SD15・18溝跡より新しい。確認面は、I層直下のVb層上面である。掘り込み面は、本溝跡がVb層上面を掘り込み面とするSD15溝跡より新しいため、IIa層上面からVb層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-22°-Eである。規模は、長さ1.25m以上、上端幅1.90～2.20m、下端幅1.10m、深さ0.55mである。断面形は上部が開いたU字形である。堆積土は4層に分かれる。遺物は、I・3層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 1 溝跡

調査区中央東側に位置する。SD13・18溝跡より古く、SD15溝跡、P8より新しい。SD18溝跡の底面で確認した。掘り込み面は、本溝跡がSD15溝跡より新しいため、IIa層上面からVb層上面の間である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-20°-Wである。規模は、長さ1.50m以上、上端幅0.50m以上、下端幅0.35m、深さ0.13m以上である。断面形は皿形である。堆積土は単層である。

遺物は、I層から非ロクロ土師器の小片が1点出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 2 溝跡

調査区中央東側に位置する。SD13溝跡より古い。SD13溝跡の底面で確認した。断面観察から、掘り込み面はIIa層上面またはIVa層上面である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-10°-Eである。規模は、長さ1.40m以上、上端幅0.73m以上、下端幅0.38m、深さ0.23m以上である。断面形は逆台形である。堆積土は2層に分かれる。

遺物は、I層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 3 溝跡

調査区中央東側に位置する。SD12・18溝跡より新しい。確認面と掘り込み面は、ともにIIa層上面である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-13°-Eである。規模は、長さ1.35m以上、上端幅2.70m、下端幅0.38m、深さ0.20mである。断面形は皿形である。堆積土は3層に分かれる。堆積土3層は細砂層で互層状の堆積がみられる。

遺物は、2・3層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 4 溝跡

調査区東側に位置する。SK3土坑より古い。確認面と掘り込み面は、ともにIVa層上面である。南北方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-0°-Eである。規模は、長さ1.90m以上、上端幅3.00m、下端幅1.70m、深さ0.60mである。断面形は、底面から垂直に立ち上がり、上半部で開いたU字形となる。堆積土は7層に分かれる。堆積土4層は灰白色火山灰層である。最下部の堆積土6・7層からは自然木等の植物遺存体がまとまって出土した。

遺物は、2・5層から非ロクロ土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、石製品が出土した。3点を掲載した（第21図4～6）。第21図4はロクロ土師器甕である。灰白色火山灰直上の堆積土2層から出土した。器形は、底部から内縁部に立ち上がり、体部は外傾して口縁部にいたる。内面は、ヘラミガキのち黒色処理がなされている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、切り離し後の再調整は認められない。また、体部には墨書きが見られるが、銘は不明である。

これらの特徴から、年代は10世紀代と考えられる。

第21図5は、東海産とみられる灰釉陶器の小瓶である。灰白色火山灰層の直下に位置する堆積土6層上部より出土した。器形は、体部が球形に近く、頸部から口縁部にかけて強く外反する。体部の最大径は、やや底部寄りにある。底部の切り離し技法は回転糸切りである。灰釉は、一部が剥落しているが頸部から体部にかけてみられる。施釉は刷毛塗りによる可能性がある。灰釉陶器小瓶の生産は、愛知県猿投窯・尾北窯において9~10世紀を中心と確認されている(齊藤1995、尾野2000)。本遺跡出土資料の製作年代は、10世紀初頭(西暦915年)の降灰とみられる灰白色火山灰層の直下から出土したこと、および刷毛塗りによる施釉の可能性があることから、9世紀代であると推定される。猿投窯編年では、黒錆14号窯式および黒錆90号窯式に比定される。なお、施釉方法の変化については、10世紀以降、それまでの刷毛塗りから漬け掛けへと変化したことが指摘されている(齊藤前掲)。また、廃棄年代については、灰白色火山灰層の直下から出土したことから、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

第21図6は砾石である。両端部を欠損している。

S D 1 5 溝跡

調査区中央東側に位置する。SD9・11・12・13溝跡、SK5・6・7土坑、P5・6より古い。確認面と掘り込み面は、ともにIV b層上面である。東西方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-90°-Eである。規模は、長さ11.00m以上、上端幅0.70m、下端幅0.50m、深さ0.18mである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。

遺物は、I層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 6 溝跡

調査区西側に位置する。SD7溝跡より古い。確認面と掘り込み面は、ともにIV b層上面である。東西方向の溝跡で、両端とも調査区外へ延びる。方向はN-67°-Eである。規模は、長さ2.70m以上、上端幅0.90m以上、下端幅0.23m、深さ0.13mである。断面形は皿形である。堆積土は単層である。

遺物は、I層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S D 1 8 溝跡

調査区中央東側に位置する。SD9・13溝跡より古く、SD11溝跡、P7・8より新しい。断面でのみ確認した。本遺構の直上はI層である。立ち上がり部分を他の溝跡に掘り込まれているため、遺構の全体形状は不明であるが、調査区の南北両壁で同一の堆積土を確認し、南北に延びる遺構とみられることから溝跡とした。掘り込み面は、II a層上面からVI層上面の間である。方向の詳細は不明である。規模は、長さ1.30m以上、幅1.35m以上、深さ0.23m以上である。断面形は不明である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(2) 土坑

東側で確認したSK3土坑を除き、調査区中央部に分布する。

S K 1 土坑

調査区中央西側に位置する。重複関係はない。確認面は、I層直下のVI層上面である。掘り込み面は、II a層上面からVI層上面の間である。遺構の南側は調査区外へ延びる。平面形は、やや不整な円形もしくは楕円形を呈するとみられる。規模は、東西1.0m、南北0.4m以上、深さ0.2mである。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。

遺物は、I層から非ロクロ土師器とロクロ土師器の小片と丸瓦2点が出土した。掲載したのは、玉縁付丸瓦である(第21図7)。凸面には繩叩き目の後にナデ消し、凹面には布目痕が残る。これらの特徴から、丸瓦の年代は、8世紀前葉以降である。遺構の埋没年代は、出土遺物にロクロ土師器を含むことから、9世紀以降と考えられる。

S K 2 土坑

調査区中央西側に位置する。重複関係はない。確認面は、I層直下のVI層上面である。掘り込み面は、II a層上面からVI層上面の間である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、やや不整な円形もしくは楕円形を呈するとみられる。規模は、東西0.83m、南北0.32m以上、深さ0.23mである。断面形は、上が開いたU字形である。堆積土は2層に分かれる。

遺物は、1層から非ロクロ土師器の小片が少量と、2層から丸瓦片が2点出土した。丸瓦は、2点とも玉縁付丸瓦と推定される。凸面には繩叩き目の後にナデ消し、凹面には布目痕が残る。年代は、SK1土坑の出土丸瓦と同様、8世紀前葉以降と考えられる。図版として掲載できる遺物はない。

S K 3 土坑

掲載番号	登録番号	写真版	出土区	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)		調整・文様		特徴・備考
									日津・幅	基面・長	底津・厚	外面	
1	G1		本調査区	I	瓦	平瓦	頭部側破片	頭幅 柄幅	長(9.4)	厚(1.8)	凸面:縫明き目 →ナゲ消し	凹面:布目痕	瓦合む 薄れ口掌底 (網掛け範囲) 瓦石に 利用?
2	I-1		本調査区	I	中世 陶器	壺	体部破片	—	(5.8)	—	菊花文の押印 あり 自然釉	ヘラナデ	常滑 14C?
3	I-2		本調査区	I	中世 陶器	壺	口縁部破片	—	(5.6)	—	ロクロ 自然釉	自然釉	常滑 小型壺 口外面: 自然釉 東~14C?
4	I-3		本調査区	I	陶器	罐鉢	体部破片	—	(2.9)	—	蘿苔青くムラあり	スジ目	蘿井美濃 長縄 10C?

第22図 下飯田東遺跡第1次調査 本発掘調査区遺溝外出土遺物

調査区東側に位置する。SD14 溝跡より新しい。確認面と掘り込み面は、ともにIV a 層上面である。直上にはII a 層が堆積する。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、長方形の可能性がある。長軸の方向は、N-70° E である。長軸を基準とした規模は、長軸 2.25 m 以上、短軸 1.2 m、深さ 0.25 m である。断面形は逆台形である。堆積土は单層である。底面の一部には、掘削痕がみられる。

遺物は、I 層から須恵器壺の部品片が1点出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 4 土坑

調査区中央東側に位置する。SK5 土坑より新しい。確認面は、II a 層下面である。掘り込み面は、IV a 層上面からV b 層上面の間である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、円形または梢円形を呈するとみられる。規模は、東西 0.80 m 以上、南北 0.32 m 以上、深さ 0.22 m である。断面形は、上が開いたU字形である。堆積土は单層である。

遺物は、I 層から非ロクロ土師器の小片が少量出土した。掲載遺物はない。

S K 5 土坑

調査区中央東側に位置する。SK4 土坑より古く、SK6 土坑、SD15 溝跡より新しい。確認面は、II a 層下面である。掘り込み面は、IV a 層上面からV b 層上面の間である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、円形または梢円形を呈するとみられる。規模は、東西 1.30 m 以上、南北 0.58 m 以上、深さ 0.24 m である。断面形は、上が開いたU字形である。堆積土は单層である。

遺物は、I 層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 6 土坑

調査区中央東側に位置する。SK5 土坑より古く、SD15 溝跡より新しい。確認面と掘り込み面は、ともにV b 層上面である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、円形または梢円形を呈するとみられる。規模は、東西 0.60 m 以上、南北 0.40 m 以上、深さ 0.14 m である。断面形は、上が開いたU字形である。堆積土は单層である。遺物は出土していない。

S K 7 土坑

調査区中央東側に位置する。SD15 溝跡より新しい。確認面は、IV a 层直下のV b 層上面である。掘り込み面は、

本土坑がIV b 層上面を掘り込み面とする SD15 溝跡より新しいため、IV b 層上面である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は、楕円形を呈するとみられる。規模は、東西 0.60 m 以上、南北 0.40 m 以上、深さ 0.14 m である。断面形は、下半部が逆台形を呈し、上半部は開いた U 字形である。堆積土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

S K 8 土坑

調査区西側に位置する。SD6・7 溝跡より古い。SD7 溝跡の底面で確認した。掘り込み面は、II a 層上面から VI 層上面の間である。遺構の北側は調査区外へ延びる。平面形は不明である。規模は、東西 1.00 m 以上、南北 0.45 m 以上、深さ 0.20 m である。断面形は逆台形である。堆積土は単層である。遺物は、1 層から非ロクロ土師器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S K 9 土坑

調査区中央西側に位置する。重複関係はない。確認面は I 層直下の VI 層上面である。掘り込み面は、II a 層上面から VI 層上面の間である。遺構の南側は調査区外へ延びる。平面形は、長方形の可能性がある。長軸の方向は、N 5° - W である。長軸を基準とした規模は、長軸 0.65 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.03 m である。断面形は皿形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(3) ピット

6 基を確認した。この内、平面的に確認できたのは P5・6・8 の 3 基で、P7・9・22 の 3 基は断面でのみ確認した。6 基とも調査区中央東側に分布する。P5・6 は径 0.30 ~ 0.40 m の円形、P8 は長軸 0.60 m 以上の楕円形のピットである。確認面は、P5 が SD13 の底面、P7 が SD18 溝跡の底面、P8 が SD11 溝跡の底面、P6・9・22 が V b 層上面である。堆積土は全て単層である。いずれのピットからも遺物の出土はない。

(4) 遺構外出土遺物

基本層 I 層から出土した遺物 4 点を掲載した（第 22 図 1 ~ 4）。第 22 図 1 は布目痕のある平瓦である。SK1・2 土坑からも同様の瓦片が出土した。第 22 図 2・3 は常滑産中世陶器である。年代は 13 ~ 14 世紀と考えられる。第 22 図 4 は、瀬戸美濃産の鉄軸擂鉢である。年代は 17 世紀代の可能性がある。

II. 10 トレンチ

豎穴住居跡 4 軒、溝跡 3 条、ピット 17 基、性格不明遺構 2 基、河川跡 1 条を確認した。確認調査であるため、原則的に遺構の掘り込みは行っていない。

(1) 豊穴住居跡

現表土から確認面までの深度は 15 ~ 20cm と浅く、4 軒とも現代の耕作による削平を受けている。いずれも床面及び施設の確認は行っていない。分布は南半に集中する。SI3・4 豊穴住居跡ではカマドを確認した。カマドはともに北壁に設置され、その軸線（煙道方向）は、真北方向にはほぼ一致する。これらと重複する SI2 豊穴住居跡も近い軸線をもつと考えられる。SII 豊穴住居跡は、これら 3 軒の住居の北 22 m に位置する。軸線は、SI2 ~ 4 豊穴住居跡と異なる。なお、SII・2 豊穴住居跡における軸線の方向には、確認した辺の内、より真北方向に近いものを採用した。規模の記述は、軸線方向を南北、それに直交する方向を東西として行った。

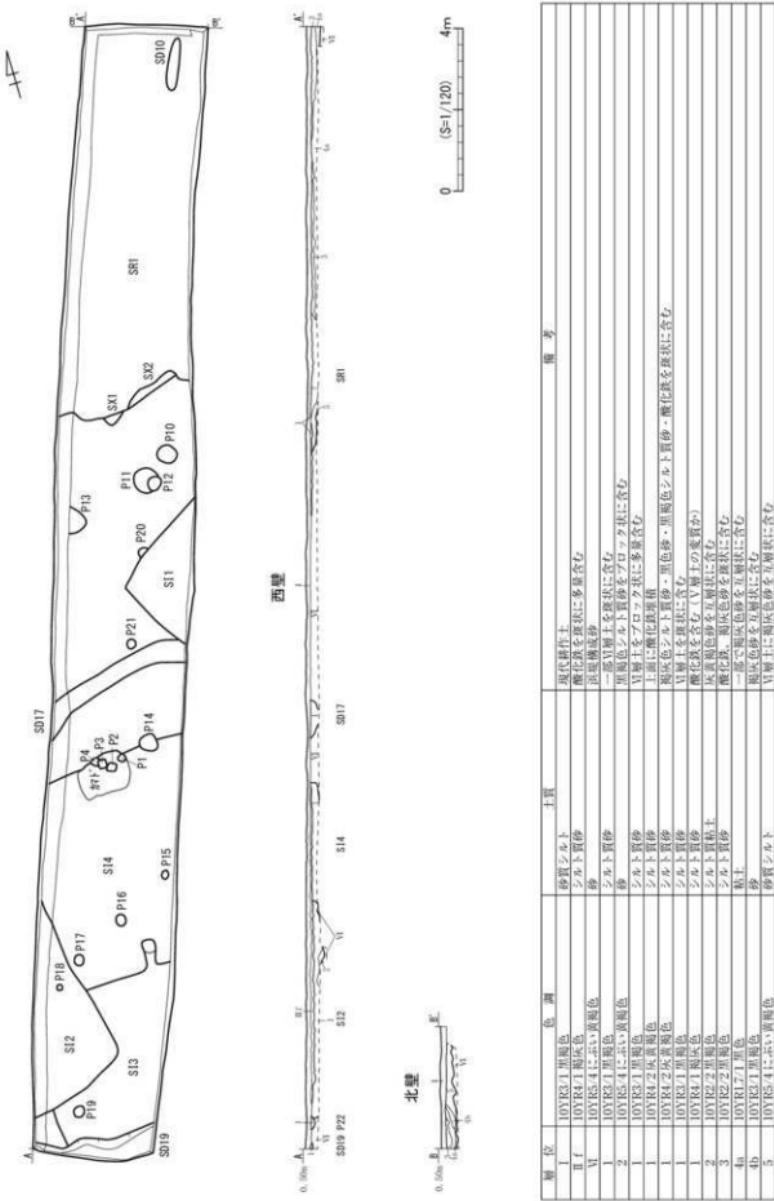
S I 1 豊穴住居跡

調査区中央に位置する。SD17 溝跡、P20 より新しい。確認面は II f 層直下の VI 層上面である。住居跡の北西隅部を確認した。他の部分は調査区外へ延びる。軸線の方向は N 33° - W である。規模は、南北 2.20 m 以上、東西 2.80 m 以上である。確認面では、住居内堆積土と考えられる黒褐色のシルト質砂を確認した。面上に 5 ~ 10cm 掘り込んだが、床面は確認できなかった。カマドは確認していない。

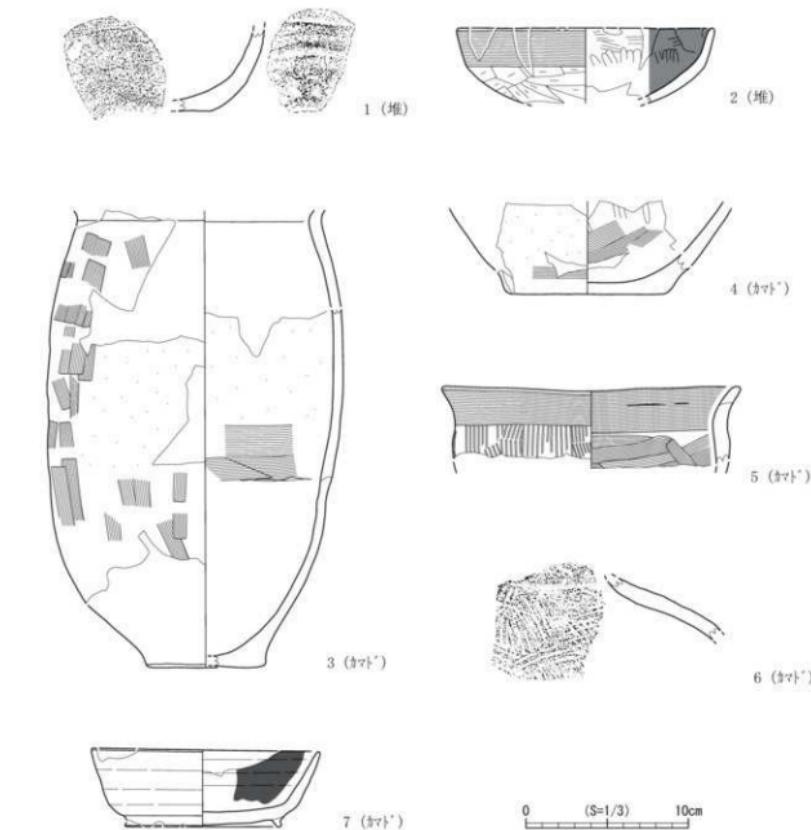
遺物は、堆積土 1 层から出土した須恵器瓶 1 点（第 24 図 1）の他、非ロクロ土師器の小片が少量出土した。

S I 2 豊穴住居跡

調査区南側に位置する。PI8 より古く、SI3・4 溝跡より新しい。確認面は II f 層直下の VI 層上面である。住居跡の南東隅部を確認した。他の部分は調査区外へ延びる。軸線の方向は N 16° - W である。規模は、南北 4.40 m 以上、東西 2.60 m 以上である。調査区西壁際の側溝断面では、2 枚の土層を確認し、一部で住居掘方の底面を確認した。確認面から掘方底面までの深さは、30cm である。2 枚の土層の内、1 層は黒褐色のシルト質砂で、住居内堆積土と考えられる。VI 層土を主体とする 2 層は、掘方埋土の可能性が考えられる。2 層上面が床面と考えられるが、面



第23図 下飯田東道路第1次調査 10トレンチ平面・断面図



掲載番号	登録番号	写真 図版	出土 年	出土 遺構	出土 位置	種別	器種	残存	法量(cm)			調整・文様		備考
									口径・幅	器高・長	底径・厚	外面	内面	
1	E-3	33-1	10T	SII	I	須恵器	瓶	底部破片	—	(5.0)	—	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
—	C-12	33-2	10T	SII	I	弄口クロ 土師器	环					口:ヨコナデ、 体:ヘラケズリ	ヨコナデ	関東系 外面に黒色 付着物あり
2	C-13	33-3	10T	SII	I	弄口クロ 土師器	环	口~侈 1/4	(15.6)	(4.6)	—	ヘラケズリ→ 黑色処理 ヨコナデ	ヘラミガキ	白封合む
3	C-14	33-4	10T	SII	カマド	弄口クロ 土師器	甕	侈~底 2/3	—	(28.1)	(7.4)	ヘラナデ	ヘラナデ	長胴甕両面磨滅
4	C-15	33-5	10T	SII	カマド	弄口クロ 土師器	甕	底部破片	—	(5.7)	9.4	ナデ(底部偏) 体:ヘラナデ ミガキ	体:ヘラナデ ミガキ	白封合む 両面 木型痕(木本2枚重ね) 外側磨滅
5	C-16	33-6	10T	SII	カマド	弄口クロ 土師器	甕	口~侈 1/3	18.4	(5.0)	—	口:ヨコナデ、 体:ハケナ 平行沈 繩文	ヘラナデ	長胴甕 外面摩滅
6	C-17	33-7	10T	SII	カマド	弄口クロ 土師器	甕?	底部破片	—	(7.5)	—	(調整痕)	ヘラナデ	
7	E-4	33-8	10T	SII	カマド	須恵器	高台 付环	口~底 4/5	(13.9)	4.8	(9.5)	ロクロナデ 底部 凹部ヘラケズリ	ロクロナデ 変化物 着(滑れ口にもあり)	底成不良、口縁部と高台 の一部欠損

第24図 下飯田東遺跡第1次調査 10トレンチ竪穴住居跡出土遺物

的には確認していない。カマドは確認していない。

遺物は、須恵器と瓦の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

S I 3 穫穴住居跡

調査区南側に位置する。SI2 穫穴住居跡、SD19 溝跡、P19 より古く、SI4 穫穴住居跡より新しい。確認面は II f 層直下の VI 層上面である。東側は調査区外へ延びる。軸線の方向は N-3° -W である。規模は、南北 3.60 m 以上、東西 4.00 m 以上である。確認面では、住居内堆積土と考えられる黒褐色のシルト質砂を確認した。床面は確認していない。カマドは、北壁で長さ 0.60 m の煙道を確認した。煙道の端には、煙出し穴の可能性がある径 0.30 m のピットがみられる。住居内のカマド部分では、堆積土中からまとまった焼土、炭化物を確認した。

遺物は、堆積土から非ロクロ土師器と須恵器の小片が出土した。非ロクロ土師器坏 1 点を掲載した（写真図版 33-2）。体部と口縁部の一部が残存する。丸底で、短い口縁部が内傾する形態と推定される。外面調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリで、内面調整はヨコナデである。黒色処理は施されていない。いわゆる関東系土師器と考えられる。この坏の年代は、7世紀後半から 8世紀初頭と考えられる。

S I 4 穫穴住居跡

調査区南側に位置する。SI2・3 穫穴住居跡、P1 ~ 4・14 ~ 17 より古い。確認面は II f 層直下の VI 層上面である。遺構の東・西側は調査区外へ延びる。軸線の方向は N-4° -W である。規模は、南北 5.34 m 以上、東西 4.80 m 以上である。確認面では、住居内堆積土の可能性がある黒褐色のシルト質砂を確認した。西壁際の側溝断面で確認された土層はこれのみで、明確な掘方埋土は確認できなかった。側溝断面では本住居跡北壁の立ち上がりと一部底面を確認した。この断面では掘方埋土は確認できず、この底面が床面となる可能性も考えられる。今回は部分的な確認調査であるため、床面の確認は面的な調査によって行う必要がある。確認面からこの面までの深さは、20cm である。

カマドは、北壁で確認した。その範囲は、東西 1.30 m、南北 0.94 m で、白色粘土が八の字形に分布する。この白色粘土は、カマドの構築土と考えられる。カマドの平面形は、やや住居の外側に張り出す形である。よってカマドの構築は、住居の壁面を一部掘り込む形で行われたと考えられる。煙道はないが、削平を受けている可能性が高いため、本来的に煙道を作わないかは不明である。床面は、調査区西壁の断面観察とカマド内からの遺物出土位置から、遺構確認面から近いレベルにあると考えられる。

なお、カマドについては、確認当初は土坑として扱い、内部を堆積土として掘削した。土器がまとまって出土した後、住居跡に伴うカマドとして判断し、調査を進めた。よって、住居内の堆積土は原則的に確認のみに留めたが、カマド部分については、遺構の掘削を行った。

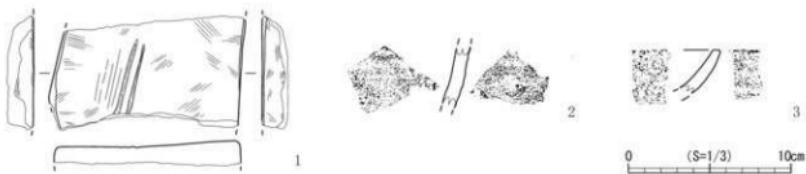
遺物は、堆積土およびカマドから出土した非ロクロ土師器坏 1 点・壺 3 点・壺 (?) 1 点、須恵器 1 点を掲載した（第 24 図 2 ~ 7）。第 24 図 2 は、堆積土から出土した坏である。底部は欠損しているが、丸底と推定される。口縁部はやや内縁気味に外傾する。外面の口縁部と体部の境界には稜がみられる。この後に対応して内面にも弱い屈曲がみられる。外面調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリで、内面調整はヘラミガキである。内面は黒色処理が施されている。

第 24 図 3 ~ 7 は、カマドから一括で出土した資料である。3 ~ 5 は壺である。3 は、口縁部を欠損しているが、体部形状が楕円形となる長胴の大形壺である。調整は、全体に摩滅が著しいが、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。5 は、口縁部から体部上部のみ残存している。口縁部は外反し、体部との境界に段は認められない。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメ、内面がヘラナデである。6 は、壺の肩部とみられる資料である。その傾きから、体部は球胴形になると推定される。調整は、外面がハケメあるいは平行沈線文が一部斜格子状に施され、内面がヘラナデである。7 は、須恵器高台付坏である。底部から体部にかけてやや丸みを持ち、体部から口縁部にかけては直線的に外傾する。底面には回転ヘラケズリがみられ、中央部がやや下がる。高台は、ヘラケズリの後、取り付けられる。SI4 穫穴住居跡の年代は、カマド出土の須恵器高台付坏の特徴から 7世紀末 ~ 8世紀前葉と考えられる。

(2) 溝跡

S D 10 溝跡

調査区北側に位置する。SR1 河川跡より新しい。確認面は、I 層直下の SR1 河川跡堆積土の上面である。全長が短く、平面形が長楕円を呈するが、便宜的に溝跡とした。南北方向の溝跡である。方向は N-35° -E である。規模は、



第25図 下飯田東遺跡第1次調査 10トレンチ SD19溝跡他出土遺物

長さ1.30m、上端幅0.28mである。遺物は出土していない。

S D 1 7 溝跡

調査区中央に位置する。SI1 壁穴住居跡より古い。確認面は、I層直下のVI層上面である。東西方向の溝跡で、両端ともに調査区外へ延びる。全体に緩やかにカーブするが、確認範囲における凡その方向はN84°Eである。規模は、長さ4.30m以上、上端幅0.58m、下端幅0.4m、深さ0.20mである。断面形は楕円形である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S D 1 9 溝跡

調査区南側に位置する。SI3 壁穴住居跡より新しい。確認面は、I層直下のVI層上面である。東西方向の溝跡で、両端および南側が調査区外へ延びる。方向はN90°Eである。規模は、長さ3.10m以上、上端幅0.70m以上、下端幅0.50m以上、深さ0.15mである。断面形は楕円形である。堆積土は1層である。

遺物は、I層から非ロクロ土器の小片が少量と石製品が出土した。砥石1点を掲載した（第25図1）。破損のため全体形状は不明であるが、3面の砥面を持つ比較的大形の砥石である。

(3) ピット

P 22は西壁断面でのみ確認した。全体的に調査区中央から南側に分布する。I層下面で確認した。重複関係は、特に南側の住居跡と重複するピットは全て住居跡より新しい。平面形は円形または稍円形である。径は20cm前後の小形ピットと40~60cmの大形ピットがある。

遺物は、遺構確認時に、P10・12・13・14から非ロクロ土器の小片が少量出土したが、図版として掲載できる遺物はない。

(4) 性格不明遺構

S X 1 性格不明遺構

調査区北側に位置する。SR1河川跡より古い。確認面は、I層直下のVI層上面である。平面形は、SR1河川跡に削平されており不明である。規模は、東西0.50m以上、南北0.25m以上である。遺物は出土していない。

S X 2 性格不明遺構

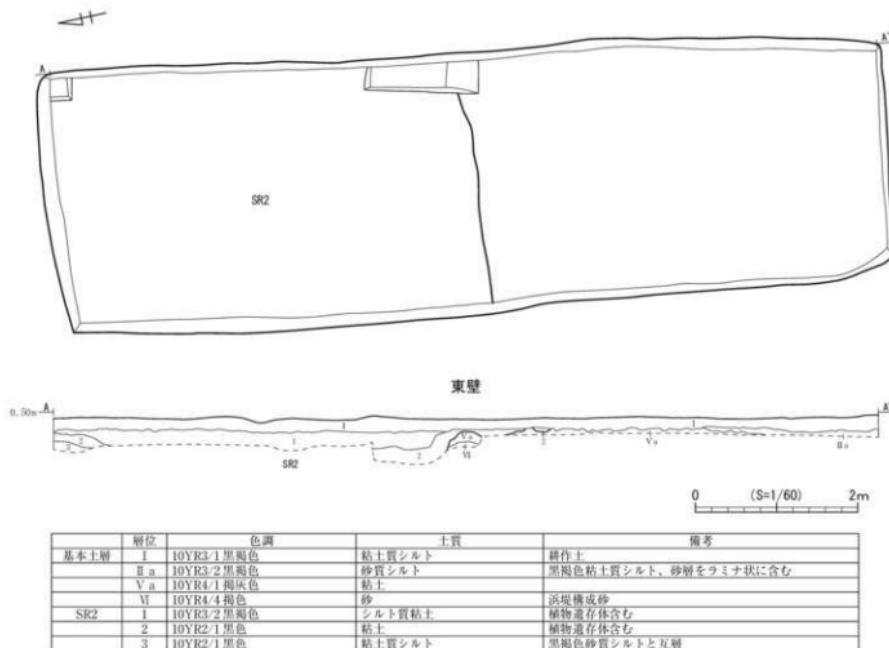
調査区北側に位置する。SR1河川跡より新しい。確認面は、I層直下のVI層上面である平面形は、不整な長方形である。規模は、東西1.45m、南北0.22mである。遺物は出土していない。

(5) 河川跡

S R 1 河川跡

調査区北側に位置する。SX2性格不明遺構、SD10溝跡より古く、SX1性格不明遺構より新しい。確認面は、I層直下のVI層上面である。確認した範囲は、北から東へ折れる河川跡のコーナー部分と推定される。ただし、10Tの北側に位置する本発掘調査区では明確な河川跡は確認していない。河川の幅は、調査区東壁で7.40mである。

遺物は、堆積土1層から、非ロクロ土器の小片が少量の他、山茶碗窯系の中世陶器片口鉢が出土した（第25図2）。



第26図 下飯田東遺跡第1次調査 11 トレーニング平面・断面図

中世陶器の年代は13世紀代の可能性がある。よって、SR1の埋没年代は、13世紀以降と推定される。

(6) 遺構外出土遺物

基本層1層から出土した土製品を掲載した(第25図3)。るつぼ又はとりべの口縁部片と考えられる。本資料は、口唇部および外面が白色に変色しており、白サビとすれば鉛用のるつぼである可能性が考えられる。

III. 11 トレーニング

河川跡1条を確認した。

(1) 河川跡

S R 2 河川跡

調査区北側に位置する。重複関係はない。東西方向の河川跡である。確認面は、I層直下のV a層上面である。河川の幅は、5.30m以上である。遺物は出土していない。

IV.まとめ

竪穴住居跡4軒、溝跡19条、土坑9基、ピット22基、性格不明遺構2基、河川跡2条を確認した。遺物は、非クロコ土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦が出土した。

特に竪穴住居跡4軒を確認したことは、当該地域における古墳時代から古代に至る集落変遷や遺跡の性格を考える上で、重要な成果である。重複関係があるSI2～4竪穴住居跡の中で最も古いSI4竪穴住居跡の年代は、7世紀末～8世紀前葉と考えられる。SI3竪穴住居跡、SI2竪穴住居跡の順に新しくなるが、SI3竪穴住居跡については、SI4竪穴住居跡と同様、住居の方向が真北基準であることから、SI4竪穴住居跡により近い年代である可能性が高い。

今回の調査で出土した遺物全体の中でも、本発掘調査区 SD2 溝跡から一括出土した遺物群を含め、7世紀末～8世紀前葉の遺物が多数を占めている。この時期が本遺跡の主体をなすものと考えられる。住居跡の年代については、7世紀末から8世紀代に収まるものと考えられる。

今回の調査では、7世紀前半から9～10世紀、中近世までの遺物が出土した。居住域としての利用の開始および終了の時期については、不明である。7世紀前半については、須恵器が1点出土したのみで、9～10世紀については、溝跡が確認されたのみである。本遺跡一帯において、居住に適した範囲は、VI層を基盤とする微高地上にはば限定される。下飯田薬師堂古墳の北東に隣接する、南北90m、東西70m程の範囲である。今回の調査面積は、この範囲内ではわずかであり、居住時期の問題については、なお今後の検討を要する。

最後に、本遺跡の性格についてまとめる。まず、7世紀～8世紀前葉における須恵器の存在や刀子とみられる鉄製品の出土は、これらの遺物が出土しない他集落に対して、性格の違いを反映している可能性がある。SI4 垂穴住居跡における、住居壁面を振り込むカマドの構築法や白色粘土の利用については、関東地方に由来するとの見解がある（村田 2000）。SI3 垂穴住居跡の堆積土からは、いわゆる関東系土師器が出土しており、この遺跡の性格については、郡山官衙の設置に代表される、仙台平野における律令制支配の波及との関係性において、評価していく必要がある。また、出土量は少量ながら、8世紀前葉以降と考えられる玉縁付丸瓦他の存在についても、遺跡の性格との関係性が考えられる。この点について、近接する下飯田遺跡では、軒丸瓦（瓦当文様不明）の他、丸瓦、平瓦（いずれも破片。報告書では7世紀代とされる）が一定量出土しており、下飯田地区内における瓦葺建物の存在や、瓦の運搬・流通と関わる可能性が指摘されている（仙台市教育委員会他 1995）。

SD14 溝跡から出土した9世紀代とみられる東海産灰釉陶器の小瓶については、仙台市内で同器種の出土は初めてである。宮城県内における灰釉陶器小瓶の出土例としては、多賀城廢寺僧房跡出土の資料がある（宮城県教育委員会他 1970）。東北地方における灰釉陶器の出土例は、官衙およびその周辺城、寺院跡からのものが大多数を占めるが、碗、皿を中心に、集落からの出土も報告されている（柳澤 1994）。仙台市内で、9世紀代の灰釉陶器が出土した調査例としては、中田南遺跡第1次調査や南小泉遺跡第22次調査を挙げることができる（仙台市教育委員会 1994、同 1994）。両遺跡の性格としては、共に多賀城IV期の軒丸瓦が出土しており、中田南遺跡では鍛冶遺構の他、円面鏡、馬具、石帯なども出土していることから、一般的な集落とは異なる様相を示している。本遺跡から灰釉陶器が出土した意味や遺跡の評価については、本遺跡を含む地域一帯における類例および共伴遺構の増加を待って検討する必要がある。

第6章 総括

今回の調査において、屋敷東遺跡では、古墳2基、溝跡9条、土坑11基、ビット10基を確認した。また、遺物として、埴輪、非クロコ土師器、ロクロ土師器、須恵器、動物遺存体（馬の歯か）が出土した。遺構の年代は、古墳が5世紀後半を中心とし、溝跡の一部は9～10世紀とみられる。一方、下飯田東遺跡では、垂穴住居跡4軒、溝跡19条、土坑9基、ビット22基、性格不明遺構2基、河川跡2条を確認した。遺物は、非クロコ土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦が出土した。主な遺構の年代は、垂穴住居跡の一部が7世紀末から8世紀前葉で、同年代に埋没したとみられる溝跡も確認した。また、9世紀代とみられる溝跡も確認した。

以下では、今回の発掘調査成果の総括として、まず、当該地における遺跡立地の地形的基盤となっている浜堤の分布範囲についてまとめる。次に、周辺遺跡における調査成果を含めた遺構の時期的変遷について述べる。なお、遺物の記述については、特徴的な遺物のみ取り上げ、遺構変遷の記述と並行して行う。

第1節 第I浜堤列の検出範囲について

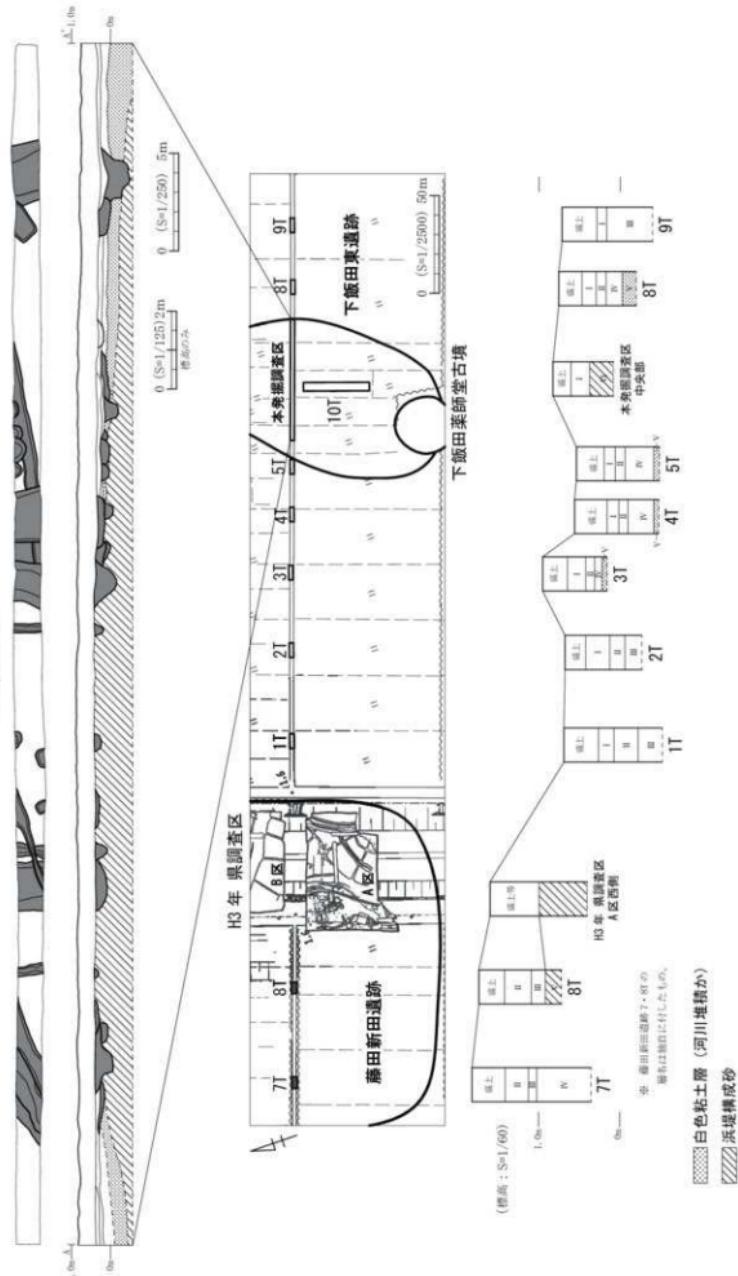
今回実施した発掘調査（本発掘調査、確認調査、試掘調査、深さ確認調査）において、浜堤構成砂を確認した調査地点を第27図に星印で示した。星印の数値は、調査において確認した浜堤構成砂上面の標高値である。以下、浜堤列の検出範囲および地形に関する記述は、関連遺跡を東西方向に横断する3つのライン毎に行う。北から、藤田新田遺跡中部（H26-45の1～4T）～屋敷東遺跡（1～5T）のA-A'ライン、藤田新田遺跡南部（H26-45の7・



* 藤田新田遺跡（隣接地含む）の調査：H26-45、下飯田遺跡の調査：H26-53。
丁はトレンチ。明朝体の数字は深さ確認調査区のNo. B-B'は第28図に対応。

第27図 浜堤構成砂確認箇所の位置と標高

本発掘調査区



第28図 下斎田東遺跡および周辺における浜堤構成砂の範囲

*断面柱状図の範囲は、第27図のB-B'に対応

8T) ~ 下飯田東遺跡(1 ~ 11T、本発掘調査区)のB-B'ライン、そして下飯田遺跡(H26-53の1 ~ 4T、H27-39の1 ~ 4T)のC-C'ラインの3つである。

初めに、藤田新田遺跡中部~屋敷東遺跡ライン(A-A')について述べる。この範囲における浜堤列の幅は、発掘調査で確認できた範囲では約540mであるが、屋敷東遺跡の東側隣接地で流水取り工事の立会い時に確認した、浜堤構成砂の拡がりを含めると、約600mとなる。浜堤列の東端は、屋敷東遺跡の東側隣接地にあったものと推定される。また、浜堤構成砂を確認した最も西端の調査区は、藤田新田遺跡隣接地で実施したH26-45の2Tである。この2Tと3Tでは、遺跡範囲における浜堤構成砂の拡がりを確認したが、遺構等は確認していない。2Tの西側に位置する1Tでは、浜堤構成砂ではなく、泥炭質粘土を主体とする自然堆積層を確認した。これは湿地性堆積土もしくは河川内堆積土である可能性が考えられる。

藤田新田遺跡中部~屋敷東遺跡ライン(A-A')における浜堤構成砂上面の標高は、現状で0.75 ~ 1.30mの範囲に収まる。両遺跡とも、平均的には1.0m前後の比較的近い値を示している。発掘調査後に実施した流水取り工事の立会い時に、屋敷東遺跡と藤田新田遺跡の中間部分において、浜堤構成砂の分布を確認しており、本来的には、互いに近い標高で、地形的な連続性をもっていたものと推定される。昭和20年の米軍による航空写真から判定される浜堤構成砂の拡がりも、この可能性を示唆している。

次に、藤田新田遺跡南部~下飯田東遺跡ライン(B-B')について述べる。この範囲で確認できた浜堤列の幅は、約350mである(第27図)。ここでの浜堤列の東端は、下飯田東遺跡における遺跡範囲の東端と重複する。下飯田東遺跡における本発掘調査区の東側では、浜堤構成砂(VI層)の東側への傾斜を確認しており、この箇所が、第Ⅰ浜堤と堤間湿地(第Ⅰ浜堤列と第Ⅱ浜堤列の間の湿地)との境界と考えられる。また、浜堤構成砂を確認した最も西端の調査区は、H26-45の8Tである。より西側の7Tでは、浜堤構成砂ではなく、一部に植物遺体を含む水性堆積土を確認した。

藤田新田遺跡と下飯田東遺跡の間に位置するH26-18の1 ~ 5Tにおいても、浜堤構成砂は確認していない。これは、第Ⅰ浜堤内における凹地の存在を示すか、あるいは河川等の影響による可能性が考えられる。現状では、後者である可能性が高い。藤田新田遺跡における平成3年度調査では、北西から南東方向に延びる河川跡(SD302河川跡:幅25m以上、深さ2.5m以上)を確認しており、1Tはこの範囲に入る可能性が高い。また、藤田新田遺跡の南端部では、東西方向の河川跡(SD115河川跡)も確認されている。下飯田東遺跡の10 ~ 11Tにおいても、それぞれ東西方向の河川跡を確認している。このように、約180mの隔たりをもつ両遺跡の間には、数条の河川跡の存在が推定される。

よって現状では、下飯田東遺跡が位置する、浜堤構成砂から成る微高地は、地形的に孤立していた可能性が考えられる。今回の調査で確認された浜堤構成砂の分布は、北東から南西方向に長軸をもつ梢円形に拡がる。その範囲は、およそ長軸100m、短軸70mと推定され、遺跡範囲は、これをやや大きく開むような形で設定した。

藤田新田遺跡南部~下飯田東遺跡ライン(B-B')における浜堤構成砂上面の標高は、藤田新田遺跡の8Tが1.05mであるのに対し、下飯田東遺跡では-0.05 ~ 0.40mと低い。これは、一帯が削平されていることもあるが、下飯田東遺跡が、第Ⅰ浜堤列から堤間湿地への地形的変換点にあたるために、浜堤列の中心部に比べて標高が低いものと推定される。下飯田東遺跡における浜堤構成砂上面の標高は、10T付近が0.40mと最も高く、そこでは、4軒の住居跡を確認している。

最後に、下飯田遺跡ライン(C-C')について述べる。調査により確認できた浜堤列の幅は、ほぼ遺跡範囲の東西幅と同じ、約270mである。浜堤構成砂は、遺跡内におけるH26-53の1 ~ 4T、遺跡南西の隣接地におけるH27-39の1 ~ 3T、深さ確認調査区No.22・24の、計9箇所で確認した。

浜堤構成砂上面の標高は、平成3・4年の本発掘調査区に近いH26-53の4Tが2.00mと最も高く、その西側の1 ~ 3Tでは0.9m前後である。これは、平均的には藤田新田遺跡と屋敷東遺跡に近い値である。一方、遺跡の東端における2箇所の深さ確認調査区では、0.28m、0.17mと低い。これについては、現代水田による削平もあり、本来的な地形を反映したものか不明である。

以上、今回の調査で確認した浜堤構成砂の範囲および地形について記述した。調査対象地一帯は、現代の圃場整備等による削平を受け、本来的な地形・景観の復元は困難な状況にある。しかし、4遺跡、1古墳を含む範囲において今回実施した発掘調査成果により、浜堤構成砂の分布を手がかりに、おおよその地形的な特徴を把握すること

ができた。今後、この地域において浜堤列、湿地、河川から成る本来の景観を復元することは、時代毎の土地利用の変化や集落構造の変遷、または、そこで行われた人々の活動内容を理解する上で、重要な意味をもつと考えられる。

第2節 遺構の変遷について

今回調査した屋敷東遺跡、下飯田東遺跡に、近接する藤田新田遺跡、下飯田遺跡も含めて、この地域における住居跡を中心とする遺構の時期的な変遷についてまとめる。古墳時代から平安時代までを対象とする。なお、以下の藤田新田遺跡、下飯田遺跡に関する記述は、平成3・4年に実施された仙台東部道路建設に伴う本発掘調査の成果（宮城県教育委員会・日本道路公团 1994、仙台市教育委員会 1995）に基づくものである。

I. 古墳時代前期（4世紀）

この地域で、最初に明確な集落跡が確認されるのは当該期においてである。藤田新田遺跡から、竪穴住居跡5軒、方形周溝墓2基のほか、土坑、溝跡等の遺構が確認されている。特に、居住域とその南西に位置する墓域の両者が存在しており、注目される。

藤田新田遺跡の住居跡は、SD302河川跡の西側で4軒、東側で1軒が発見されており、密度が低く全体に分散した分布を示している。住居跡の方向は、河川跡の方向とほぼ一致しており、自然地形を意識して配置されたものと考えられる。住居跡の規模には、1辺約5.5mのものと、1辺2.8mのものの2種類が存在する。また、集落の中心とみられる河川跡西側の対岸である東側においても1軒の住居跡と土坑1基が発見されたことは、河川をまたぐ集落の拡張があったことを示している。しかし、この河川跡の東側にあたる藤田新田遺跡と屋敷東遺跡の中間地帯については、元々地形的に連続していた可能性はあるものの、既に著しい削平を受けているため、今後、この箇所から新たな遺構等が発見される可能性は低いであろう。当該期における集落東側の拡張につれては、屋敷東遺跡では明確な遺構がなく、屋敷東遺跡の西側隣接地においても、全く遺物の散布が見られなかったことから、集落範囲は限局的なものであったと考えられる。

下飯田遺跡においても、河川跡、溝跡から当該期の土器が出土している。しかし、藤田新田遺跡に比べ遺物の出土量が少なく、遺構も確認されていない。

当該期における集落の中心は、藤田新田遺跡にあったものと考えられる。

II. 古墳時代中期（5世紀）

今回の調査では、屋敷東遺跡で古墳2基を発見した。うち1基は円墳である可能性が高い。年代は、円筒埴輪の特徴から5世紀後半を中心とするものと推定される。なお、屋敷東遺跡では、古墳のみ発見されており、住居跡は発見されていない。

藤田新田遺跡では、前期から引き続き集落が継続したものと考えられる。SD302河川跡の西側から竪穴住居跡12軒の他、土坑などが発見されている。屋敷東遺跡に成立する古墳との関連が想定される。両遺跡間の距離は約200mである。集落と墓域の位置的関係については、前期とは異なり、間に河川を挟む隔絶した様相が観察される。藤田新田遺跡における住居跡の分布については、3箇所の平面的なまとまりが指摘されている。また、河川跡の西側斜面から出土した多量の土器や木製品等の遺物についても、この3箇所に対応する分布上のまとまりが指摘されている。住居跡と河川跡の方向の一一致は、より河川跡に近い住居跡において顕著である。住居跡の規模には、1辺5～6mとのものと、約4mのものの2種類が存在する。

藤田新田遺跡は、当該期の遺構、遺物が最も多く、この地域で調査された範囲では、拠点的な集落であったと考えられる。なお、報告書においては、当該期の住居跡を、出土土器の相違に基づき中期前半（5世紀前半）と中期後半（5世紀後半）の2群に分けており、分布上の違いも指摘されている。年代的に、屋敷東遺跡における古墳と対応するのは、中期後半の集落と考えられる。

下飯田遺跡においても、河川跡から当該期の土器が出土している。しかし、遺物量は極めて少なく、共伴する明確な遺構も確認されていない。

よって、当該期における集落の中心は、前期から引き続き、藤田新田遺跡にあったものと推定される。また、墓

域は、当該期の後半には、河川の東側、屋敷東遺跡に形成されている。なお、屋敷東遺跡の南、約250mに位置する下飯田薬師堂古墳については、未調査であり、同時期であるかは不明である。

III. 古墳時代後期～奈良時代（6～8世紀）

今回の調査では、6世紀代の遺構、遺物は発見されていない。7世紀以降では、下飯田東遺跡のSD6溝跡から7世紀前半とみられる須恵器壺（瓶か）が出土している。しかし、SD6溝跡は灰白色火山灰の降灰より新しい遺構であり、今回の調査でこの須恵器の年代における遺構は発見していない。続く年代の遺構として、下飯田東遺跡から7世紀末から8世紀前葉と考えられる竪穴住居跡1軒（SI4）、溝跡1条（SD2）を発見した。下飯田東遺跡では、他に3軒の竪穴住居跡が発見されており、これらの年代は、おむね7世紀末から8世紀代と考えられる。居住範囲は、浜堤構成砂を基盤とする微高地上に限定されていたとみられる。この下飯田東遺跡における集落は、藤田新田遺跡、下飯田遺跡に比べて、地形的制約がかかるに大きい限られた範囲に成立するところに特徴がある。住居の方向については、SI3・4については、ほぼ真北方向を基準とする。規模は、全体的に不明だが、少なくともSI4については1辺5m以上である。

藤田新田遺跡では、6世紀代の遺物が僅かに出土している。しかし、共伴する確実な遺構は発見されていない。7世紀代の遺構としては、SD302河川跡の西側から竪穴住居跡3軒が発見されている。河川跡に沿って、分散して分布する。住居跡の方向は、河川跡と一致していることから、自然地形を意識して配置されたものと考えられる。規模は、1辺5m前後である。

下飯田遺跡からも6世紀代の遺物が僅かに出土しているが、共伴する確実な遺構は発見されていない。下飯田遺跡の主体をなす21軒の竪穴住居跡の年代は、7世紀後半とされている。なお、近年、その一部の住居跡については、7世紀末～8世紀初頭とする位置づけがなされている（村田2007）。住居跡の分布は、調査区の北端および南端をそれぞれ東西方向に流れる河川跡に挟まれた、南北80m、東西50m程の範囲に集中する。この範囲から、全体の9割にあたる19軒が発見されている。残り2軒の住居跡は、北側の河川を挟む、その北岸近くに分布する。住居跡の方向は、カマドの方向では、北向きが7軒と最も多く、西向き4軒、東向き1軒となっている。なお、この内、比較的の真北に近い基準を有する住居跡は、3軒（SI14～16）あり、いずれも居住域の北側に分布する。

下飯田遺跡における最大長を基にした住居跡の規模には、3つのグループが認められる。それぞれの数値のビーグルは、7.0～75m（大型）、5.0～6.0m（中型）、3.5～4m（小型）である。各グループの軒数は、大型5軒、中型8軒、小型5軒で、残りの3軒は規模が不明のものである。藤田新田遺跡における3軒の住居跡は、ともに中型に含まれる。下飯田遺跡の住居跡は、藤田新田遺跡に比べ、その規模が分化している点に特徴がある。なお、先述した7世紀末～8世紀初頭に位置付けられたのは、2軒とも大型に属する住居跡である。

また、下飯田遺跡では、河川跡からヤマトシジミを主体とする貝層が、7世紀後半の土器と共に確認されている。魚網の錘と考えられる土錘も出土しており、共に、海や河川に近い立地にある当該地域での生業活動を示す遺物である。

この地域における6世紀代の集落については、河川等の出土遺物から、存在した可能性を指摘するにとどめる。7世紀代の集落は、藤田新田遺跡と下飯田遺跡で確認されている。この時期における集落の中心は、少なくとも7世紀後半頃には下飯田遺跡にあったものと考えられる。なお、下飯田遺跡では8世紀初頭まで当該期の集落が継続した可能性があり、今回、下飯田東遺跡で確認した住居跡や溝跡も、ほぼ同時期の遺構である。

この地域における集落分布の中心は、遅くとも7世紀後半には、古墳時代前・中期の藤田新田遺跡から、下飯田遺跡を主体とした、より南側へ移動したものと考えられる。下飯田東遺跡においても、その動きと連動するように、7世紀代には、居住あるいは何らかの活動が行われた可能性がある。また、下飯田東遺跡における居住は、8世紀代にも継続した可能性がある。下飯田遺跡では、およそ8世紀初頭までの集落が確認されているものの、これ以降の8世紀代における遺構の存在については不明である。これまで藤田新田遺跡では、8世紀代の遺構、遺物は報告されていない。

IV. 平安時代（9～10世紀）

今回の調査では、当該期の住居跡は発見されていない。屋敷東遺跡および下飯田東遺跡で、それぞれ9～10世

紀代の溝跡を発見した。溝跡は、いずれも堆積土中に灰白色火山灰を含んでおり、特に下飯田東遺跡のSD14では、その直下から9世紀代の東海産灰釉陶器小瓶が出土した。他の遺物では、屋敷東遺跡の溝跡（SD2・9）、古墳周溝（1号墳）、下飯田東遺跡の溝跡（SD14）において、灰白色火山灰層より上位からロクロ使用の土器器坏が出土している。下飯田東遺跡のSD14から出土した土器器の体部には墨書きが認められた。

当該期の内、特に10世紀を主体とする遺構、遺物がまとまって発見されたのは、藤田新田遺跡である。掘立柱建物跡4棟、土坑の他、遺跡の南端部では水田跡が発見されている。掘立柱建物跡4棟のうち2棟は、比較的規模が大きく廂を持つ建物跡である。これらの方向は、1棟を除き、ほぼ真北を向いている。分布は、SD302河川跡の西側である。平安時代における建物跡の分布は、古墳時代を通して集落が形成された中心的な範囲とほぼ重複しており、この浜堤内における河川脇の微高地が、長期にわたり居住に適した場所であったことを示している。

また、水田跡の他に、藤田新田遺跡における生業活動を示すものとして、河川跡の灰白色火山灰層を挟んだ上下の層から出土した、ニホンジカ、ウシ、ウマを含む動物遺存体がある。

引用・参考文献

- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第1分冊 発表要旨 猿投窯・湖西窯編年の再構築』（東海上器研究会） pp.9~41
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪論述」『考古学雑誌』第64巻第2号 pp.1-70 日本考古学会
- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東3施釉陶器－』（古代の土器研究会第3回シンポジウム） pp.109~120
- 齊藤孝正 1995 「猿投・美濃・美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」齊藤孝正・後藤健一編『須恵器集成図録 第3巻東日本編I』（雄山閣出版） p.86
- 斎野裕彦 2012 「仙台平野中北部における弥生時代・平安時代の津波痕跡と集落動態」『平成19年度～平成23年度文部科学省私立大学学術高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態の総合研究 研究成果報告書I』 pp.225-257
- 佐藤敏幸 2006 「東北地方における7世紀から8世紀前半の土器研究史－関東系土師器研究の現状と新たな研究視点の模索－」pp.123-144 宮城県考古学会
- 仙台市教育委員会 1987 『大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集
- 仙台市教育委員会他 1995 『下飯田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第191集
- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他－仙台市荒井東地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第213集
- 仙台市教育委員会 2000 『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集
- 仙台市教育委員会 2002 『中在家南遺跡（第3・4次）押口遺跡（第3次）発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第255集
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編（1）－』仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2010 『沼向遺跡－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書III－ 第9分冊 沼向遺跡環境復元検討会 自然科学分析 総括』仙台市文化財発掘調査報告書第360集
- 仙台市教育委員会 2010 『杏形遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書 III』仙台市文化財発掘調査報告書第363集
- 仙台市教育委員会 2012 『杏形遺跡第2・3次調査－仙台市荒井東地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』仙台市文化財発掘調査報告書第397集
- 仙台市教育委員会 2014 『荒井南遺跡第1次調査－仙台市荒井南地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』仙台市文化財発掘調査報告書第425集
- 長谷川厚 1992 「古墳時代後期土器の研究（4）－古墳時代後期土器からみた広域間の交流について－」『神奈川考古』第28号 pp.79-100 神奈川考古同人会
- 長谷川厚 1993 「関東から東北へ－律令制成立後の関東地方と東北地方の関係について－」『二十世紀への考古

- 学 櫻井清彦先生古稀記念論文集』pp.145-157 雄山閣
- 藤沢敦 1996 「仙台平野における古墳の変遷・その断絶と画期をめぐって・」『考古学と遺跡の保護 甘粕健先生追官記念論集』 pp.237-254 甘粕健先生追官記念論集刊行会
- 松本秀明 1984 「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57巻 pp.370-738
- 松本秀明・吉田真幸 2010 「第3節 仙台市東部杏形遺跡にみられる津波堆積物の分布と年代」『杏形遺跡－仙台市』
- 高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』仙台市文化財調査報告書第363集 pp.4-12
- 宮城県教育委員会・多賀城町 1970 「多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－」吉川弘文館
- 宮城県教育委員会・日本道路公団 1994 「藤田新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第163集
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－」『宮城考古学』第2号 pp.45-80 宮城県考古学会
- 村田晃一 2002 「7世紀集落研究の一覧点(1)」『宮城考古学』第4号 pp.49-72
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」辻秀人編『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部 pp.119-163
- 柳澤和明 1994 「1 東北地方の施釉陶器－陸奥を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』(古代の土器研究会第3回シンポジウム) pp.7～18
- 結城慎一・藤沢敦 1987 「大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第108集



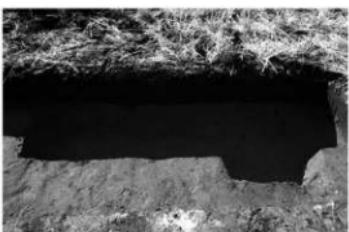
1. 1 レンチ全景（南東から）



2. 2 レンチ西壁断面（東から）



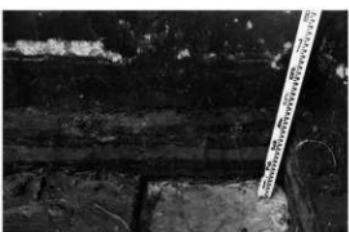
3. 3 レンチ南壁断面（北から）



4. 4 レンチ南壁断面（北から）



5. 7 レンチ全景（南東から）



6. 7 レンチ北壁断面（南から）



7. 13 レンチ全景（南東から）



8. 13 レンチ溝跡断面（北から）

写真図版 1 六郷1ブロックの調査 (1～3：藤田新田遺跡隣接地、4～6：同遺跡、7・8：下飯田遺跡)



1. 1 トレンチ全景（南東から）



2. 2 トレンチ全景（南東から）



3. 3 トレンチ全景（南東から）



4. 3 トレンチ北壁断面（南から）



5. 4 トレンチ全景（南東から）



6. 4 トレンチ北壁断面（南から）

写真図版2 六郷3-1 ブロックの調査 (H26 年度調査) (1 ~ 6 : 下飯田遺跡)



1. 1 トレンチ北壁断面（南から）



2. 2 トレンチ北壁断面（南から）



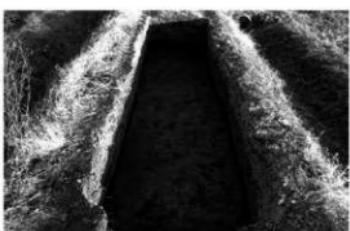
3. 3 トレンチ北壁断面（南から）



4. 4 トレンチ北壁断面（南から）



5. 1 トレンチ北壁断面（南から）



6. 2 トレンチ全景（東から）



7. 3 トレンチ全景（東から）

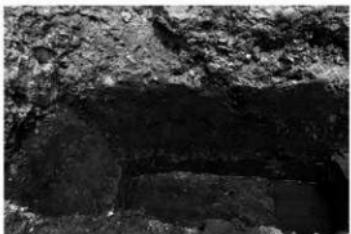


8. 3 トレンチ北壁断面（南から）

写真図版3 六郷3-1・3-2ブロックの調査（H27年度調査）（1～4：下飯田遺跡隣接地、5～8：築道遺跡）



1. 1 ブロック全景 (西から)



2. 1 ブロック北壁断面 (南から)



3. 2 ブロック全景 (西から)



4. 2 ブロック北壁断面 (南から)



5. 3 ブロック全景 (西から)



6. 7 ブロック北壁断面 (南から)



7. 4 ブロック全景 (西から)



8. 4 ブロック北壁断面 (南から)

写真図版4 六郷2ブロックの調査 (1) (1～8：藤田新田・下飯田東遺跡隣接地)

六郷2ブロックの調査 (2)



1. 5 ブロック全景 (西から)



2. 2 ブロック西壁断面 (東から)



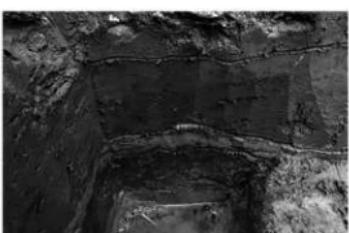
3. 8 ブロック全景 (西から)



4. 8 ブロック北壁断面 (南から)



5. 9 ブロック全景 (西から)



6. 9 ブロック 北壁断面 (南から)



7. 1 ブロック 全景 (東から)



8. 1 ブロック 北壁断面 (南から)

写真図版5 六郷2ブロックの調査 (2) (1～6: 藤田新田・下飯田東遺跡隣接地、7・8: 下飯田遺跡隣接地)



1.No.1 北壁断面



2.No.3 北壁断面



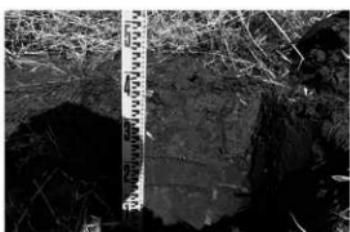
3.No.5 北壁断面



4.No.9 北壁断面



5.No.10 北壁断面



6.No.11 北壁断面



7.No.12 北壁断面

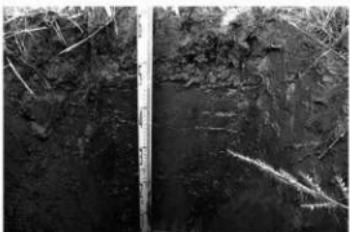


8. No.14 北壁断面

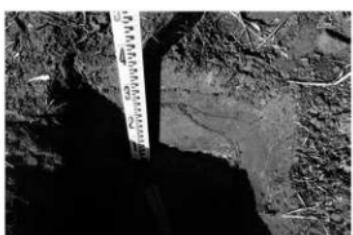
写真図版6 六郷2ブロックにおける深さ確認調査 (1)



1. No.15 北壁断面



2. No.16 北壁断面



3. No.17 北壁断面



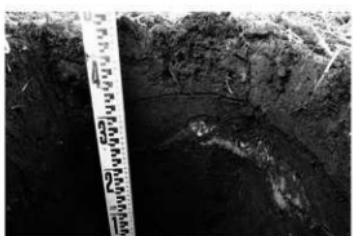
4. No.19 北壁断面



5. No.22 北壁断面



6. No.24 北壁断面



7. No.26 北壁断面



8. No.27 北壁断面



1. 全景（南西から）



2. 全景（南東から）



3. 北壁断面西側（南から）



4. 北壁断面中央部（南東から）



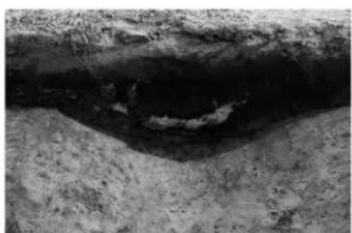
5. 北壁断面東側（南西から）



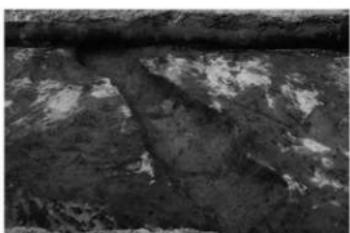
1. SD1 溝跡完掘 (南から)



2. SD2 溝跡完掘 (南から)



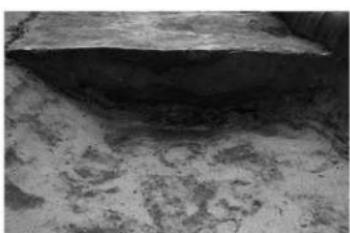
3. SD2 溝跡断面 (北から)



4. SD3 溝跡完掘 (南から)



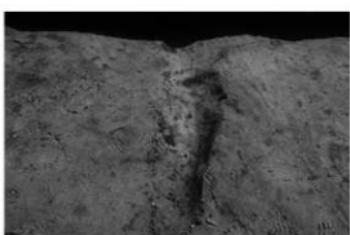
5. SD4 溝跡完掘 (西から)



6. SD4 溝跡断面



7. SD4 溝跡底面掘削痕 (南から)



8. SD5 溝跡完掘 (北から)

写真図版 9 屋敷東遺跡第1次調査 1 トレンチ本調査区 (2)



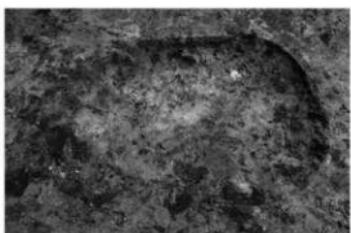
1. SK1・2 土坑完掘（北から）



2. SK1 土坑完掘（北から）



3. SK2 土坑完掘（北から）



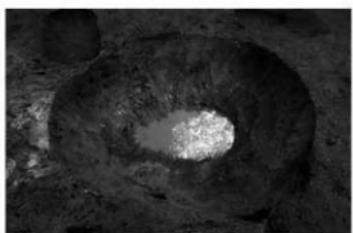
4. SK3 土坑完掘（北から）



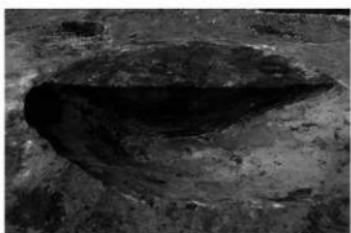
5. SK3 土坑断面（北から）



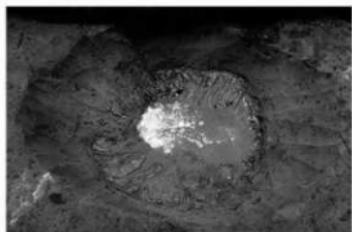
6. SK4 土坑断面（北から）



7. SK5 土坑完掘（南から）



8. SK5 土坑断面（南から）



1. SK6 土坑完掘（北から）



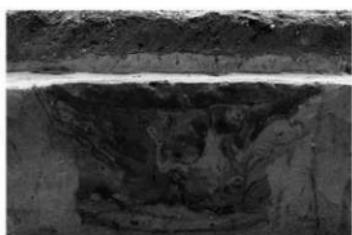
2. SK6 土坑断面（北から）



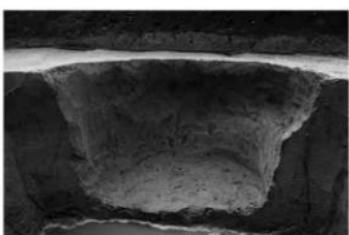
3. SK7 土坑断面（南から）



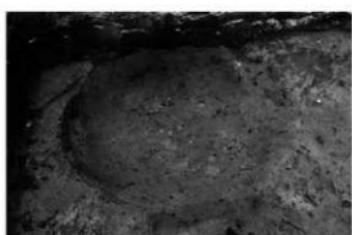
4. SK8 土坑断面（南から）



5. SK8 土坑断ち割り断面



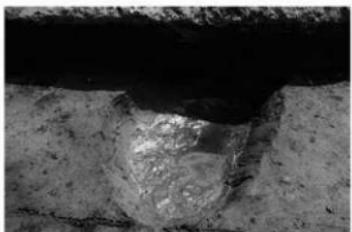
6. SK8 土坑完掘（南から）



7. SK9 土坑完掘（東から）



8. SK9 土坑断面（東から）



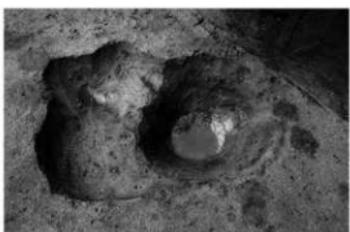
1. SK10 土坑完掘 (北から)



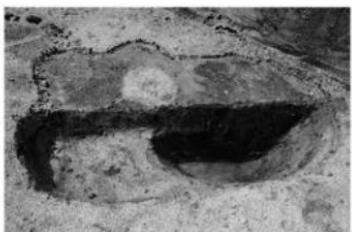
2. 土坑群完掘 (西から)



3. P1 断面 (東から)



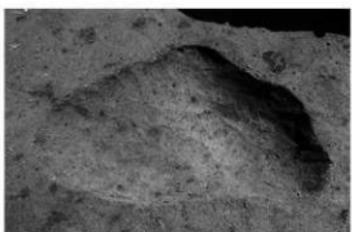
4. P2 完掘 (南西から)



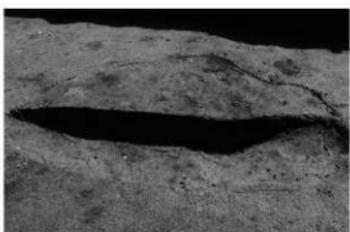
5. P2 断面 (南西から)



6. P3 断面 (北から)



7. P4 完掘 (北から)



8. P4 断面 (北から)



1. 2トレンチ全景（北東から）



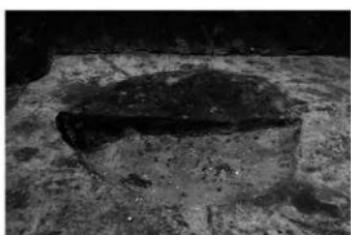
2. 2トレンチ東壁断面（南西から）



3. 2トレンチ SD6・7 溝跡確認（西から）



4. SD7 溝跡断面（西から）



5. SK11 土坑断面（東から）



6. 3トレンチ全景（南から）



7. 3トレンチ東壁断面（北西から）



8. 3トレンチ SD2 溝跡断面（南から）

写真図版 13 屋敷東遺跡第1次調査 (6)



1. 4 トレンチ 1 号墳全景（北から）



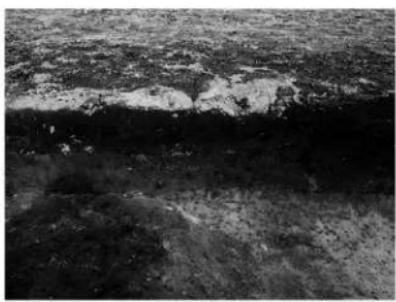
2. 4 トレンチ 1 号墳 墳丘積土断面（南西から）



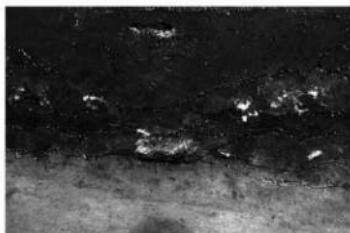
3. 4 トレンチ 1 号墳北側周溝（南東から）



4. 4 トレンチ 1 号墳北側周溝断面（北西から）



5. 4 トレンチ 1 号墳北側周溝断面（西から）



1. 4 トレンチ 1号 塙北側周溝埴輪出土状況(西から)



2. 4 トレンチ 1号 塙南側周溝確認 (西から)



3. 5 トレンチ全景 (北から)



4. 5 トレンチ 2号 塙周溝掘削状況 (南西から)



5. 5 トレンチ SD9 溝跡断面 (北から)



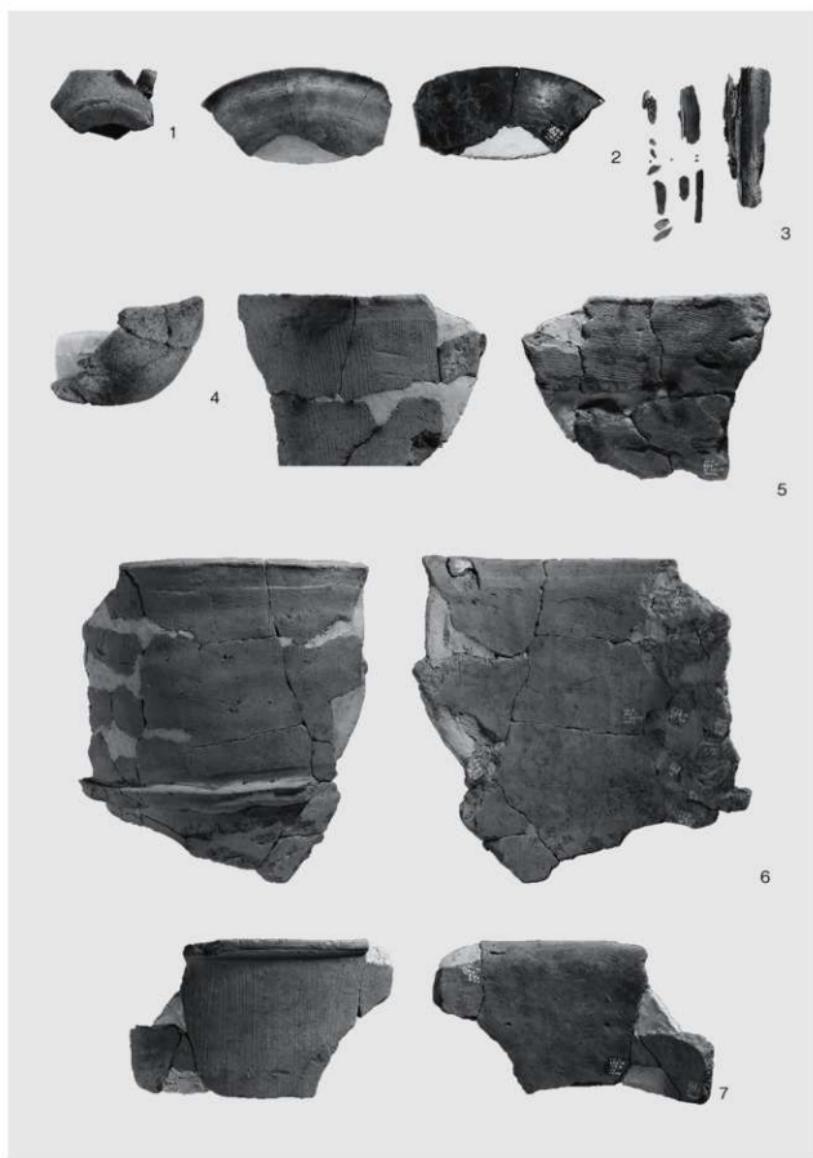
6. 5 トレンチ SD8 溝跡確認 (東から)



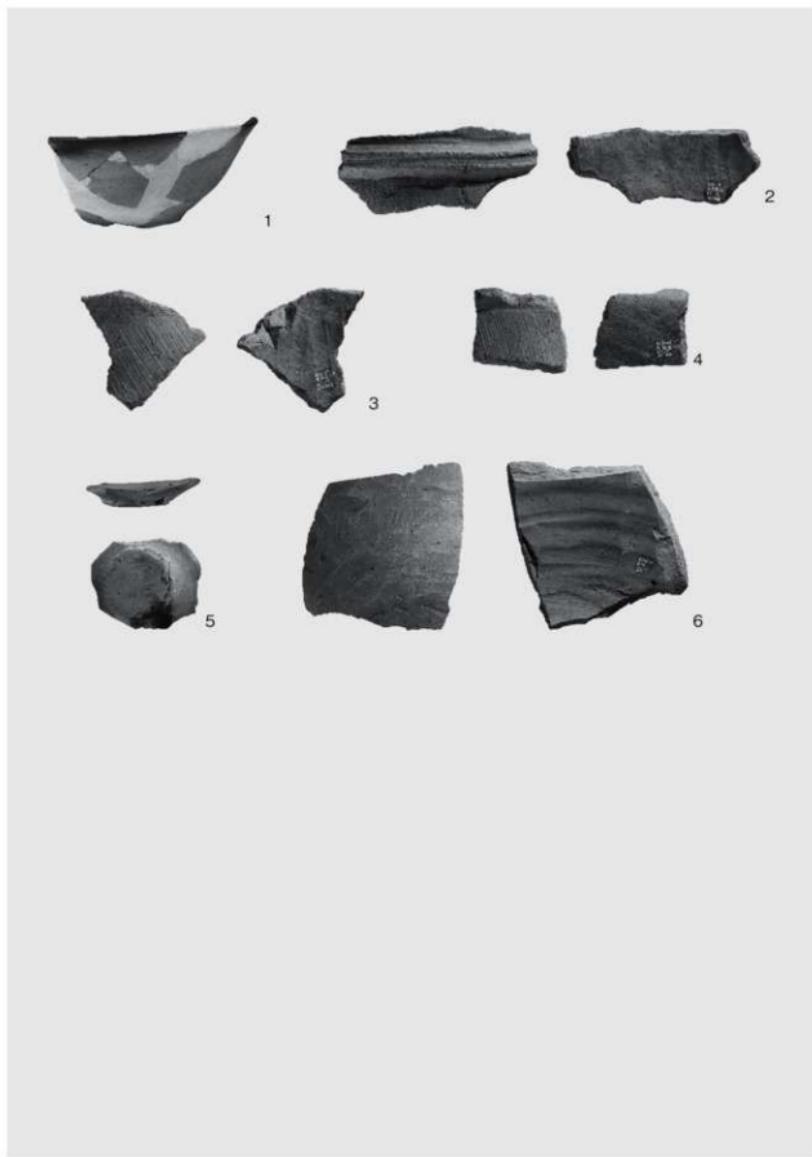
7. 5 トレンチ SD9 溝跡断面 (西から)



8. 4・5 トレンチ近景 (北から)



写真図版 16 屋敷東遺跡第1次調査出土遺物（1） S=1/3



写真図版 17 屋敷東遺跡第1次調査出土遺物（2） S=1/3



1. 全景（東から）



2. 全景（西から）



3. 本調査区と下飯田薬師堂古墳の位置（北東から）



4. 調査区西半（北東から）



5. 調査区東半（北西から）



6. 調査区中央西側遺構完掘（東から）



1. 北壁西侧断面（南から）



2. 北壁中央断面（南西から）



3. 北壁東側断面（南から）



4. 北壁東端断面（南から）



5. SD1 溝跡完掘（北東から）



6. SD1 溝跡断面（南西から）



1. SD2 溝跡完掘（西から）



2. SD2 溝跡断面（南から）



3. SD2 溝跡断面（南西から）



4. SD2 溝跡一括土器出土状況（北西から）



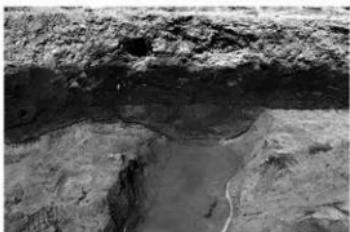
5. SD2 溝跡一括土器出土状況（西から）



6. SD4 溝跡完掘（南から）



1. SD3 溝跡完掘（北から）



2. SD3 溝跡断面（南から）



3. SD6 溝跡完掘（南西から）



4. SD6・7 溝跡断面（南東から）



5. SD6 溝跡底面須恵器(E-1) 出土状況（北東から）



6. SD7 溝跡完掘（南西から）



7. SD7 溝跡断面（南西から）



8. SD7 溝跡断面（南東から）



1. SD8 溝跡完掘 (南から)



2. SD8 溝跡断面 (南から)



3. SD9 溝跡完掘 (北東から)



4. SD9 溝跡断面 (南西から)



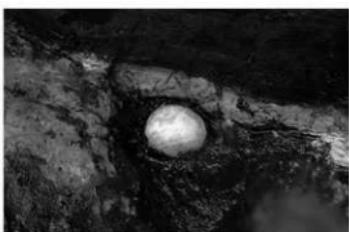
5. SD12・18 溝跡他完掘 (南西から)



6. SD14 溝跡断面 (北西から)



7. SD14 溝跡断面 (南西から)



8. SD14 溝跡灰釉陶器 (I-4) 出土状況 (北から)



1. SD15 溝跡他完掘（北東から）



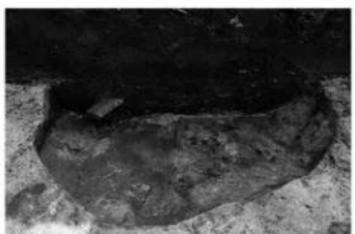
2. SD15 溝跡断面（西から）



3. SD15 溝跡他確認（北東から）



4. SD16 完掘（北東から）



5. SK1 土坑完掘（北から）



6. SK2 土坑完掘（南から）

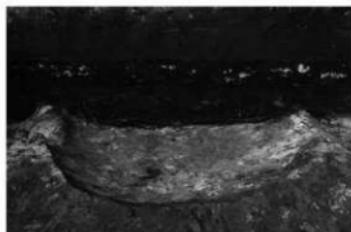


7. SK2 土坑瓦出土状況（南から）

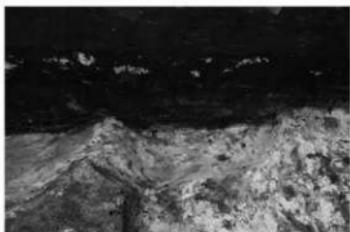


8. SK4 土坑完掘（南から）

写真図版 23 下飯田東遺跡第1次調査(6) 本発掘調査区



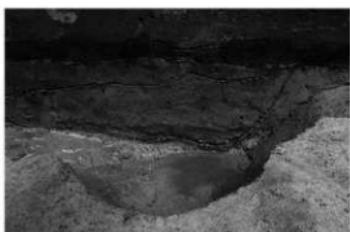
1. SK5 土坑完掘（南から）



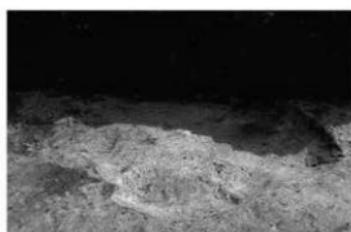
2. SK6 土坑完掘（南から）



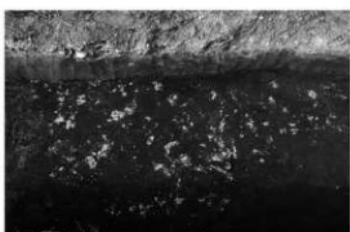
3. SK7 土坑完掘（南から）



4. SK8 土坑完掘（南から）



5. SK9 土坑完掘（北から）



6. IV層上面灰白色火山灰確認状況（南から）



7. 調査区中央耕作痕（西から）



8. 下飯田薬師堂古墳現況（東から）



1. 遺構確認 全景（南から）



2. 遺構確認 全景（北から）



3. 調査区近景（奥は下飯田薬師堂古墳）（北東から）



1. 西壁断面全体（南東から）



2. SI1 壁穴住居跡確認（西から）



3. SI2・3 壁穴住居跡確認（北西から）



4. SI2・3 壁穴住居跡確認（南から）



5. SI2 壁穴住居跡断面（東壁立ち上がり部分）（東から）



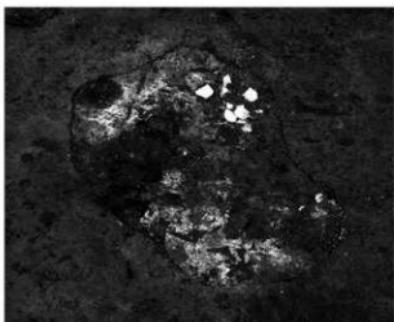
6. SI2 壁穴住居跡断面（南壁立ち上がり部分）（東から）



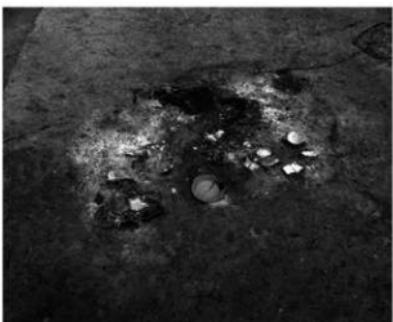
1. SI1・4 竪穴住居跡確認（南西から）



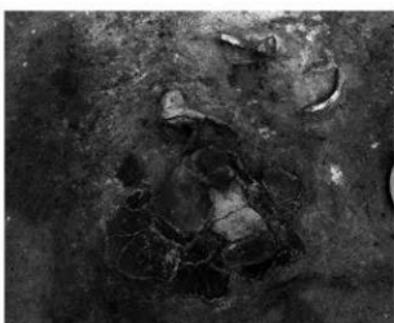
2. SI4 竪穴住居跡確認（北西から）



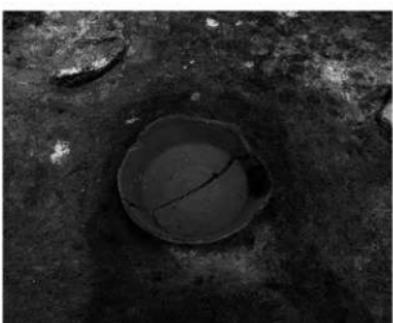
3. SI4 竪穴住居跡カマド確認（西から）



4. SI4 竪穴住居跡カマド遺物出土状況（南から）



5. SI4 竪穴住居跡カマド遺物(C-14)出土状況(上が南)



6. SI4 竪穴住居跡カマド遺物(E-4)出土状況（上が南）



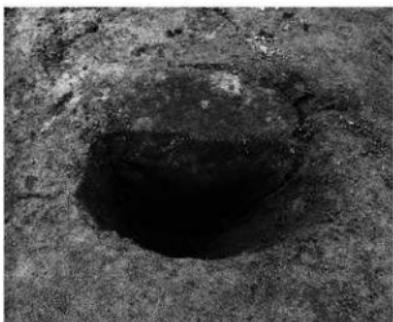
1. SD17 溝跡確認（西から）



2. SD17 溝跡西壁断面（東から）



3. SD19 溝跡断面（西から）



4. P1 断面（北から）



5. P2 断面（北から）



6. P3 断面（東から）



1. SR1 河川跡確認（北から）



2. SR1 河川跡西壁断面（北東から）



3. SR1 河川跡北壁断面（南西から）



4. 遺構確認全景（北から）

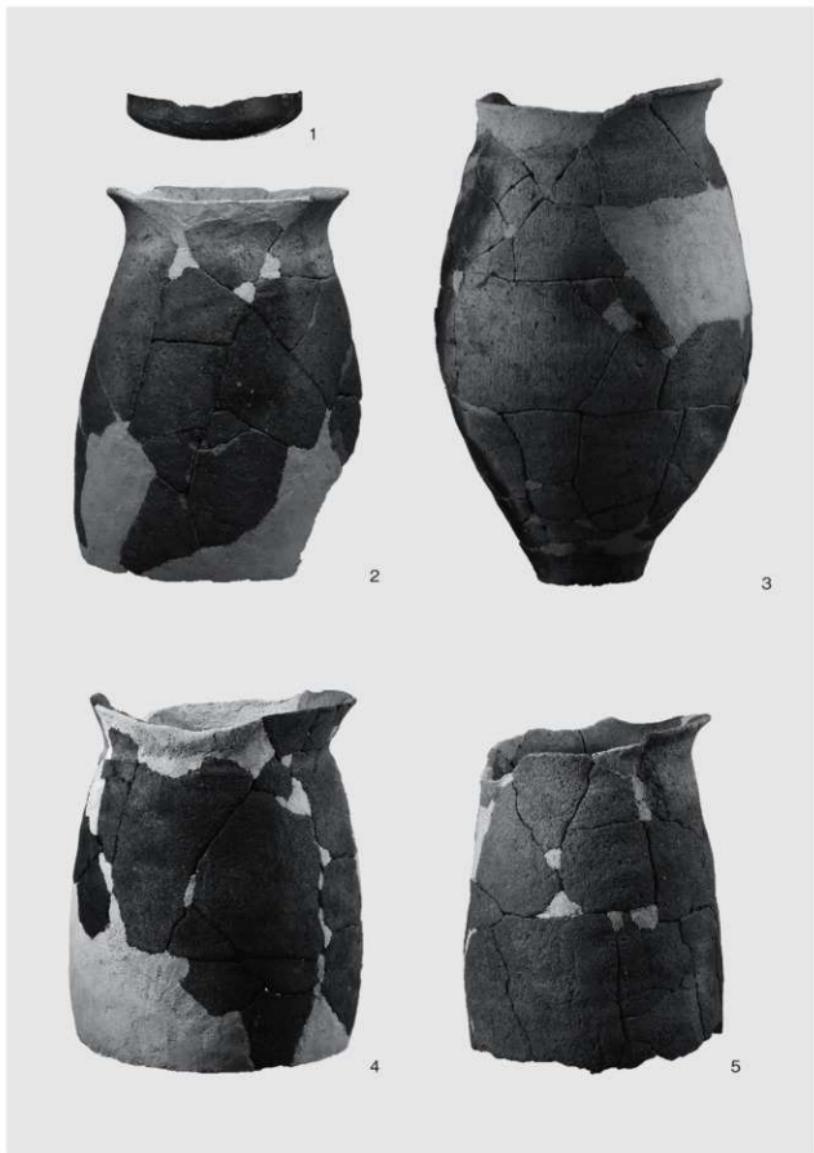


5. 東壁断面深堀部分（南西から）

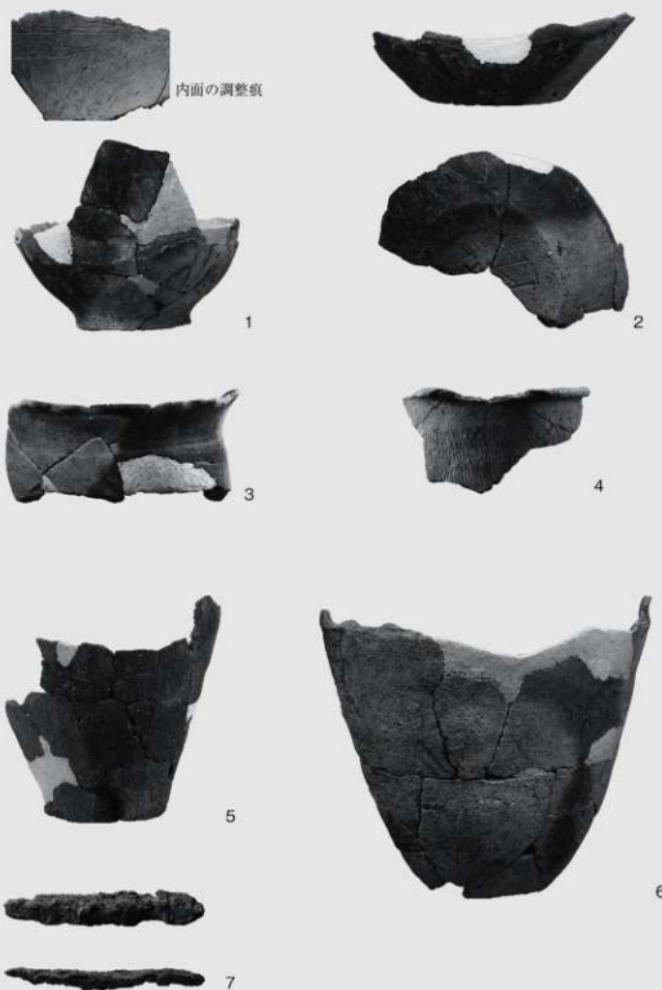


6. 調査区近景（奥は下飯田薬師堂古墳）（北から）

写真図版 29 下飯田東遺跡第1次調査(12) 1～3:10 トレンチ、4～6:11 トレンチ



写真図版 30 下飯田東遺跡第1次調査本調査区出土遺物(1) SD2溝跡一括出土 S=1/3



写真図版 31 下飯田東遺跡第1次調査本調査区出土遺物（2）SD2溝跡一括出土 S=1/3



写真図版 32 下飯田東遺跡第1次調査本調査区出土遺物 (3) S=1/3



写真図版 33 下飯田東遺跡第1次調査本調査区出土遺物（4） S=1/3

報告書抄録

文 書 が な	せんたいひがしきいがいふきゅうかんれんくくせいりじぎょうかんけいせきはくつちょうきょうはうこく						
書 名	仙台市東农业大学関連区画整理事業関係道路発掘調査報告書						
図 書 名	平成 26・27 年度発掘調査報告書 屋敷田東道路第 1 次、下飯田東道路第 1 次						
巻 次	1						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 457 号						
編 著 者	森本隆						
編 集 機 關	仙台市教育委員会						
所 在 地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10 階 TEL: 022-2148894						
発 行 年 月	平成 29 年 2 月 28 日						
所取道路名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	道路番号	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
	種別	要 約					
屋敷田東道路 (1次)	仙台市若林区下飯田字屋敷東	4100	01323	38° 13' 13"	140° 57' 8"	2014.6.23 2014.8.11	35.0m ² 記録保存 (公文書)
	古墳	古墳~平安	古墳・溝跡・土坑	埴輪・土器	埴輪・土器	沿岸部における古墳の確認	
1 次調査では、古墳 2 基、溝跡 9 本、土坑 11 基、ビット 10 基を発見した。遺物は、埴輪、非クロコ土器器、クロコ土器器、埴輪器等が出土した。古墳のうち 1 基は円筒的可能性が高く、その年代は、周囲から出土した円筒埴輪の特徴から、古墳時代中期の 5 世紀後半を中心とするものと考えられる。直接に番塚田東道路では、古墳時代・中期における集落跡が発見されている。今回の調査では、周辺の道路を含めて、この地域における古墳時代を中心とする地土地利用の変遷を検討できる成果が得られた。							
下飯田東道路 (1次)	仙台市若林区下飯田	4100	01574	38° 14' 39"	140° 56' 26"	2014.8.18 2014.9.18	35.0m ² 記録保存 (公文書)
	集落跡	古墳~平安	住居跡・溝跡・土坑	土器器・埴輪器・灰陶器	飛鳥時代から奈良時代における集落跡を確認		
本道路は、今回の調査結果に基づき新規登録された。1 次調査では、堅穴住居 4 軒、溝跡 19 本、土坑 9 本、ビット 22 本、性格不明遺構 2 本、河川 2 通りが発見した。遺物は、埴輪、非クロコ土器器、クロコ土器器、埴輪器、灰陶器等が出土した。また、浜詰の配筋がりや河川の配置といった道路の構造を示す以上の成層が得られた。道路の土体となる土の層は 7 世紀末から 8 世紀前半とみられ、その時期を中心に考えると、それなりの堅穴住居の跡が発見された。堅穴住居跡の 1 本からは、閑倉地区との間わりが推定される遺物や施設が発見された。今後、この地域における仙台市野付への移動の波間に伴う社会変化を考える上で重要な成果である。							

仙台市文化財調査報告書第457集

仙台東災害復旧関連区画整理事業 関係遺跡発掘調査報告 I

－平成26・27年度発掘調査報告書－

2017年2月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉1丁目5-12

仙台市役所上杉分庁舎10階

文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区若三丁目1-14

TEL 022 (211) 22456
